

学術体制常置委員会報告

女性研究者育成の観点から見た
大学院教育の問題点

平成17年8月30日

日本学術会議学術体制常置委員会

この報告は、第19期日本学術会議学術体制常置委員会研究者養成分科会における検討結果を学術体制常置委員会において審議し、取りまとめた結果を発表するものである。

第19期日本学術会議学術体制常置委員会

委員長	金澤 一郎	国立精神・神経センター総長(東京大学名誉教授)
幹事	奥林 康司	摂南大学経営情報学部教授(神戸大学名誉教授)
	柴田 徳思	日本原子力研究所東海研究所大強度陽子加速器施設開発センター特別 研究員(東京大学名誉教授、高エネルギー加速器研究機構名誉教授、総 合研究大学院大学名誉教授)
	上坪 宏道	理化学研究所中央研究所加速器研究施設統括調整役
	唐木 英明	麻布大学客員教授(東京大学名誉教授)
委員	海老根 宏	東洋大学文学部教授
	大橋 謙策	日本社会事業大学学長
	外園 豊基	早稲田大学教育・総合科学学術院教授
	前田 専學	東京大学名誉教授
	伊藤 進	明治大学法科大学院長
	河野 正輝	熊本学園大学社会福祉学部教授
	川端 博	明治大学法科大学院・法学部教授
	櫻田 嘉章	京都大学大学院法学研究科教授
	熊田 禎宣	千葉商科大学政策情報学部教授(東京工業大学名誉教授)
	小林 哲夫	桃山学院大学経営学教授(神戸大学名誉教授)
	西村 可明	一橋大学副学長
	岩村 秀	日本大学大学院総合科学研究科教授(東京大学名誉教授、分子科学研究 所名誉教授、九州大学名誉教授)
	西田 篤弘	総合研究大学院大学理事(宇宙科学研究所名誉教授)
	吉原 經太郎	(財)豊田理化学研究所フェロー(分子化学研究所名誉教授、北陸先端科 学技術大学院大学名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授)
	芦田 讓	京都大学大学院工学研究科教授
	後藤 俊夫	中部大学総合工学研究所長
	小林 敏雄	(財)日本自動車研究所所長
	豊田 淳一	八戸工業大学大学院特任教授(東北大学名誉教授)
	梶浦 一郎	独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構果樹研究所所長
	北原 武	北里研究所基礎研究所部長・北里大学客員教授、帝京平成大学薬学部 教授(東京大学名誉教授)
	島本 義也	東京農業大学教授(北海道大学名誉教授)
	瀬崎 仁	大阪工大摂南大学学術顧問、京都大学名誉教授
	鶴尾 隆	東京大学分子細胞生物学研究所教授
	野澤 志朗	慶應義塾大学医学部教授

第19期日本学術会議研究者養成分科会

主査	唐木 英明	麻布大学客員教授(東京大学名誉教授)
副主査	小林 哲夫	桃山学院大学経営学教授(神戸大学名誉教授)
委員	前田 専學	東京大学名誉教授
	河野 正輝	熊本学園大学社会福祉学部教授
	岩村 秀	日本大学大学院総合科学研究科教授(東京大学名誉教授)
	豊田 淳一	八戸工業大学大学院特任教授(東北大学名誉教授)
	瀨崎 仁	大阪工大摂南大学学術顧問、京都大学名誉教授
	金澤 一郎	国立精神・神経センター総長(東京大学名誉教授)

以下の方々は、資料提供、審議参加、報告取りまとめなどで協力を得た。

本田 和子	お茶の水女子大学名誉教授
相馬 芳枝	日本学術会議化学研究連絡委員会委員、男女共同参画学協会連絡会第3期委員長

会議開催記録

第19期日本学術会議学術体制常置委員会

- 第1回委員会:平成15年 7月23日、24日
- 第2回委員会:平成15年 9月30日
- 第3回委員会:平成15年10月31日
- 第4回委員会:平成16年 2月17日
- 第5回委員会:平成16年 4月21日
- 第6回委員会:平成16年 9月 6日
- 第7回委員会:平成16年10月28日
- 第8回委員会:平成17年 2月10日
- 第9回委員会:平成17年 4月21日
- 第10回委員会:平成17年8月19日
- 第11回委員会:平成17年8月29日

第19期日本学術会議学術体制常置委員会研究者養成分科会

- 第1回委員会:平成16年 4月21日
- 第2回委員会:平成16年 9月 6日
- 第3回委員会:平成17年 4月21日

要 旨

1 報告の名称

女性研究者育成の観点から見た大学院教育の問題点

2 報告の内容

(1) 作成の背景

研究者の配置には明らかな男女差がある。役職だけでなく、部下の数や研究資源の配分にも大きな格差があり、女性は相対的に不利な立場におかれている。日本学会議学術体制常置委員会は「若手研究者の養成」のための施策に取り組んできたが、今期は女性大学院生の問題を取り上げ、男女大学院生を対象にアンケート調査を行い、女性研究者育成の観点から見た大学院教育の問題点を明らかにすることを試みた。

(2) 現状及び問題点

女性大学院生が抱える問題点は多く、教員や男性大学院生による差別、女性問題についての無理解や無関心、出産や育児への理解も支援もないこと、理工系では長時間の実験による体力の消耗、文系では就職先の少なさなど、多くの問題点が明らかになった。

(3) 改善策、提言等の内容

我が国の学術の振興のためには、多様な女性研究者の力を積極的に活用することが不可欠である。そのためにも女性大学院生の問題を解決することが必須であり、以下の提言を行う。

- 1) 入学希望の学生に対する大学院及び大学院生活についての十分な情報開示、大学院生に対する奨学金制度の充実、そして教員の資質と意識の向上に向けて、一層の努力を行うべきである。また、理工系では実験の時間が長く、体力が必要である状況は、女性だけでなく男性にも負担が大きい。また、文系では就職先の少なさが男女共に大きな問題である。これらの問題の検討と改善のための真剣な努力が求められる。
- 2) 大学院生の結婚・出産・育児支援の早急な充実が望まれる。具体的には、男女双方への育児支援の奨学金給付、大学内保育所の設置、出産・育児休学制度と復帰の支援などである。
- 3) 女性の大学院進学を妨げる一つの要因である、女性研究者と女性教員のあまりの少なさを解消するためには、女性雇用目標値の設定が有効であるが、これは単なる努力目標ではなく、より実効あるものにする必要がある。
- 4) 一部の教員や男性大学院生には女性問題についての無関心や無理解があり、女性大学院生も女性研究者の現状を必ずしもよく理解していないことが伺われた。大学教員と大学院生を対象に、女性研究者の問題について説明を行い、女性雇用目標値設定の必要性などについて理解を得ることが重要である。

目 次

1. はじめに.....	1
2. アンケート実施方法.....	3
3. 大学院生が指摘した問題点 - アンケート結果のまとめ -	4
4. 提言.....	10
5. 大学院生 107 名からの回答.....	11
6. 参考資料.....	101
1) アンケート依頼文及び調査事項.....	101
2) 委員の意見.....	103
(1) 女性研究者育成の観点からの大学院教育の問題点.....	103
(2) 女性院生の研究支援.....	108
(3) アンケート結果の分析.....	110
3 - 1 集計に関する覚書.....	110
3 - 2 アンケートの分析.....	112
(4) アンケート結果を読んで.....	139
(5) 分野による女性大学院生の視点の違い.....	143
(6) 前向きな女性大学院生を挫折させないために.....	144
(7) 女だからと言う理由で排除されない環境づくり.....	145
(8) 大学院教育における女性研究者育成の現状と課題.....	148
(9) 男女共同参画推進活動の現状.....	153
3) 関連の報告と資料.....	155

1. はじめに

日本学術会議学術体制常置委員会は、「若手研究者の養成」をテーマとして検討を行っているが、第18期において「創造的な若手研究者を養成するために - 基本的考え方と日本の現状の問題点 - 」と題する対外報告を行い、その中で概略以下の提言を行った。(1)競争的研究資金の配分審査にあたるレフェリー層の充実のためのデータベース整備と、レフェリー母集団の国際化。(2)優秀な若手研究者への潤沢な研究費配分と、研究推進の大幅な自律性を認める措置。(3)先端的な若手研究者への国際的な研究・教育ネットワークへのアクセス機会の競争的提供。(4)若手研究者の研究課題の選択の自由度、研究組織間の移動の自由度、競争的研究助成の充足度を高めることにより、処遇の改善をはかる。(5)優遇措置に相応しい研究課題を選定する手続きは、厳正な審査機構に支えられた競争メカニズムによって行う。(6)先端的な研究プロジェクトの分担・補助作業に従事する若手研究者層には、その貢献に応じて研究助成金の伸縮的・競争的な配分を認める。(7)若手研究者の就職を円滑にするために、制度的な援助措置を整備する。

このように、第18期においては優秀な若手研究者を育てる方策に主眼を置いたが、第19期においては、若手研究者の裾野を広げることを視野に入れて、女性研究者の問題を取り上げることとした。

その背景として、平成12年6月8日に日本学術会議が内閣総理大臣に宛てた要望書「女性科学者の環境改善の具体的措置について」がある。そこでは以下の8点を要望している。すなわち、1)大学・研究機関は、毎年、教員・研究職・管理職等の男女比率を調査・公表し、また、その動向変化について分析を行うこと。大学にあっては、受験生・入学生・卒業生・学位取得者及びその進路等についても、同様の調査を行い、動向分析とともに公表すること。2)政府機関の調査研究費(文部省科学研究費を含む)や諸研究機関における特定研究経費により「学術における男女共同参画を促進するための研究・教育プロジェクト」など、目的を限定した予算項目を設定すること。3)研究者に対する育児援助(例えば、保育費の補助、学会等の開催時における保育室の開設、大学や民間を含む研究機関での保育所の設置、保育者雇用のための補助等)を充実させること。育児休暇・育児休業中の研究者への一時的在宅研究制度・家事支援のための費用補助、育児休暇・育児休業後の研究再開奨学金など、研究を継続できる新しい制度を作ること。4)人事選考の仕組みを改善すること。例えば、教育・研究職の補充において、当該分野における大学院学生数・学位取得者数の男女比率の推移なども考慮して、女性研究者が適切に選任されるよう配慮すること。特に女性研究者の比率の低い分野にあっては、特別な配慮が必要である。また、女性研究者の教授や管理職への昇任を積極的に推進すること。そのために、人事選考委員会に女性委員を加える等の工夫をすること。5)セクシュアル・ハラスメント防止のための諸制度倫理綱領相談室提訴委員会、罰則規定等を整備し、実態を公表すること。6)文部省科学研究費補助金の申請条件を改善すること(大学等の常勤研究者に限定する現状の規定は女性研究者に不利になっている。例えば非常勤教員等にも申請できるよう門戸を広げる措置が必要である)。7)学協会は、役員・会誌編集委員・論文審査委員等を選任する際、男女の会員比率を尊重すること。女性会員が未だ少ない学協会においては、意識的に女性会員が役員として選任されるよう配慮すること。女性会員の海外研修・国際会議への参加、年会や会誌での発表機会が増加するよう奨励

すること。8)公私の別なく、研究者が自ら希望する名称(旧姓、通称名など)を使用できるようにすること。

また、平成13年3月に閣議決定された第2期科学技術基本計画では、人材の活用と多様なキャリア・パスの開拓が取り上げられ、その1項目として女性研究者の環境改善が挙げられている。

女性研究者の実態を知るための調査として、平成15年度文部科学省委託事業として男女共同参画協会連絡会が実施した調査研究があるが、これは平成15年に行われ、39の理工系学協会会員19,291名の回答を分析したものである。その結果から、同協議会は以下のような問題点の提示と、その解決のための提言を行っている。その概略は以下のとおりである。*

1) アンケートにより明らかになった点

・男女を問わず、技術者・研究者の大半は主体的、積極的に現在の職業を選択している。また、研究開発に必要な要件についての性別による意識差はほとんどない。予算・設備・期間などの基本的な研究リソースに加えて、テーマに長く取り組める環境と研究開発の自由度を求める意見が多い。一方、多くの技術者・研究者が「職場環境の整備」や「仕事と家庭の両立」を通じて男女共同参画を推進すべきであると考えている点は注目に値する。仕事のみでなく家庭や地域社会とのかかわりを重視する視点は尊重されるべきであると考えられる。

・科学技術分野においても明らかな男女の処遇差が存在する。役職の男女差だけでなく、部下数や研究・開発費のような仕事に必要なリソースの配分においても役職以上に大きな男女間の格差が存在し、女性は相対的に不利な立場におかれている。女性の社会進出を推進するための施策によって、企業では処遇の改善が見られるものの、育児休職取得後の処遇についての不満や、部下数、研究・開発費の合理性のない格差など、多くの問題が見受けられる。大学等・公立研では役職の男女格差が極めて大きいだけでなく、研究リソースの配分においてさらに大きな格差が存在する。女性研究者の多大な努力が報いられているとはいえない現状である。

・女性のみならず家庭との両立を強いる社会背景が上記の男女格差の原因の一つであると考えられる。女性技術者・女性研究者が男性と比較してはるかに少ない数の子供しか持てない現状は異常ともいえる。技術者・科学者や指導的地位に女性が少ない理由として「家庭との両立が困難」があげられるのは、男女の役割分担が固定化されて家事・育児が女性任せになってきた、その結果である。多くの女性が、男女共同参画社会実現のための要件として「男性の意識改革」と「男性の仕事と家庭の両立」を、指導的地位に女性が少ない理由として「評価者の男性を優先する意識」をあげたことに注目すべきである。

・任期付職の運用に改善の余地がある。育児などでいったん仕事を中断した技術者・研究者が復帰する際の有効なステップとして利用されている(利用される可能性がある)ことを考えると、合理性のない年齢制限は望ましくないと考えられる。また、任期付職非常勤職にある研究者は、研究費の面で常勤研究者と比較してあきらかに不利な扱いを受けている。これは自由な研究の機会を制限する恐れがあり、問題である。

*男女共同参画学協会連絡会報告書 21世紀の多様化する科学技術研究者の理想像 -男女共同参画推進のために- 平成16年3月 <http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>

2) 一口に科学技術専門職といっても、その目指すところは個人個人で異なっており、その価値観は様々である。男女を問わず、多様な選択肢が用意されていることが望ましい。われわれは、上記の調査結果に基づき、性別によらず多様な価値観が認められていかされる真の男女共同参画社会の実現を目指す立場から、以下の提言をおこなう。

- ・育児休職など、仕事と家庭の両立に必要な休業を取得しやすい環境作りが望まれる（特に大学等・公立研では早急な対策が必要である）。また、過度の男女の役割分担を是正するために、男性の家庭・地域社会へのコミットメントを推進する必要がある。育児休職の取得などを通じてこうした家庭・地域への貢献を推奨することを提案する。

- ・採用、昇進などの評価に際しては、性別による区別をさらに徹底して排除すべきである。また、科学技術分野のように著しく男女の均衡の崩れている分野では、女性比率が少ないこと自体が女性の能力発揮を制限してしまう可能性があることを、指導的立場にある人々は認識すべきである。

- ・各種の任期付ポスト（あるいは非常勤ポスト）において、合理性のない年齢制限を撤廃すべきである。男女を問わず、再チャレンジの重要なステップとしての活用に配慮する必要がある。

- ・非常勤職の研究者の主体的に研究する自由を保障するために、研究助成制度を拡充すべきである。特に、研究リソースの配分で不利な立場に立つことの多い女性研究者への一層の配慮を要望する。

平成 17 年 8 月には、日本学術会議分子生物学研究連絡委員会と生物物理学研究連絡委員会が共同で「科学者・技術者の人材のさらなる活用を図る男女共同参画制度の整備について」を取りまとめ、以下の提言を行っている。

1. 研究者・技術者の女性比率に数値目標を設定。
2. 競争的な公募によって創意ある施策を募り、資金を重点的に提供する「男女共同参画モデル事業」の創設。
3. 完全な休業のかわりに大幅な短縮労働を認める「短時間勤務選択制度」の整備。
4. 育児等による業務効率の低下が研究室の他の構成員の負担増加にならないよう、業務を代替・補佐する人材を配置する制度の整備。
5. 任期の延長や各種年齢制限の緩和、自分のペースで研究できるフェローシップ型研究費制度、施設内託児施設の充実など、育児や介護中あるいは終了後の研究者・技術者へのきめ細やかな支援制度の整備。
6. 男女共同参画の諸施策の実施を統括し、職員からの相談に応じ、意識改革を促進するための第三者によるコーディネーターの設置。

女性研究者の問題は、内閣府「平成 16 年度男女共同参画白書」などでも取り上げられ、詳細な分析が行われている。また、我が国の学術の振興のためには、多様な女性研究者の力を積極的に活用することが不可欠であることは繰り返し指摘されている。

しかし、これまでに女性大学院生の問題についての調査は見当たらない。そこで、本委員会の今期の活動として、大学院における女性研究者育成の問題を取り上げることにし、今期はその問題点を把握するためにアンケート調査を実施することとした。

2. アンケート実施方法

アンケートの実施方法は以下のとおりである。理工系 4 研究科、人文社会系 3 研究科を任意に選び、所属の教員に以下の依頼を行った。留学生及び専門職業系の大学院コースの院生を除き、

それぞれの研究科に所属する女性が5名以上になるように対象者を選ぶこと。そして、女性が20名までは全員を対象とし、それを超えた場合には超えた分5名につき1名の割合で対象人数を増やすという方針で人選をすること。男性と女性がほぼ同数となるように、また、所属研究室などの偏りがないように、ランダムに選ぶこと（その方法は依頼した教員に一任）。さらに、回答者のプライバシーを守るために、回答は無記名とし、郵送またはメールにて日本学術会議事務局に送ること。メールアドレスは日本学術会議事務局において削除し、個人名の漏洩がないよう留意した。アンケートの実施時期は平成17年1月から2月である。

その回答の内容について、研究者養成分科会副主査である小林哲夫委員が男女別に詳細に分析を行った。また、各委員がアンケート結果から問題点を抽出した。

アンケートでは、教員の指導能力、奨学金、就職など、大学院が持つ多くの問題点が指摘されたが、ここでは女性大学院生がもつ問題点に絞って検討した結果、以下のような問題が指摘された。

3. 大学院生が指摘した問題点 - アンケート結果のまとめ -

1) 1 性別

女性56名、男性51名、合計107名から回答が寄せられた。

1) 2 専門分野、学年

文系61名（女性29名、内修士17名、博士11名、不明1名。男性32名、内修士17名、博士14名。不明1名）

理工系46名（女性27名、内修士12名、博士15名。男性19名、内修士2名、博士16名、不明1名）

2) 1 あなたが大学院に進学をした理由はなんですか。進学をためらったことがあれば、その理由はなんですか。

多くの答えが「研究・勉強がしたいため」であった。

女性では56名中8名が「進学をためらった」と記載しているが、その理由は就職の不安が6名、経済的問題が2名であった。

その他の理由として、「女性が少ない世界で、女性であることの不利さがあるかもしれない」、「婚期が遅れること」、「女ということもあり反対された」、「後期課程の時は女子が自分一人だった」などの記載があった。

男性では51名中10名が「進学をためらった」と記載し、その理由は就職の不安が3名、経済的問題が6名であった。

進学した大学院生を対象にしたアンケートなので、この傾向は理解できるが、進学をあきらめた学生がどのような理由だったのかについてはさらに調査を要する。そして、そちらの方からより深刻な問題が浮き上がることが予測される。

2) 2 進学についての家族などの理解・経済的支援はありましたか。

ほとんどの大学院生が家族の理解と経済的支援を得ていた。

しかし、「経済的支援を得ていない」という答えが、女性で56名中9名、男性では51名中10名あった。

家族の支援を受けていない20%近い大学院生が奨学金だけで生活を支えているとは考えられず、研究の時間を割いてアルバイトをしなくてはならない大学院生も多いと予想される（これも調査が必要）。

さらに、日本の科学技術を支える若手研究者及びその卵である大学院生の生活が、家族の支援で支えられている現状がよいことなのかも考えなくてはならない。

2) 3 大学院の入試を受ける時点で、カリキュラムや研究内容以外に、どのような情報があったら良かったと思いますか。

男女、専門にかかわらず、「研究者となる道程/学位取得後の進路（OD率、就職状況など）に関する情報」を求めていた。これに「指導教員の指導方針や研究室にかかわる情報」と「奨学金・科研費・学振等による経済的支援に関する情報」が続いた。

オープンキャンパスの実施など、大学院及び大学院生活に関する情報の公開を、さらに十分なものにすることが望まれる。

3) 学生（特に女子）の理工系離れが深刻になっていますが、あなたは出身学部と現在の大学院は理工系か文系かをご記入の上、もし同じなら、同じ系の大学院を選んだ理由を、もし違うなら、なぜ違う系を選んだのかを書いてください。

ほぼ全員が学部と同じ系の大学院に進学していた。「学部で学んだことをさらに深めたかった」という理由が多かったが、「当然のことなので特に考えなかった」という答えもあった。

ただ一人だけ、学部で数学を学んだが、能力の限界を感じて文系に進学したという答えがあった。

学部で学んでいるうちに、学問の幅広さに気付いて、違った系に進学する例があるのではないかと予想は外れ、文系と理工系の壁の厚さを改めて感じさせる結果であった。大学入学時に選択した専門がそのまま変わることがない、あるいは変えることが困難であるという現状が良いのかは、改めて考える必要がある。

4) 1 進学後、以下の点についてなにか問題や、改善すべき点がありましたか。大学院一般の問題と、女性の問題を分けて書いてください。

< 指導教員の対応、研究テーマの決定、奨学金の状況、結婚・出産等の問題、育児休暇後、復帰して研究を続けることが可能か、大学の支援体制の有無とその充実度、その他 >

< 大学院一般の問題 >

「指導教員の対応」に問題ありと答えた女性は 56 名中 17 名、男性は 51 名中 14 名、「奨学金やその他の経済的支援のあり方」に問題ありと答えた女性は 17 名、男性は 22 名だった。

「指導教員の対応」については、指導力の不足、高圧的な態度、進学への押し付け、差別など、教員の資質の問題が指摘され、かなり深刻な例も見られた。

「奨学金やその他の経済的支援のあり方」については、額と受給者の増加、返済免除の範囲の拡大の要望があった。

「大学の支援体制」については、学内情報伝達の不備や、就職に対する支援体制の不備、事務担当者の能力不足などが指摘された。

< 女性の問題 >

「指導教員の対応」に問題ありと答えたのは女性 11 名と男性 3 名。「結婚・出産・育児休暇後の復帰」には女性 15 名、男性 3 名が問題ありと答えた。

他方、56 名中 24 名の女性と 51 名中 26 名の男性が、女性の問題は「特になし」と答えている。

「指導教員の対応」については、「完全な男社会」、「差別やひいき」、「セクハラに近い言動」、「女性に優しすぎる」などの厳しい意見が並んだ。

教員のほとんどが男性で、女性大学院生の扱いに慣れておらず、うまく対応ができていない現状もまた垣間見えた。

「結婚・出産・育児休暇後の復帰」については、まだ自分の問題として身近に感じている女性は少ないが、将来の問題として不安を訴える声が多かった。

育児を行っている女性からは、大学敷地内に託児所がほしいとの訴えがあった。

その他に、女性用の鍵がかかる更衣室がない、女性用の宿泊施設がないので実験に行けない、保健管理センターに女医がない、女子トイレが少ないなどの訴えもあった。

4) 2 あなたは大学院に進学をしてよかったと覚っていますか。後輩の女子学生に大学院進学を勧めますか。その理由も書いてください。

「大学院に進学をして良かった」と答えた女性は 56 名中 45 名、男性は 51 名中 38 名であり、約 80% が進学して良かったと答えている。残りの 20% が良かったとは思っていない理由は、前項の質問等への回答から推測される。

「後輩の女子学生に大学院進学を勧める」と答えた女性が 28 名、「勧めない」、「どちらともいえない」が 26 名、男性では「勧める」が 28 名、「勧めない」、「どちらともいえない」が 26 名で、約半々であった。

「勧めない理由」として、女性からは「高学歴の女性は嫌われる」、「男女関係のトラブル」、「女性にはきつい世界」、「就職が女性に不利」、「差別といわないまでも、性別に基づいた判断がされる」、「婚期や出産が遅れる」、「大学院が産後を支援する態勢を持たない」、「任期制の職も産後や育児休暇を取ると結果を残すのが困難」など、多くの記載があった。

男性からは、「女性の学習環境が良くなるきっかけになるから、どんどん入ってきて欲しい」、

「大学研究者は魅力的な職業だから、進学を勧めている」、「これからの研究室の雰囲気次第で勧める」などの意見と共に、「難しい研究を行っている女性に対して社会の理解がないので、勧めない」という意見もあった。

4) 3 あなたの身の回りに、相談に乗ってくれるような大学院卒業の女性がいますか。そのような人がいたら相談をしたいことがありますか。それはなんですか。

「相談に乗ってくれる大学院卒業の女性がいる」と答えた女性は 32 名、「いない」が 24 名だった。

「相談したいことがある」という女性は 36 名、「ない」が 7 名だった。

「相談したいこと」は研究、恋愛、結婚、出産、復帰、人間関係など多岐に渡った。

4) 4 女性研究者が少ない理由は、男性の意識（家事・育児参加が少ない、女性の能力への偏見等）、女性が働きにくい職場環境、仕事と家庭の両立支援策がないことなどがあげられていますが、これに似た状況は大学院にも見られますか。もしあれば、具体的に書いてください。

女性大学院生が少ない理由が大学院に「ある」と答えたのは女性 18 名と男性 12 名、「ない」と答えたのは女性が 22 名と男性が 33 名であった。

「男性の意識」については、「女性蔑視」、「出産、育児は女性の仕事」などの指摘があった。

「研究環境」については、「長時間の研究を求められる」、「育児の援助がない」などの指摘があった。

5) 1 卒業後の就職の状況はどうですか。男女で就職状況・就職先に違いがありますか。

「男女で差がある」という答えは、女性 26 名、男性 12 名、「差がない」という答えは女性 19 名、男性 25 名で、男女差が大きかった。

男女差については、「女性で大学など研究職についた人はいないが、男性はみなどこかの講師になっている」、「女性は非常勤になりがち」、「研究者として就職した女性の方が、あれは女性枠だと噂された」、「修士卒で一般企業内定者の大半が男性という場合がある」、「業界によっては就職のやすさに男女差がある」、などの指摘があった。

他方、男性からは、「統計的には女性の方が職に就きにくいのかもかもしれないが、それがジェンダーのためなのか、能力のためなのか自分には判定できない」、「研究職、教授職に就くことは極めて難しいのは男女にかかわりない」、「女性研究者を増やそうという動きが男性研究者の逆差別につながらないか」、「最近では女性の方が就職しやすいということをよく聞くので正直残念」、「博士課程卒業生の就職状況に関しては、男女間での差異はあまり感じたことはない」などの意見があった。

就職先を争うという厳しい状況では、周りのすべてが敵という気持ちになることはよく理解できるし、男性側にそのような意識が働いた答えともとれる。

5) 2 就職に関する問題が何かありますか。男女共通の問題と、女性の問題を分けて書いてください。

< 共通の問題 >

就職に問題を感じている女性は 41 名、男性は 30 名、特に問題を感じていない女性は 7 名、男性は 10 名で、ほとんどの大学院生が問題を感じていた。

具体的には、「修士論文と就職活動の両立が困難（とくに学生を研究の道具としか見ない教員がいる場合）」、「年齢制限」、「実力ではなく教授のコネで決まる」、「就職先を巡る足の引っ張り合い」、「不安定な任期（任期付雇用）」、「ポスト（特に教員ポスト）の少なさ」、「修士号や博士号が就職時のメリットにならない」などの声があった。

< 女性の問題 >

女性の就職が男性より困難と答えたのは女性 35 名と男性 15 名、問題はないと答えたのは女性 11 名と男性 23 名で、男女差が大きかった。

具体的には、「機会は平等といいつつ、結局は男性の採用が多い」、「女性の方が生活に困っていないとみなされる」、「結婚して子供がいると就職がしにくい」、「女性は特に年齢を問題にされる」、「採用側の方針が明らかにされていない」などの問題が指摘された。

他方、男性の意見からは、この問題を良く知らない、あるいは興味がないことが見て取られた。

6) 1 女性大学院生の数が少ない理由は何だと思えますか。女性研究者を増やさなくてはならないと考えますか。もし増やすとすればどの程度ですか。現在、30%という目標値がありますが、この数字をどのようにお考えですか。

女性大学院生が少ない理由として「研究や学問への興味の問題」と答えたのは女性 17 名、男性 10 名、「結婚、出産、育児」と答えたのは女性 11 名、男性 4 名、「社会の考え方」と答えたのは女性 14 名、男性 16 名で、女性は「結婚、出産、育児」を重視し、男性はそう考えていないことが見られる。

「女性研究者を増やしたほうがいい」と考えるのは女性 56 名中 12 名、男性 51 名中 15 名だが、文系と理工系に分けると大きな差があり、文系では 61 名中 21 名、理工系 46 名中 6 名だった。

「増やすべきだと思わない」という答えは女性 56 名中 33 名、男性 51 名中 26 名、文系では 61 名中 24 名、理工系では 46 名中 35 名だった。

数値目標の設定について賛成は女性 11 名、男性 8 名、反対は女性 31 名、男性 30 名で、男女共に両論があったが、反対の数が多かった。

これについては「環境を整えれば、女性研究者の数は自然に増える」という意見と、「環境を

整えるためにも女性研究者の数を増やすことが必要」という双方の意見があった。

男性からは、「女性には目標意識が少ない」、「男性研究者への逆差別」、「単に女性が研究者を志向していないだけ」、「昔から学問は男が担ってきた」などの意見も見られた。

6)2 女性大学院生の数を増やすためには何を変えたらいいですか。科研費などの研究費、奨学金、各種の賞に女性を対象としたものを設けること、教員・研究領域に一定数の女性を確保するための目標値を設定すること、男女を対象にした育児支援型の奨学金を設けることをどのように考えますか。

支援や賞に女性枠を設けることに賛成した女性は11名、男性は10名、反対した女性は26名、男性は31名で、男女共に反対の方が多かった。

反対の理由は、あくまで能力で評価すべきであり、「制度自体が女性を劣位とみなす」、「新たな差別を生む」、「正当な評価をゆがめる」などであった。

一方、受賞している女性は出産、育児後の復帰が容易になるのではないかという期待感もあった。

目標値の設定については、賛成の女性が11名、男性が5名、反対の女性が22名、男性が32名で、男女共に反対の方が多かったが、特に男性の反対が多かった。

反対の理由は「平等な採用の障害になる」、「逆差別になる」などであった。女性枠の設定は限られた資源の配分の不公平と捕らえる男性が多いようであり、女性研究者の現状をほとんど知らないことも伺われた。また、差別があることを知りながらも、機会さえ均等に与えられれば、優遇措置がなくても、実力でやっていけるという若者らしい気概も見られた。

一方、教員・研究領域に一定数の女性を確保することが必要とする意見もあった。

育児支援制度については賛成の女性が39名、男性が25名、反対の女性が4名、男性が12名で、男女共に賛成が多かったが、特に女性の賛成が多かった。

7) その他、この問題についてのご意見がありましたら、自由にご記入ください。

多くの意見が寄せられたが、その内容は「5. アンケートへの回答」を参照されたい。

全体を通じて、男女を問わず、女性研究者問題についての一定の理解が見られた。しかし、同時に、教員や男子大学院生に、女性研究者問題に対する無理解と無関心があることが伺われた。また、女性大学院生からも、女性研究者の実情をよく知らないのではないかとと思われる意見が寄せられている。目標値の設定については、大学院生の間に賛否両論があるが、社会人に対するアンケートでは賛成が多く、このような対策の有効性が示されていること（日本学術会議分子生物学研究連絡委員会、生物物理学研究連絡委員会報告「科学者・技術者の人材のさらなる活用を図る男女共同参画制度の整備についての提言」（平成17年8月）など）から、教員及び大学院生に対して目標値設定の意義と有効性について十分な説明を行うことが必要であると考えられた。

4. 提言

我が国の学術の振興のためには、多様な女性研究者の力を積極的に活用することが不可欠である。そのためにも女性大学院生の問題を解決することが必須であり、以下の提言を行う。

- 1) 入学希望の学生に対する大学院及び大学院生活についての十分な情報開示、大学院生に対する奨学金制度の充実、そして教員の資質と意識の向上に向けて、一層の努力を行うべきである。また、理工系では実験の時間が長く、体力が必要である状況は、女性だけでなく男性にも負担が大きい。また、文系では就職先の少なさが男女共に大きな問題である。これらの問題の検討と改善のための真剣な努力が求められる。
- 2) 大学院生の結婚・出産・育児支援の早急な充実が望まれる。具体的には、男女双方への育児支援の奨学金給付、大学内保育所の設置、出産・育児休学制度と復帰の支援などである。
- 3) 女性の大学院進学を妨げる一つの要因である、女性研究者と女性教員のあまりの少なさを解消するためには、女性雇用目標値の設定が有効であるが、これは単なる努力目標ではなく、より実効あるものにする必要がある。
- 4) 一部の教員や男性大学院生には女性問題についての無関心や無理解があり、女性大学院生も女性研究者の現状を必ずしもよく理解していないことが伺われた。大学教員と大学院生を対象に、女性研究者の問題について説明を行い、女性雇用目標値設定の必要性などについて理解を得ることが重要である。

5. 大学院生 107 名からの回答

回答者番号：1

- 1) 1 男
 - 2 理工系 博士課程3年
- 2) 1 細胞生物学の研究者になりたかったから。進学をためらったことはありません。
 - 2 修士課程までは、仕送りをもらっていました。
 - 3 特にありません。
- 3) 出身：理工系 現在：理工系
大学学部時代から、生物学に興味があったから。
- 4) 1 【大学院一般】授業料の免除基準が、親の経済状態というのが、大いに疑問だった。
【女性の問題】特にありません。
 - 2 進学してよかった。自分にとって過ごしやすい環境だったから。後輩には、その人が研究職に就きたいという強い希望があって、資質も備わっていれば勤めます。
 - 3 いる。学業一般、及び人生設計について相談したい。
 - 4 女性の大学院生のうち、研究者になる人の比率は、男性より低いのでしょうか？もともと、大学院生のなかで女性が少ないのでは？
- 5) 1 違いはないと思う。
 - 2 【男女共通】一般に、就職活動に要する時間が長すぎる。
【女性】特にありません。
- 6) 1 生物学の分野で、女性大学院生の比率が低いのは、大学入学、いや、高校の理系文系を分けた時点から理系の女性比率は少なかったからだと思う。増やさなくてはならない、とは思いません。
 - 2 高校の理系文系を分ける時点で、理系の女性比率を増やせば、生物学の女性大学院生の数は増えると思う。
- 7)

回答者番号：2

- 1) 1 男
 - 2 理工系 博士課程1年
- 2) 1 自分の昔からの夢をかなえる道であると判断したから。ためらってはいない。
 - 2 皆私に判断を一任してくれ、経済的にも完全にバックアップしてくれた。
 - 3 難しいが、研究室内の雰囲気を知ることができればよかった。
- 3) 出身学部 理工系 / 現在の大学院 理工系
やりたいことからみると、この選択が最良と思えたから。
- 4) 1 【大学院一般】全て問題ないと思う。
【女性の問題】特に関連がある結婚、出産、育児休暇において、問題は感じられない。休んだだけ研究が遅れるが、それはしかたのないこと。代わりにどうかできる問題ではない。

- 2 特に将来専門職につく意思がないのであれば、勧めない。これは男女関係なく私が答えるであろうこと。
 - 3 いない。特に相談したいことはない。
 - 4 私の周りに限って言えば、みあたらない。
- 5) 1 博士課程まで行くと、少し女性の一般企業への就職が難しくなるような話は聞いたことがある。
- 2 【男女共通】修士、博士と進むにつれ、当然ではあるが専門職以外への就職は限られてくる。
【女性】やはり女性ということで、一般企業は敬遠する傾向にあると思う。
- 6) 1 研究職に興味を持つ女性の絶対数の少なさに起因すると思われる。なぜ性比を変えなくてはいけないか分からない。質の高い研究者なら、男女どちらでもかまわないであろう。
- 2 女性雑誌での特集をくむ。つまりはイメージを良くする。女性関連の企業直結の大学院を作る。色々な女性優遇の措置の波及効果を測定する目的で、女性を確保する目標値を定めても良いと思う。育児支援の奨学金をもうけることには賛成である
- 7) 大学院まで来ると、精神的にはかなり完成されていると考えられる。そのような状態で、環境を変えても、底上げにはつながらないと思う。もし、女性を研究の場に送り込みたいのなら（なぜそうしたいのか真意はつかめないが）もっと小さいときから、子供が「将来はお嫁さん」「お花屋さん」「スチュワーデス」というところから研究にたいするプラスイメージを教育すべきであると私は考える。

回答者番号：3

- 1) 1 女
 - 2 理工系 博士課程2年
- 2) 1 研究者を志望していたから。国の研究機関で研究をしていきたくかったから
 - 2 授業料、生活費などを支援してくれた。しかし現在は、学術振興会の特別研究員の給与で生活費をまかない、授業料だけ親に支援してもらっている。進学への理解は十分にあった。
 - 3 ドクター取得後の進路。ドクター取得の難易度みたいなもの（やる気が不十分な人が修士課程から無条件に博士課程に進学できるのはドクターのレベル低下につながると思います。）
- 3) 学部 理工系 大学院 理工系

大学に入学する時点で、将来の志望はほぼ固まっていた為。
- 4) 1 【大学院一般】

【女性の問題】ドクター取得後の進路について性的差別は多くある気がする。ポスドクは女性には体力的精神的に厳しいから、企業の研究所にするようにアドバイスをうけたが、企業は男女雇用機会均等ではあるが雇用均等ではないと思う。

 - 2 一応好きな事をやっているの、諸問題はあるが進学してよかったと思う。私は女性の先輩にドクター進学はしないほうがいいとアドバイスをもらったが、アドバイスされても意志はかわらなかった。進学を迷うようなら研究者としてやっていけないと思うので、大学院進学を迷っている後輩には勧めない。大学院に進学して研究者になりたいという目的意識が高い後輩には勧めると思う。
 - 3 いない。博士号を取得した男性の先輩は多いが、女性は少ない為。また、取得した女性の先輩で参考にしたいような進路に進んでいる人がいないため。相談したいことは、結婚出産家庭と仕事を両立する方法。産休で例えば5～6年休んでも、研究に復帰できるのかどうか。

- 4 大学院に関しては、学ぶ立場であるので、女性への支援はあまり必要ないと思う。むしろ、女性で大変だからとかいう偏見で、審査を甘くして容易に学位をとれるのが、女性に対して失礼だと思う。おまけの学位取得者がいることが問題である。
- 5) 1 ポスドク先の国の研究機関に関しては、違いはないと思う。
- 2 【男女共通】ポスドク先はあるものの、ポスドク余りの現状であるらしいので、その次の進路がない。期限付き雇用が氾濫していること。
- 【女性】企業の研究職に関しては、不景気であるため、雇用機会均等法を就職案内にアピールしていても、実際は雇用均等ではないと思われる。
- 6) 1 女性大学院生の数が少ない理由は特にないと思う。進学していない女性は単に進学したくないからだと思う。そこに男女の差はないと思う。
- 女性研究者を増やさなければならないという対策は、男女平等に能力を比較してほしいという程度におさめ、女性の役職は何%とかいう規定をつくると、義理で役職につく女性が増え平等ではないと思う。30%という目標値は妥当であると思う。
- 2 研究内容に関しては、男女が同じ土俵でたたかう事が相応しいと思うので、女性用の賞があるのは、女性にしてはがんばったというような差別を感じる人がいるかもしれない。しかし、研究以外での支援、育児支援と産休の確保などは、女性に対して十分に行われてもいいと思う。
- 7)

回答者番号：4

- 1) 1 女
- 2 理工系 博士課程2年
- 2) 1 研究者になることが幼い頃からの夢だったため。研究が好きだから、職業につなげたかったから。
- 2 理解あり。学費、下宿費など経済的支援あり。
- 3 教授の(各教室の)教育方針や女子学生、男子学生、女性研究者、男性研究者に対する考え方を文章で読めたりすると良かったと思います。研究内容だけでは自分にあった教室とは限らないと思います。スタッフの考え方や環境が自分に合わないところが理由で部屋去っていった学生もいます。
- 3) 出身学部 理工系 現在の大学院 理工系
- 学問を極め、職業としたかったため。
- 4) 1 【大学院一般】指導教員の対応...平等性に少々欠ける。個人を尊重してもっと自由にさせて欲しい。研究テーマの決定...希望どおりのことができない。研究室の宣伝とは食い違うところがあった。経済的な問題...免除申請などで独立家計を証明しても、親兄弟の源泉徴収を出させるのはおかしい。書類をたくさん出させた挙げ句、不可にするなら簡単な第一次審査など段階を用意してほしい。
- 【女性の問題】結婚・出産等の問題...女子学生は十分結婚出産適齢期にも関わらず、大学院在学中のこれらの行為を例外とみなされるのは問題である。実際、途中でこれらが原因で辞めていく人がいる。私は現在1ヶ月の子供がいるが、臨月までラボに通い一ヶ月検診以後ラボに復帰する。育児休暇等は個人にまかされており不安があるためとるつもりはないが、大学の支援体制がないため地域の保育園にやむをえず預けるつもりである。研究所のように大学敷地内に託児所があれば...と何度も思いました。研究を

諦めようか...とまで思いました。

- 2 私個人は指導教官との衝突などもありましたが話し合いなどの結果、周囲の理解と協力を得られたと思いますが、大学院が個人と学業を別々に考えるシステムが確立さえできれば大学院進学は良い点だけが残ると思います。学業をしている間、修学しているからと言う理由で結婚、出産を後回しにしたり、諦めたりしなければいけない状況は反対にたとえ仕事についても結婚、出産をしたから退職するという状況をつくるのではないのでしょうか。後輩に大学院の進学は強く勧めたりはしません。希望する人にはその良さとして上記のような問題点を伝えようと思います。
- 3 います。相談にものってくれますし、前向きなアドバイスも頂けますが、30代半ば(1人)、60代(2人)ですが、二人は未婚、60代のひとは子供がいらっしゃいません。結婚、出産、育児をされている先輩女性研究者は知り合いにはいません。そのような方がいたら、どのように両立されてきたか伺いたいです。
- 4 私は研究を諦めたくないと考えていますので、学業との両立できる方法を主人や両親と相談したりしました。しかし、私達夫婦の両親は遠くにいる事もあって、かなり自分達や子供に負担のかかることは分かっており、辛い判断をしました。このような状況で研究を去る人は多いと思います。また、結局、出産育児をすることによって女性の負担の方が多くなって、研究に没頭する事が出来ない事が多いことを女性も男性も分かっています。そして、それが仕方ないと思っています。その理由に結局この世界であがっていきけるのは女性ではなく男性だと思っているから、女性が家事育児を担当することになるのだと思います。大学院であっても、そういった感覚的な事は何も変わることはないと思います。同じです。
- 5) 1 企業も教育機関や研究所、全て男女平等になってきたとは思いますが、ラボのポストによっては男性を優先させる方もいるようです。また、民間の企業の方が女性のためのシステムが出来ているからという理由で企業を希望する女性もいるようです。やりたい事というよりも長く続けられそうな環境を条件に就職先を探す女性が多くみられます。男性はその点、やりたい事を優先できている様です。
2 【男女共通】不安定な収入。不安定な任期。
【女性】育児との両立が可能かどうか。博士終了後、子供が成長するまでブランクがあいた場合、仕事につけるのかという不安。
- 6) 1 数だけ増やしても、働きやすい環境がなければ何も変わらないし、何のために増やそうとするのか分かりません。状況が良くなれば、諦めていた人の分が自ずと増えてくると思います。今の状況では妥当な数字だと思います。女性と男性の適例期というものが違います。男性は大学院に進学した事で何も困ることはないと思います。
2 教員・研究領域に一定数の女性を確保するための目標値を設定すること、男女を対象にした育児支援の奨学金を設けること、また育児支援の施設(託児所、保育園)を付属することは大いに意味があると思います。
- 7) 私個人は現在直面している問題なので早急に検討して頂きたいです。しかし、私がドクターをとるまでには状況は変わらないのだろうと思います。もう少し、早い内からこれらの問題を取り上げ、検討対処してもらえていればどれだけ助けられたか...と残念です。今後の女子学生、女性研究者のために今回のアンケート実施が意味のあるものとなります様、願っています。

回答者番号：5

- 1) 1 男
 - 2 理工系 博士課程1年
- 2) 1 より専門性を高めることと、1つのことを納得するまでやりぬくことが進学を決意した目的です。しかし、進学すると経済的に苦しい状況が続くことは分かっていたので、進学をためらったのも事実です。
 - 2 修士課程までは家族からの経済的支援がありましたが、博士課程からは奨学金の借り入れとアルバイト収入のみです。進学については、賛成はされませんでした、強い反対もありませんでした。
 - 3 受験先が科研費を多く得ているかどうか、指導体制がしっかりしているか、COEなどによる学生への経済的援助体制がどのようになっているかなどの情報は学生が得難い状況です。それらの面を大学院側が提示することは難しいと思うので、それらを表記した資料を学生主体の機関、行政の機関その他の何らかの機関が情報収集、編集、配布することがあればいいかと思います。学生、卒業生による逆評定のようなものでもいいでしょう。
- 3) 出身学部 理工系 現在の大学院 理工系
進学を決意の項にも記したとおり、より専門性を高める事と、1つのことをやり遂げることが目的だったからです。
- 4) 1 【大学院一般】大学間、また学部間によって国、大学からの経済的及び教育面での支援体制が大きく異なることに不満を感じています。
【女性の問題】身近には例がありませんが、出産、育児面での援助があった方がいいと思います。
 - 2 進学してよかったと思うときと、そうでないときは交互に訪れます。女子学生の場合、20代の若い時を大学院の研究室という狭く収入の無い世界の中でのみ過ごすこと、婚期が遅れる事が足かせとなって進学を断念することが多いと聞きますが、それらの難関を越えられるだけのモチベーションがある人ならば、進学する魅力は十分にあると思います。とはいえ、やはり経済的な問題、そして学位取得後の生活のしやすさについては改善が望まれます。
 - 3 数名います。
 - 4 身の回りには上記のような状況を見た事はありません。
- 5) 1 業界によっては就職しやすさでの男女間の差異が根強く残っていると聞きます。
 - 2 【男女共通】最近では改善されてきているようですが、博士号を取得した学生は就職が難しいという問題は残っているようです。
【女性】いくつかの業界によっては女性の就職、就職後の業務内容が制限されているようです。
- 6) 1 進学したいかどうかは個人の自由なので、あえて女性研究者を増やさなくてはならないとは思いません。しかし、出産、育児などの問題によって意に反して進学を断念せざるを得ない状況がある人に対しては改善されるべきだと思います。従って、具体的な目標値などは問題にならず、博士課程に限定せず、広く女子学生にアンケートをとることによって判断するべきだと思います。
 - 2 男子大学院生であっても科研費などの研究費、奨学金、各種の賞を得られず、研究、生活面で大変な苦勞をしている学生が多いのが事実です。従って、それらに女性のみを対象としたものを設けることについては賛成できません。しかし、子供がいる女性、養うべき家族のいる学生(男女問わず)については、何らかの形で援助があることは望ましいと思います。
- 7) 男女を問わず、進学の手かせとなる大きな理由にやはり経済的な問題があります。学術振興会からの援助

などを得られるかについては、学生が所属する研究室の業界での強さ、指導教官の知名度が主たる要因となっていることを日々実感せずにはられません。そのような古くからの問題を改善して、学生が所属する環境よりはその学生の意欲、努力、才能と社会への貢献度のみを判断基準にするよう、実質面での制度改革を強く望みます。それらの古い体制が残ることは、学生の進学、研究意欲に大きな影響を与えることは事実です。そのこともあって、進学を断念する男女学生が知人に何名もいるという現状です。

回答者番号：6

- 1) 1 女
2 理工系 修士課程2年
- 2) 1 研究に興味があり、もう少し続けてみたいと思ったから
2 十分な理解と経済的支援がありました
3 十分な情報でした
- 3) 出身学部 理工系 / 現在の大学院 理工系
- 4) 1 【大学院一般】特にありません
【女性の問題】特にありません
2 少し研究をなまけたりしてしまう部分もあったので、今思えば、大学を出て就職していたほうがよかったのかと思います 本心に研究が好きなら大学院に進学したほうがよいと思います
3 相談に乗ってくれる人はいます。今は相談したいことは特にありません
4 特に感じませんでした
- 5) 1 私の周りではそのようなことはありませんでした
2 【男女共通】特にありません
【女性】特にありません
- 6) 1 単純に研究が好きで女性が少ないということだと思いますやりたい人が研究をするのであって、特に女性を増やそうとは思いません。いたらうれしいですが
2 女性にとって有利な制度を導入することは効果があると思いますが、そこまでして女性を増やそうとする必要性があまりわかりません
- 7)

回答者番号：7

- 1) 1 女
2 理工系 博士課程3年
- 2) 1 専門性を高めるため
2 理解はあったが、経済的支援はなかった。
3 予め受け入れ先の研究室に1週間ほどお世話になり、研究内容を理解する機会があれば良いと思います。
- 3) 出身学部 理工系 現在の大学院 理工系
理工系の分野の研究を行いたかったため

- 4) 1 【大学院一般】返済をしないで良い奨学金を応募できる機会をもっと増やして頂きたいです。返済をする必要がある奨学金は、学生の時は大変助かりますが、卒業後はとても負担となります。
- 【女性の問題】指導教官により女学生にかわいさを求める先生がいらっしゃる。男性の学生とは差を感じました。
- 2 私は良かったと思います。やりたい研究がある場合は、後輩に勧める。大学院の博士課程に行きたくても、行けなかった学生に聞いて頂いた方が今後の改善になると思いました。
- 3 います。研究の進め方や、先生との対応の仕方、さらに就職活動のことを相談しました。
- 4 大学の先生や研究室の男性学生はとても好意的でした。しかし、大学外で研究機関に所属している男性研究員の中には女性の研究員を好まないときっぱり話される先生が数人いらっしゃった。
- 5) 1 ほぼ決まりそうです。違いはある。就職活動では女性を好まないところもあった。
- 2 【男女共通】大学で学位取得が可能であるか、卒業する2ヶ月前までわからない。そのため、就職活動を行う時期が不確定になってしまう。数年で結果をだし、任期制職員で働くのはとても大変だと思います。大学の研究室の助手ポストを増やしていただき、長く研究をすすめる場所が必要であると思います。
- 【女性】決まりとして、男性と女性は何人募集すると広告を出していただきたい。現実に募集しているのは、本当はほとんどが男性です。
- 6) 1 自分の進路を決められない人が多いのではないかと思います。30%は現実にはとても厳しいと思いました。
- 2 返済をする奨学金はこれ以上増やして頂きたくないと思います。やりたいことを早めに決定できる自己判断力が必要だと思います。4年生などの大学在学中に、博士をとる人たちと交流して、仕事内容を紹介してほしいです。
- 7) ぜひ、進学を断念した学生に意見を聞いて頂きたいです。

回答者番号：8

- 1) 1 男
- 2 理工系 博士課程1年
- 2) 1 学位が欲しかった為
- 2 有
- 3 就職状況
- 3) 理工系 理工系； 同じ研究室で研究活動を行いたかったため
- 4) 1 【大学院一般】修士・博士ともに授業料を納付している点を忘れず、指導を行って欲しい。
- 【女性の問題】特に問題なし
- 2 とりあえず修士は持っておいた方が良く考える為、勧める。
- 3 いないし、特に相談したいことはない。
- 4 大学院においては特に見られないが、就職活動においてその傾向が見られるのではないかと。
- 5) 1 女性の方がより営業、男性の方がより研究職につくのではないかと。しかし、これは、本人の希望によるところが大きく、性差別から来るものではないのではないかと。
- 2 【男女共通】できる人はやはりどこに就職活動をしに行っても特に問題はないと思われる。

【女性】結婚、出産の問題等でやや就職を拒まれるような状況がたまにあるのではないか。

- 6) 1 本人が研究者になりたいかどうかなので、とくに数字等気にする必要はない。
 - 2 一つの方法であると考える。
- 7) 特になし。

回答者番号：9

- 1) 1 女
 - 2 理工系 修士課程1年
- 2) 1 大学の規模が小さくてできなかった実験がしたいと思ったから。自分が実験に向いているか自信がなくなって進学をためらった事もあります。
 - 2 とても協力的で、受験費用も全て出してくれました。
 - 3 内部と外部で毎年どのくらいが合格しているかその割合。自分が外部受験だったため外部でも毎年多くの人がかかっていると知れば励みになるかもしれないと思います。
- 3) 理工系から理工系に進みました。身につけた実験技術を更に磨きたいと思ったからです。また、就職して研究職につきたいという思いもありました。
- 4) 1 【大学院一般】入学前は土曜日が休みだと聞いていたのに入学したとたん今年から実験する日にすると言われて戸惑いました。現在は研究を進めるため当たり前になりましたが、当初は言っていることが違うという事実に驚きました。

【女性の問題】特にありません。

 - 2 よかったと思っています。人間関係も順調で研究も充実しています。後輩の女子にはその子がやる気があって研究職につきたいと思っているのなら、研究職は院卒からじゃないと応募されていないことも多いので勧めます。
 - 3 いません。就職活動についてのアドバイスをいただきたいです。
 - 4 特に分かりませんが、友人の知り合いにはお産後に研究に復帰した人もいたので本人と家族の意思次第だと思います。実験だと夜遅くになってしまうこともしょっちゅうで家庭を持つ女性には働く時間が決められている企業のような職場の方がいいかもしれません。
- 5) 1 私の友人では女性でなかなか就職が決まらず卒業目前に決まったものの、大学での研究とまったく関係のない仕事をしている人が数多くいます。男性の方が就職が決まる時期が早い気もします。
 - 2 【男女共通】現在、薬学研究科に所属していますが大学時代は農学部だったため、製薬企業では落選が続いています。

【女性】特にありません。
- 6) 1 夜どんなに遅くなくても気にされない所が問題だと思います。企業ならそのような事はないと思いますが日が変わるまで実験をするような事も多く、家庭を持っている人ならきつい状況だと思います。女性研究者を増やす必要は特にないと思います。それは本人の意思次第だと思います。女性研究者を増やすという目標より女性が働きやすい環境を作るという目標にしていきたいと思います。そうすれば研究者も自然に増えると思います。
 - 2 女性を対象とした奨学金等や、育児支援の奨学金を設けることはとても良いことだと思います。

- 7) 大学は夜遅くに部外者が入れるような環境なので各棟に警備員を置いてもらったり安全な環境を作ってほしいです。結果を急ぐあまりに、夜遅くまで実験に励む事が美学とされる状況もよくないと思います。指導教官がそれを理解してくれるような環境ができれば、女性も研究を続けやすくなると思います。

回答者番号：10

- 1) 1 男性
2 文系 博士課程前期2年
- 2) 1 研究者の職業としての魅力。就職難(ためらいの理由)
2 一応の理解と若干の経済的支援はあった。
3 就職のガイダンス等
- 3) 同じ文系。理工系については高校時代に適性からすべて決まってしまうと考えられる。
- 4) 1 【大学院一般】特になし
【女性の問題】特になし
2 進学はよかったと思う。女子学生に進学を進めるかどうかについては、人によると思う。男女に関わらず、研究者には「適性」がある。
3 特にいない。研究に関する相談をしたい。
4 特に感じない。会社と違い、職制が異なるわけでもないし、その意味では非常にフェアであると考えられる。ただ、家事・育児などを研究と両立するには、相当な覚悟がいるわけで、一般論としての不利な点はあると考えられる。
- 5) 1 その辺りはよく分からない。ただ、女性研究者を増やそうという動きが、アフーマティブ・アクションとしての弊害となって、男性研究者の逆差別につながらないかと懸念される。
2 【男女共通】大学院拡充の一方で、大学の教員ポストが限られていることによる就職難。
【女性】分からない。アフーマティブ・アクションの動きがあることは聞いている。
- 6) 1 単に女性が研究者を志向していないということだと思う。女性の研究者を増やす必要は必ずしもないと思う。男女の垣根をつくらずフェアな競争をすればいい。30%という数値目標については、意味のないアフーマティブ・アクションだと思う。
2 逆差別をやめて、あくまでイコールフットिंगになるように心がければいいと思う。そうすると女性の研究志望者が増えるかもしれない。
- 7)

回答者番号：11

- 1) 1 女
2 文系 博士課程前期1年
- 2) 1 会計学の研究者を志望するからです。進学をためらったことはありません。
2 ありました。
3 ホームページに過去の入試問題を掲載すること。院に関してもオープンキャンパス、入試説明会を行う

こと。

- 3) 出身学部・現在共に文系です。
学部で勉強したことを深め、その知識を持って研究に活かしたいと考えたからです。
- 4) 1【大学院一般】 特になし
【女性の問題】 現在のところありません。
2 研究者になりたい人は是非、と勧めます。女性であるからといって研究に不都合を感じたことは今までにありません。
3 はい。結婚・出産・育児と研究生生活の両立。就職について。
4 研究生生活は非常に体力を要しますので、時には過酷だと感じることもあります。家事・育児との両立をするとなるとより一層のことです。私が思うに、やはり体力的なことは男性には敵わないので、女性が働きにくい職場環境にあることが一理由かと思います。
- 5) 1 やはりあると思います。
2【男女共通】文系で大学院卒であると、研究機関あるいは、自己の研究のアピールが上手くできなければ学部卒より困難
【女性】上記に加え、女性という偏見
- 6) 1 大学院在学する期間(ストレートに4年制大学を卒業した場合)が結婚の適齢期であるから。増えてくれば嬉しいです。女性の大学院生してできれば50%程度になれば、研究者を目指す上でそういった結婚・出産・育児への不安も緩和され良いです。
2 女性対象の奨学金等、というよりも対等に扱って頂ければと思います。目標値は、男女関係なく研究したい者が研究すべきと考えますので、必要ないのではないのでしょうか。
- 7) 4に書かれていた「女性研究者が少ない理由は、男性の意識・・女性の能力への偏見」という文章にはあまり良い印象を受けませんでした。女性の研究者を目指し、今後益々精進して参りたいと思います。

回答者番号：12

- 1) 1 男
2 理工系 博士課程2年
- 2) 1 さらに研究を行いたかったから。授業料などの金銭的な問題
2 授業料に関しては家庭から支援されています
3 卒業生の進路状況
- 3) 出身学部、現在ともに理工系
興味のある研究についてさらに研究をおこなっていきたくかったから。文系にまったく興味がなかったから
- 4) 1【大学院一般】もう少し教員が多ければいいと思っています。
【女性の問題】研究を重視していないと思われるときがあります。
2 進学してよかったと思っています。やりたい研究がある方なら勧めます。
3 いません。相談したいことも特にありません。
4 現在の研究室ではありません。
- 5) 1 人数的なことも考えられるのですが、比較的女性の方が早く就職が決まっているような気がします。今

のところ就職先に違いがあるようには感じません。

2 【男女共通】特にありません。

【女性】特にありません。

6) 1 女性が将来のこと(結婚、出産等)を考え就職している部分もあると考えています。

男性と異なるアイデアがあると思うので女性がやりたいと思うなら増やしてもいいと考えています。

やりたいのであれば半々くらいでもいいと考えています。30%の目標値は妥当な線であると考えています。

2 女性に対する奨学金制度があれば確かに数は増えるかもしれません。

7) 現在の研究室では女性が少ないというわけでもなく、また問題があるというわけでもありません。就職される方も大学院に進学する方も個人の意思で決定しているように感じます。

回答者番号：13

1) 1 男

2 理工系 博士課程後期3年

2) 1 現在、専攻している植物とその病理の分野に興味があったこと。

2 修士までは経済的支援がありました。

3 「修士課程卒業生、博士課程卒業生の就職状況の情報」、「博士課程への進学率の情報」などです。

3) 理工系から理工系に進学しましたが、大学院入試の時点で異なる専攻を選んでいました。それまでの専攻は有機化学系の研究室でしたが、大学院からは植物病理の研究室です。選考の理由は化学系の研究よりも、より生物学、特に植物とその病理学に興味を持ち、将来的にその分野を仕事にしていけたらいいと思ったからです。

4) 1 【大学院一般】研究テーマの決定は配属直後に行われたのですが、数ヶ月猶予をおいて、自分でテーマを判断する時間がもう少し欲しかったです。

【女性の問題】当研究室では女性の修士学生が多いため、特に女性に関する問題は起こっていないように感じます。しかし、育児、結婚等をしている方を目の当たりにはしていないので、その問題については判断ができません。

2 進学してよかったと思います。この分野の知識は大学院まで専攻してやっと身に付いてきたと思うからです。また、後輩の女子学生にも専門知識、及び就職に有利に働くことから大学院の進学を勧めると思います。

3 そのような大学院卒業の女性はいません。もし、いたとして、その人が研究者として生活していたならば、相談したいことは、研究と結婚や日常生活をどのように考えているかということなどを聞きたいと思います。

4 当研究室の話ではありませんが、研究者同士で結婚したとき、女性の方に研究をあきらめさせるようなプレッシャーを感じているという話を聞いたことがあります。話によると、結婚後、夫婦ともにどうしても生じる研究者としての生活のみだれを、結婚した女性側の方が何とかするべきだという周りからのプレッシャーがあるそうです。

5) 1 博士課程卒業後の就職状況に関しては、男女間での差異はあまりかんじたことがありません。

2 【男女共通】博士課程修了後の安定した雇用が非常にすくなくいです。

【女性】実際の就職状況はわかりませんが、身近の研究室の助手や助教授、教授などのポストに女性の研究者の人が就いているのは非常にまれなことから、任期の区切られていない職への就職は困難な状況にあると思います

- 6) 1 男性女性それぞれの発想を生かすという点でも、女性研究者が現在よりも増えることが望ましいと思います。まずは30%、最終的には男女ほぼ同数近くの研究者の割合が望ましいと思います。女性の大学院生が少ない最も大きい理由は、これまでの因習、そして、周りの精神的、経済的な支えの少なさではないでしょうか。
- 2 まずは意識改革だと思います。また、それとともに、現在負担の多い結婚している研究者に対する支援や男女を対象にした育児支援の奨学金を設けることには特に必要性を感じます。
- 7)

回答者番号：14

- 1) 1 男
2 理工系 博士課程後期2年
- 2) 1 将来、プランクトンの研究を職業としたいから
2 ありました
- 3 特になし
- 3) 出身学部 理工系 / 現在の大学院 理工系
学部と大学院での希望研究内容が同じ分野だから
- 4) 1 【大学院一般】特になし
【女性の問題】特になし
2 良かったと思います。希望する研究が行えているから。本人が希望するなら勧めます。勧めない理由がないから
3 います。ありません。
4 見られません。
- 5) 1 ありません。
2 【男女共通】分かりません。
【女性】分かりません。
- 6) 1 私の分野では女性が多いので分かりません。
2 女性が多いので特に変更する必要はないと思います。
- 7)

回答者番号：15

- 1) 1 男
2 文系、オーバードクター
- 2) 1 より深い研究がしたかったから。

- 2 理解はあったが、経済的支援はゼロだった。
- 3 特になし。
- 3) 出身学部 文系 / 現在の大学院 文系
学部のと時から興味が一貫していたから。
- 4) 1 【大学院一般】前期課程の時に奨学金に落ちて大変だった。現状では貧しい学生は進学するのが困難だと思う。給付制の奨学金が必要と考える。
【女性の問題】分からない。
- 2 自分なりに頑張って研究したので、よかった。分からない。
- 3 いない。
- 4 見られない。
- 5) 1 年々厳しくなっていると思う。男女で違いがあるとは思わない。
- 2 【男女共通】院生の数に比べて教員ポストが絶対的に少ない。国の予算をもっと大学教育に振り向けるべき(私学助成も含めて)。何年も不安定な状態におかれているオーバードクターの問題は人道問題であると思う。
【女性】わからない。
- 6) 1 分からない。女子学部生を調査してみるのがいいのではないかと思う。理想を言えば50%になればいいと思う。
- 2 男女を対象にした育児支援の奨学金は、女性大学院生を増やすためとかいう以前に、必要だと思う。
- 7) まだまだ日本の社会は女性差別が根強いと思うので、逆にその中で大学院卒業後に自立していけるという確かなビジョンを示すことができれば、女性大学院生は増えていくのではないかと思う。

回答者番号：16

- 1) 1 男
2 文系 修士課程1年
- 2) 1 研究者志望のため。金銭的な理由によりためらっていた。
2 まったくない。いまでも反対されている。
3 大学院入試の指定参考文献。
- 3) 出身学部 文系 / 現在の大学院 文系
学部での勉強内容に興味を持ったから。
- 4) 1 【大学院一般】指導教員が一貫課程の場合、5年間固定化してしまうこと。
【女性の問題】そもそもの絶対数が少ない。
- 2 すすめない。男の社会という感じがするから。
- 3 とくになし。
- 4 女性ができがわるい。勉強が出来なくても「女性だから」で済ませようとする。
- 5) 1 よくわからない。
- 2 【男女共通】よくわからない。
【女性】よくわからない。

- 6) 1 少ない。女性枠で入試を実施すべき。
 - 2 院の女性枠の固定化
- 7) 特になし。

回答者番号：17

- 1) 1 女
 - 2 理工系 博士課程前期1年
- 2) 1 もっと学びたかったから。迷わず決めた。
 - 2 全面的に理解・支援してくれた
 - 3 本学生に対しては特に問題ないと思われるが、他大学から入ってくる人には環境や交通手段についてきちんと明示しておいた方がいいと思う。車がないと不便且つ危険であることなど。
- 3) 出身も現在も理工系。
 - そもそも学んでいた事柄が面白かったために進学を決めたので、変えることは考えもしなかった。
- 4) 1 【大学院一般】大学が学生結婚及び出産にどのように考えているのか分からないが、晩婚・少子化が取り沙汰される昨今において、様々な場面でもう少し扱ってみてもよいように思う。
 - 【女性の問題】特になし
 - 2 良かったと思う。しかし、特に他人に勧めようとは思わない。どの道を選んでもメリットデメリットがあるので、自分で決めればよい。
 - 3 博士課程後期在学中の女性がいる。相談事は特にないが、その人自身の感想や意見を聞きたいとは思っている。
 - 4 現在のところ、特に感じたことはない。
- 5) 1 女性の方が若干有利とは聞くが、まだ始まったばかりなのでよく分からない。
 - 2 【男女共通】まだ特になし
 - 【女性】まだ特になし
- 6) 1 第一に、文系学生よりも理系学生の方が進学率が高い。理系志望の女性が少ないため女子大学院生が少ない。その辺は好みのお話であるので、無理しても女性が増えるわけではないと思う。数字にこだわるのはおかしい。
 - 2 男女を対象にした育児支援の奨学金はよいと思う。その他は女性優遇の歪な案だと思う。
- 7) 男女ということに全然こだわらない、恵まれた環境にいるためかもしれませんが、何故無理やりに女性大学院生を増やそうと考えるのか分かりません。身の回りの友人に女性であることを理由に進学をやめた人もいませんし。ただ、唯一ネックとなるのは出産の問題だと思います。高齢出産が体に良くないことはよく知られています。また、晩婚・少子化が世界的な問題になっていますが、女性進学者が増えることは明らかにこの問題の一因となっていると思われまます。学生結婚の奨励や育児支援対策が必要なのではないのでしょうか。

回答者番号：18

- 1) 1 女
 - 2 理工系 修士課程2年

- 2) 1 専門分野の知識を深めたかったから。大学院に進学する人が周りにとても多かった
- 2 両親に進学の話をした時は少し驚かれたがすぐに理解してもらえた。学部時代と同様に経済的支援をしてもらったが、授業料免除申請を行っていた
- 3 研究室別の卒業後の進路(就職先)情報
- 3) 出身:理工系 現在;理工系
- 学部で学んだことを土台とし、同分野における専門的な知識を深めたかったから
- 4) 1 【大学院一般】指導教員によって、学生に対する対応・指導の仕方があまりにも違いすぎる。それによって学部3年生が研究室を決定する際、非常に人気のない研究室が出てきてしまっている。就職に対する支援体制が充実していない。またその支援・対応時期が私立大学に比べて遅すぎる
- 【女性の問題】大学の保健管理センターに安心して相談できる女医さんがいない
- 2 進学してよかったと思っている。後輩にはそんなに強くは勧めない。進学は自分の意思で決めるものであるし、年齢や就職に関して個々人で考え方・感じ方が変わってくるから。
- 3 回りに大学院卒業女性は少ない
- <相談したいこと>卒業後の進路、就職活動、結婚・出産、仕事と家庭の両立、人間関係、日常の悩み
- 4 単純に研究したいと思う女性が少ないだけなのではないだろうか。少なくとも私の研究室においては、女性だからといって研究しにくい環境ではない。確かに家庭があると研究との両立は難しいと思う(研究は拘束時間が不規則になる場合が多く、両立支援策もないから)
- 5) 1 特に男女間で就職状況・就職先に違いはないと思う。強いて言えば、女性の方が公務員・教員など安定して長く働けることを希望しているように思う
- 2 【男女共通】産休・育休が充実している会社が少ない
- 【女性】産休・育休が充実している会社が少ない
- 6) 1 女子大学院生が少ない理由:社会に出る年齢が高くなる=結婚・出産年齢が高くなる。理科系はもともと女子学生が少ない。大学での研究に魅力を感じない。無理に女性研究者を増やす必要はないと思う
- 2 女性大学院生を無理に増やす必要はないと思う。男女を対象にした育児支援は積極的に行うべきである。そのような支援制度が整っていれば、特別な賞などもうけなくとも女性大学院生・研究者はおのずと増えるのではないだろうか?
- 7) このアンケートは大学院教育に的をしぼられていますが、私個人としては、社会で働いている女性に対する支援制度や、男性も対象とした育児支援制度の充実を図ってもらいたいと思っています。社会の制度を充実させれば、教育界だけでなく様々な分野において能力のある女性が活躍できるのではないかと思います。単に女性研究者を増やそうとしてもあまり意味がないと思われます。社会制度の基盤づくりが一番重要ではないでしょうか?

回答者番号: 19

- 1) 1 女性
- 2 理工系 修士課程2年
- 2) 1 環境が進学する雰囲気だった
- 2 家族の理解等はあった。

- 3 特になし
- 3) 出身：理系 現在：理系
文系に行く理由が無いため。
- 4) 1【大学院一般】特になし
【女性の問題】質問の意味が分かりません
2 個人の意見を他人に押し付けることに意義を見出せません。
3 該当する人物が居ないためお応えできません。
4 研究に魅力が無いためだと思います。理工系の学問は魅力的ですが、大学での研究に魅力はありません。
同じことをするなら企業の研究所でしたいと思います。
- 5) 1 男性は学校の敷いたレールに乗って進路を進む方が多いようです。
2【男女共通】特にありません。
【女性】特にありません。
- 6) 1 無理に増やす必要は無いと思います。「女性の研究者」を増やしたところで研究の質が上がりますか？根本的に考え方が間違っていると思います。適材適所で女性の働く場を研究と考えない方が多いのでしょうか。
2 上記の通り、何故「女性大学院生」を増やすのか分かりません。出来の悪い女子学生を増やしたところで何も解決になりません。むしろ、現在行っている大学入試で女性を無理に入れるのは止めたらどうですか？根拠の無い保護を行うことに意味はありません。女性の個体数を増やすことで得られる利益について十分な説明を要求します。
- 7) ジェンダーフリーだか知りませんが、保護が必要な女性が多いのも事実ですが、行き過ぎた保護の弊害が今の現実ではないでしょうか。質問を作成した機関、及び運営している方々の正しい男女平等の認識を持たれることが先決だと考えられます。現実に目を向けてください、前時代的な考えた方を改めて頂ければと存じます。

回答者番号：20

- 1) 1 男
2 理工系、博士課程3年
- 2) 1 より高度な知識・技術を身に付けたいと考えたから。将来の就職のことで進学をためらったことがある。
2 両親ともに進学を望んでいた。また奨学金取得前には仕送りを受けていた。
3 <大学院の入試を受ける時点で、カリキュラムや研究内容以外に、どのような情報があったら良かったと思いますか。>これまでの研究室在籍者の大学院卒業後の進路について。
- 3) どちらも理工系である。
自分の興味の対象が理工系に属する分野であったから。
- 4) 1 <指導教員の対応、研究テーマの決定、奨学金の状況、結婚・出産等の問題、育児休暇後の復帰、大学の支援体制の有無とその充実度、その他>
【大学院一般】特になし。
【女性の問題】特になし。
2 周囲の状況を見ていると就職時にメリットあるように思われるので、修士課程までの進学であれば勧める。

- 3 特になし。
- 4 特になし。
- 5) 1 特になし。
- 2 【男女共通】修士を卒業することで就職時にメリットがあるかもしれないが、博士号取得のメリットについては疑問を覚える。
- 【女性】 特になし。
- 6) 1 女性は結婚して、という考え方が未だに世間で優勢であることが理由だと思う。本人を取り巻く人々と、その中で育った本人の意識。育児支援制度などの環境を整えて自ずと率が上昇するならともかく、無理をして上昇させる必要ないと思う。
- 2 育児期間の支援制度は必要であると思われる。
- 7) 特になし。

回答者番号：21

- 1) 1 男
- 2 理工系 博士課程3年
- 2) 1 大学院に進学した理由：研究をしたかったから
- 2 はい
- 3 各研究室からの就職状況
- 3) 出身学部：理工系 現在の大学院：理工系
- 理工系の大学院に行くために理工系の学部に入った
- 4) 1 【大学院一般】いいえ
- 【女性の問題】いいえ
- 2 はい。いいえ、本人が行きたいことを自分からほめかすまで、何も言わない。つまり、こちらから進めることはしない。
- 3 いるか?：はい。相談したいこと：なし
- 4 いいえ
- 5) 1 いいえ
- 2 【男女共通】いいえ
- 【女性】いいえ
- 6) 1 理由：そこまで研究を続けたいと思う人が少ないから。増やさなければならないか?：そんなことはない。30%に対して：なぜ、このような数字が挙げられるのか、まったく分からない。なぜ、0%や50%ではなく、30%という中途半端な数字になるのか詳細が知りたい。
- 2 女性大学院生を意識的に増やす必要はない。増えようが減ろうが構わない。
- 7) 男性優位な状況にあるからといって、女性を支援するようなことを考えるのは女性に対して失礼であると思います。本当に実力のある人であれば、周りが何もなくても、その人は活躍すると思います。女性支援をすること自体がすでに、男性優位社会を認めているかのようです。

回答者番号：22

- 1) 1 女
 - 2 理工系 修士課程1年
- 2) 1 卒業後は企業の研究職に就きたいと考えており、学部卒では研究職につくことはできないため。また、学部4年生のときに研究室に配属され、研究活動を続けたいと思ったため。
 - 2 大学院に進学することに関して、家族からの反対はなかった。学部生のときは、100%両親からの経済的支援に頼っていたが、大学に入学したときから大学院の学費は自分でまかなおうと決めていたので、現在は下宿の家賃のみ両親から仕送りをしてもらい、その他は奨学金及びアルバイト代で生活している。
 - 3 博士課程への進学率、就職状況(就職先企業・研究施設、就職先での職務内容など)について。- 大学院で学んだことが将来生かせるのか、つまりどのような研究職に就けるのかは、研究室によってある程度決まっている。例えば私が所属する研究室では、大学院での研究内容とは全く違った職に就くことが多い。上記のような情報があれば、大学院入試のときにどの研究室を選択するかについてもう少し違った視点で考えられたのではないかと、思う。
- 3) 出身学部/現在の大学院...ともに理工系

昔から進みたいと思っていたので、学部・大学院ともに同じ系に進んだ。しかし、現実的に他学部の大学院入試を受験するには研究室の研究内容や入試に関する情報が足りないこともあり、よほどの意志がない限り他学部を受験する人はいないと思う。
- 4) 1 【大学院一般】私が所属する研究室では、指導教員の対応、研究テーマの決定、奨学金の状況については特に問題ない。ただ、前者2つに関しては研究室によると思われる。また、結婚・出産の問題、育児休暇後の復帰、大学の支援体制の有無とその充実度についてはわからない。
【女性の問題】指導教員の対応、研究テーマの決定、奨学金の状況に関して、男女間で明らかな違いは感じない。
 - 2 大学院での時間は、先生方や先輩方から研究に対する姿勢を学び、自分の知識を増やせる有意義な時間であり、研究職に就く前に進学してよかったと思っている。ただ、進学するのは本人の意志次第であり、意志もなく進学しても時間の浪費だと思うので、私からあえて後輩に勧めようとは思わない。
 - 3 サークルが同じで、同じ研究室を卒業し、現在働いている女性の先輩がおり、就職活動の際には相談にのってもらった。研究があまりうまくいかないことや、社会人になる不安などを相談したいと思っている。
 - 4 「似た状況」というのがよくわからないが、大学院内で女性だから、という理由で働きにくかったり、偏見を受けたりすることはない。
- 5) 1 男女の扱いを平等にしようという動きが社会的に広まってきているので、男女で就職状況や就職先に違いがあるとは思わない。企業の方とお話してみると、こちらの思っている以上に女性の能力を高く評価してくれているようだ。大学院においては、以前は男性にばかり推薦状を書く教授もいたということを聞いたことがあるが、現在はそのような状況もなくなっていると思う。
 - 2 【男女共通】理系研究職の就職活動は企業と研究室のつながりによって成立しているような土壌がある。ある程度は仕方がないことかもしれないが、研究室間でそのつながりの強さに差があることは否定できない。しかし、研究室ではそのようなことに関して詳しい説明はなく、戸惑った。また、この系の就職活動時期は他分野と比較して半年近く早いので、異なる分野の職業と比較検討することができなかったことがつらかった。

【女性】就職活動の際には、女性の働きやすさや福利厚生の実質ぶりを多くの企業が強調していた。就職の場合、入社してから数年で退職されることは大きな痛手になる。そのような経験から、公言はしないものの女性を採用しない企業があるのも事実である。企業側が女性の支援制度を整えているのだから、女性側が仕事への責任感を強くする必要はあるのは当然のことだが、夫婦のうちどうしても1人が辞めなければならない状況になったとき、やはり辞めることを選択するのは女性にならざるを得ないことが多いのは事実ではないか、と思う。

- 6) 1 理系の場合、学部中の女性の比率が低いので、自ずと大学院生の女性の比率も低くなると思われる。また、研究者を目指して大学に入学する女性ばかりではなく、ゆくゆくは家庭に入りたいと思っている女性もいることも、女性大学院生が少ない理由のひとつだと考えられる。しかし、研究者になるのは個人の意志の問題なので、女性に限定して増やす必要はないと思う。現在のように企業の中で女性にとって働きやすい環境が整えられていくことで、今後も自然に増えていくのではないかと思う。また、目標値 30%というのは達成するには難しい数字だと考えられる。なぜなら理系大学院生は、特に工学部で圧倒的に男性のほうが多く、女性が多いといわれる薬学部でさえ国公立では4割程度だからである。
- 2 女性大学院生の数を増やそうとするなら、研究費や奨学金などの経済的支援は有効かもしれない。ただ、私の周りでは経済的理由よりも個人の意志で大学院に進学せず、就職していく女性ばかりだった。また、教員・研究領域での女性の目標値を設定することは、平等な教員採用の障害にならないかと危惧されないだろうか。
- 7) 薬学部では6年制度への改定が行われる。やはり女性にとっては学生生活が長くなることは漠然とした不安であり、大学院進学数が減少しないか心配である。しかし、6年教育制度になっても、現在のように「研究者を目指すならば、大学院に進学しなければいけない」という意識があれば、優秀な大学院卒の研究者が増える土壌ができるのかもしれない。

回答者番号：23

- 1) 1 男
2 理工系 博士課程3年
- 2) 1 より高度な知識・技術を身に付けたいと考えたから。将来の就職のことで進学をためらったことがある。
2 両親ともに進学を望んでいた。また奨学金取得前には仕送りを受けていた。
3 これまでの研究室在籍者の大学院卒業後の進路について。
- 3) どちらも理工系である。
自分の興味の対象が理工系に属する分野であったから。
- 4) 1 <指導教員の対応、研究テーマの決定、奨学金の状況、結婚・出産等の問題、育児休暇後の復帰、大学の支援体制の有無とその充実度、その他>
【大学院一般】特になし。
【女性の問題】特になし。
2 周囲の状況を見ていると就職時にメリットあるように思われるので修士課程までの進学であれば勤める。
3 特になし。
4 特になし。

- 5) 1 特になし。
- 2 【男女共通】 修士を卒業することで就職時にメリットがあるかもしれないが、博士号取得のメリットについては疑問を覚える。
- 【女性】 特になし。
- 6) 1 女性は結婚して、という考え方が未だに世間で優勢であることが理由だと思う。本人を取り巻く人々と、その中で育った本人の意識。育児支援制度などの環境を整えて自ずと率が上昇するならともかく、無理をして上昇させる必要ないと思う。
- 2 育児期間の支援制度は必要であると思われる。
- 7) 特になし。

回答者番号：24

- 1) 1 女
- 2 理工系 修士課程1年
- 2) 1 学部四年間だけでは主に授業を受けるのみで、広く浅い知識を身に付けることしかできず不満であったため。より専門的な知識や実験技術を身につけたいと思ったため。
- 2 家族の理解、経済的支援はあった。
- 3 院に進む上でのメリット、デメリットについての情報があればよかったと思う。院に進学するとどのような就職先の幅が広がるのか、など。
- 3) 出身 理工系 / 現在 理工系
- 自分の興味ある分野、研究室が理工系であったため
- 4) 1 【大学院一般】院でのカリキュラム等で分からないことがあった場合に、相談窓口としてどこにいったらよいのか分からない。
- 【女性の問題】教授とのコミュニケーションにおいて、男性とは異なる扱いを受けていると感じることが多々ある。差別的発言を受けることもある。鼻唄されることもあるが、そのことで周りの男性から、からかいや中傷を受けることも多く、結果として、迷惑に感じてしまう。
- 2 私は院に進学し、専門的な知識や技術を得ることができ、自分の興味ある研究ができていたので、よかったと思う。後輩の女子学生に進学を勧めるかどうかについては、本人が向学心を持っているのであればぜひ勧めたいと思うが、「周りに流されてなんとなく」というのであれば、時間の無駄なので勧めかねる。
- 3 相談に乗ってくれる院卒の女性はいる。就職や、就職後の仕事について相談することが多い。
- 4 私の通う大学院には、そういった状況は見られていないように思う。
- 5) 1 修士一年の一月現在、企業からの内定はもらえていない。昨年十月から就職活動を始めているが、男性の方が内定をもらえやすいと感じる。
- 2 【男女共通】本人の能力ではなく、教授からの紹介、推薦があるかどうかで採用されるのは問題だと思う。
- 私の周りではそういったことが普通に行われている。
- 【女性】女性の方が内定をもらえにくいと思う。
- 6) 1 女性院生の数が少ないのは、女性は出産・育児があるからというのが一番の理由であると思う。若いうちに結婚・出産したいか、院で学ぶのを優先するかは本人の意思の自由であると思うので、女性研究者を

増やすべきとは特に思わない。男性中心の大学院であると思うので、女性でも男性と同等な環境を整えるのは大変重要であるが、目標30%という数値を定めるのはあまり意味がないように思う。女性でも男性に負けず劣らず院で勉強できるという環境を整えることを目指した方がよいと思う。

- 2) 院に進学するかどうかは本人の意思に由るところが大きいので、院を卒業するメリットを強調すれば女性も増えると思う。女性を対象にした各種の奨学金などは、女性の院進学に大いに助けになると思う。
- 7) 多くの女性が大学院や就職活動などで不満や不利を感じているが、我慢して耐えているため、口に出しづらい環境になっていると思う。大学院教育において少しでも女性の立場が改善されることを願っている。

回答者番号：25

- 1) 1 男
 - 2 文系 修士課程2年
- 2) 1 学部よりも高度な知識を習得したかったため、大学院進学を決意。
 - 2 理解あり。学費等の金銭面で全面的なバックアップ。
 - 3 卒業した院生の就職状況や就職実績。特に、修士課程で修了する学生と博士課程後期まで進学した研究者志望の学生が、卒業後どのような進路を選択しているのかを詳細に説明した情報。
- 3) 学部・大学院ともに文系。
- 4) 1 【大学院一般】特になし。
【女性の問題】特になし。
 - 2 進学してよかったと思う。院進学を志望する女子学生に対しては勧めたい。ただし、女性の研究者が現在のところまだまだ少ないことなどの大学院の実情についても説明する。
 - 3 なし。
 - 4 大学院教育においてはとくにこのような状況はないと感じている。
- 5) 1 卒業後の就職時点においては、とくに違いはないと思う。個人の能力の問題。
【男女共通】特になし。
【女性】特になし。
- 6) 1 少ない理由は、大学院教育に対する理解がまだまだ浸透してないこと。つまり、大学等の研究者に今後女性が増えていかなければ、女性大学院生も増えていかない(トートロジーのようであるが)。そのために、女性の研究者が仕事しやすく活躍できるような支援体制を、ますます整えていかなければならない。30%をできるだけ短い期間で実現することが必要。その後は、40%を目標に。
 - 2 女性を対象にした奨学金制度を設けることは大切だと思う。
- 7)

回答者番号：26

- 1) 1 女
 - 2 理工系 修士課程1年
- 2) 1 大手の技術系企業に就職したかったため。実家に経済的負担を強いること。

- 2 ある。
- 3 特にない
- 3) 出身学部・院ともに理系
- 4) 1 【大学院一般】奨学金の申請時の対応があまりよくない
【女性の問題】特になかった
 - 2 よかったと思う。女性でも一生できる仕事を手にすることができるから。
 - 3 いない。結婚と仕事の両立について。
 - 4 女性の能力への偏見はあると思う。(女子は理系に向いていないなど)
- 5) 1 特に感じたことはない。
 - 2 【男女共通】推薦主体のため、自由応募を受けるさいに教官にいい顔をされない
【女性】不採用の理由が女子だからではないかと思ってしまう。
- 6) 1 大学院進学率の高い理工系に女子学生が少ない。「女性」研究者を増やさなければ、とは思わない。必要なのは、研究者になりたい女性が、女性だからという理由で排除されない環境ではないだろうか。30%という数値には意味を感じない。
 - 2 女性対象の賞を設ける。育児支援体制を整える。
- 7) 女性であることが不利にならない世の中になってほしい。

回答者番号：27

- 1) 1 男
 - 2 文系 修士課程1年
- 2) 1 資格試験受験のため。文系院生は就職が困難である。
 - 2 積極的理解があった。経済的支援もあった。
 - 3 卒業後の進路。学生生活について
- 3) 出身学部 文系 / 現在の大学院 文系
理系に院から参入することは難しい。バックグラウンドが必要となる。また、現在の専攻分野に興味があったため。
- 4) 1 【大学院一般】なし
【女性の問題】なし
 - 2 学部よりも高度な研究ができ、良かったと思う。研究者に興味があるなら、進学を勧める。
 - 3 いない。
 - 4 なし。
- 5) 1 分からない。
 - 2 【男女共通】文系院生は企業からはあまり必要とされていない、理解されていないと感じる。
【女性】分からない。
- 6) 1 女性に研究者志望者が少ないと思う。それは、女性の家族が院進学までは必要ないと考えていることが、自分の周りには多いと思う。あえて目標を掲げるのも理解しがたい。男女で基本的に研究の成果は異ならないと考えるから。ただ、多様な視点を学界に持たせるという意味では、必要かも知れない。

2 そうした形式的な策は必要ないと思う。学用上層部の考え方，人間関係などを変えていくことしかないように思う。

7)

回答者番号：28

1) 1 女

2 理工系 博士課程3年

2) 1 深い専門知識を得たかったため

2 あった。

3 研究室の紹介等

3) 学部、現在とも理系

学部だけでは知識が浅いのでそのまま進学したため、違う系統を選ぶという選択はなかった。

4) 1 【大学院一般】研究テーマを個人の自由で決定するのはなかなか困難。

【女性の問題】特になし。

2 修士までは勤めるが、博士までは勤めない。奨学金をもらって、学生生活を長く送るよりも、社会人になってのちのち学位をもらうほうがいいと思うから。特に女性は、年齢によって就職も困難になってくるので。

3 学位取得後の就職状況について、相談に乗ってもらっている。

4 大学院で、結婚している人は見られるが、出産等している人は少ない。理系は実験で毎日忙しいので、休暇が取れないためだと思う。大学院で課程と仕事の両立はなかなか理解者が少ないと思う。

5) 1 違いはあると思う。女性はどうしても年齢によって、結婚・出産による退職を企業側が配慮するので、大学院卒になるほど、不利な状況が多いと思う。

2 【男女共通】企業によって派閥がある。地方大学はエントリーの段階で断られることがある。

【女性】前述したように女性は、博士号を取得して企業に就職するのは年齢によってかなり狭められる。また、大学の教職につくのも、男性優先である事が多い。

6) 1 増やす必要はある。研究者、教授、助教授はいまだに男性ばかりだから。男性ばかりの世界がまた女性を遠くかせていると思う。30%は、かなり難しいと思う。

2 列挙している条件は、女性を増やすためには効果的だと思う。男性の教官が女性に対して平等に、また時には、女性である事に対して憂慮する対応が出来れば増えると思う。

7)

回答者番号：29

1) 1 男

2 文系 博士課程後期3年

2) 1 長年抱き続けてきた疑問について深く掘り下げて考えてみたかったから。進学それ自体をためらったことはないが、同じ時間を使うのに他にもやるべきことがあるのではないかと考えたことはある。

- 2 「本人が選んで決めたこと」という理解はあるが、40歳になってから本業を脇に置いて大学院へ進学することの意味は理解していない。経済的支援は得ていない。
- 3 大学側で用意されていた提供情報で特に不足はなかった。但し、自分が師事したいと考えていた指導教官の研究業績とその志向性については、自ら文献等を参照してよく理解しておくように努めた。
- 3) 出身学部 = 文系 現在の大学院 = 文系
- 理由：1. 専攻として一貫させることに何の不都合もなかったから。 2. 専攻分野が社会科学系の応用科学なので、必要があればどのような分野の基礎科学の知見でも参照できるから。 3. 私生活でも仕事においても、理工系を専攻する必要に迫られたことがないから。
- 4) 1 【大学院一般】研究指導については何の不足もないが、事務部門の学生対応業務が低劣で辞職した。実務経験の無い学生には通用するだろうが、社会人学生の目から見ればまるで左遷された落ちこぼれ集団のように見える。情けなくて苦情を言う気にもならなかった。
- 【女性の問題】特に意識したことはないし、女性の院生からそのような話を聞いたこともない。研究者に男女差はない。
- 2 他の選択肢があったことも考えれば、大学院に進学してよかったかどうかはよく分からないが、間違いではなかったとは言える。女子学生に限らず、他の人に大学院進学を勧めようとは思わない。本人が必要において決めるべきことだから。但し、相談を受ければ、それなりにアドバイスする用意はある。
- 3 そのような女性はいないし、特に女性だから相談したいと思うようなことはない。相談相手としてふさわしければ、男女差も年齢も国籍も関係ない。
- 4 研究業も1つの職業だから、職業一般に言えるような男女差の問題はあるように思うが、女性研究者に特定のジェンダー問題があるとは思えない。
- 5) 1 就職状況には個人差があるので何とも言えない。女性の院生の就職（大学教員）が相対的に厳しいとは聞いたことがあるが、その理由はよく分からない。
- 2 【男女共通】 就職は労働市場における市場取引だと考えるので、「要らない」と言われればそれまで。市場では交換価値のある／なしだけが問題であって、その背後にある多様な価値コードは全て不可視化される。したがって、就職に関する問題をそこで問題として問うことには賛成しかねる。
- 【女性】労働市場における交換価値のある／なしにジェンダー問題のバイアスがかかることはありうるが、それを問えなくするのが市場取引である。交換にバイアスを生むプログラム（男性優位）をそこで直截に問題にしてしまうのは得策ではない。争点を変えた方がよいのではないか。
- 6) 1 理由を特定すれば陳腐なジェンダー問題のイデオロギーに回収されてしまうので「分からない」としておく。研究者のジェンダーバランスが悪いことは認めるが、だから女性研究者を増やす必要があるとは思わない。したがって、数値目標に意味があるとも思わない。
- 2 そうした保護政策的なやり方は、イデオロギーを再生産して問題をいっそう根深いものにするだけではないか。目先を変えるべき。そろそろ「ジェンダー」などという陳腐なイデオロギーそのものを無効化する方向に転換してもよさそうに思う。「男性」「女性」という二項区分のカテゴリー化そのものがまことに気持ち悪い。
- 7) ご期待に即した回答ができなかったこと自体が意見です。

回答者番号：30

- 1) 1 男
 - 2 文系 博士課程後期2年
- 2) 1 社会に出て再勉強の必要を感じたため。以前から持っていた研究者になるという目標を達成するため。経済的事情で一度は躊躇した(学部4年からの進学を検討した際)
 - 2 学部卒業の時点での進学は、弟が受験に失敗したことがあり無理であった。現在の進学(会社を退職しての進学)は親の理解がかなり得られた。基本的には自分の貯蓄とアルバイトでやりくりしているが、授業料については親の理解もあり支援してもらっている。
 - 3 図書館など教育支援施設の詳細な情報。事務方の対応について(サポート体制)
- 3) 出身の学部は法学部だが、経済学を勉強していたが、そのときの反省(理論的なトレーニングの必要性)から、自然と経済学系の大学院を選んだというのが大きな理由。
- 4) 1 【大学院一般】授業料の負担が大きい。免除申請してもなかなか許可が下りない。研究に関する教授等の支援はまったく問題がない。
【女性の問題】女性でないのわからない。
 - 2 私自身はよかったと思っている。前職の会社での労働が苛酷であったことと、進学欲があったことがその理由。ただ、男女問わず大学院への進学は勧めない。定職を持っているのなら良いが、大学院生の就職が厳しく、経済的にも過酷であるから。
 - 3 残念ながらない。いたとしても、研究分野が近くない限り相談相手にはならないと思うので、相談はしないと思う。
 - 4 大学の研究職であれば、勤務時間は比較的柔軟であるため上記の問題はあたらぬのではないだろうか。大学院生に関しては、理系のように実験施設等が要するため大学に行かないと研究ができない場合は男女どちらであれ(事が、収入確保の目的かを問わず)仕事と研究の並立は不可能ではないと思う。ただし、私が今置かれている立場を考える限り、仕事と研究の両立は大変困難。
- 5) 1 私の研究分野に関する限り、研究分野の特殊性ゆえ就職はすんなりといっていないのが実際であると思われる。男女間の際は寡聞にして知らない。
 - 2 【男女共通】全体的に受け皿が少なく、制約が大きい。特に私のような社会人経路で年齢のハンデがある場合、就職ができないことは研究生生活の破綻を意味するため、深刻である。
【女性】寡聞にして知らない。
- 6) 1 研究をすることに対する魅力がないのではないだろうかと考える。修士卒でも就職に有利とは言えず、しかも学費と大変な労力のかかる大学院生生活より、就職や資格取得に走るほうが実利があると考えられているのではないだろうか。今でも就職市場が厳しく、院生の水準もばらつきがあるためこれ以上大学院生を増やして研究者を「粗製濫造」するには反対である。
 - 2 「研究者になる」という目的(大義名分)をはずすことと、民間就職後の再勉強としての枠を増やすのであれば女性研究者は増えると思われる。
賞や奨学金、定員枠などに女性枠を設けるのは反対である。私を含め生活に窮している大学院生が多いのに、そのような枠を作ることは、本当に研究志向の院生の意欲を阻害する。
- 7) 女性のことも大事だろうが、研究者をめざす院生全般についてもっと目を向けてほしい。独立行政法人化の影響なのか、予算減の影響なのか定かではないが、本当に研究を進めたい院生が、生活が成り立たないこ

とが原因でアルバイトに熱を上げないといけない状況は、研究の進展を阻害しているのではなからうか。修業年限の制約で奨学金・授業料免除などの制度を剥奪されたいわゆる OD (オーバードクター) の問題は深刻であるはずだが、そちらにもっと予算配分をするなどの施策のほうが有効なのではないか。

回答者番号：31

- 1) 1 男
2 文系 博士前期課程1年
- 2) 1 自由度の高い研究をしたかったため、また自分が探求したいことがあったため。ためらったことは、お金、安定性、社会的な地位。
2 理解も経済的支援もあった。
3 大学院卒業後の進路。海外留学支援について。
- 3) 出身学部 文系 / 現在の大学院 文系
自分の興味の対象がはっきりしていたため。
- 4) 1 【大学院一般】学業に必要なお金の問題。奨学金などの借り入れは避けたい。大学側で学業を頑張っている学生に資金面で支援したり、あるいは大学教官の研究をアルバイトとして手伝う仕組みを用意してほしい。
【女性の問題】特に男性なので気にならない。
2 良かったと思う。勧めない。難しい研究をやっている女性に対して、社会は理解がないと思う。
3 いない。
4 学内においては、特にないと思う。
- 5) 1 就職に実感がなため、わからない。
2 【男女共通】就職に実感がなため、わからない。
【女性】
- 6) 1 もう少し多くても良いと思う。人口比になるのが妥当ではないか。
2 女性だけを特別扱いする、例えば、教員・研究領域に定数の女性を確保するための目標値を設定することは、逆に不平等だと思う。各種の女性用の賞を作るなど、女性の活躍がしっかり目立つ、世の中に認められる活動が、最優先だと思う。
- 7)

回答者番号：32

- 1) 1 女
2 理工系 博士課程2年
- 2) 1 大学院に進学した理由は、一人前の研究者になりたかったからです。進学をためらうということはなくて、特に4回生から修士に入るときは、まわりがほとんど進学だったので、迷うことはありませんでした。修士から博士課程に入るときは、進学する同期の女子が自分一人しかいなさそうなこともあり、迷いましたが、一人前の研究者になるためには必要であるかと思い、進学を決めました。

2 進学については、幸い、家族から理解、経済支援ともにありました。

3 入っている学生さんの本音とかが聞ければそれに越したことはないですが、。

教授と自分の考えがあうかどうか、皆土日実験しているのか、何時から何時まで平均して実験しているのかとかがわかればありがたいです。

3) 出身学部 理工系 現在の大学院 理工系

特に文系に移ろうという気はありませんでした。

4) 1【大学院一般】指導教員に関しては、研究室ごとに大いに差があるかと思いますが、研究者であっても教育者でない先生だと、学生もともしんどいのではないかと思います。研究テーマに関しても、なかなか自分の意志が尊重されないですが、それはまだ駆け出しの学生にとっては、しょうがないことかもしれせん。変に先生に反発して印象を悪くすると後々、きまづくなることがあったりします。

【女性の問題】女性研究者の数が少ないことはとても寂しいです。目指すところがなかなかみつかりません。特に、研究は朝から晩まで休日関係なく、しなければならぬので、力的にとてもきついうえに、将来的に結婚、出産、子育てもしたいなあ考えると、あまりの難題の多さにとてもつらい気持ちになることがあります。かといって、実力、結果の世界なので、女性だけ優遇しろというのも無理な話であるとは思いますが。

2 私は、研究者になりたいので、進学してよかったとは思っています。ただ、後輩の女子学生にアドバイスするとすれば、研究を続けたいという気持ちがないのなら、おすすめしません。とても大変な世界です。企業に就職するのなら、修士卒くらいがいいと思いますが、結婚、出産を機にやめる人も多く、せっかく学位をとっても、ということもあるかと思えます。

3 まわりに相談にのってくれるような人は、いるといればいます。でも、まだ悩むところは同じで、手探りなひとが多いです。成功している女性研究者にはなかなかめぐりあえません。

4 育児、家事参加が少ない 男性研究者の一日をみているととても家事、育児を手伝っている様にはみえませんが、、、ほとんど家にいないのではないのでしょうか。

女性の能力への偏見 これはありますが、実際理論的な考えをすることに、やはり女性は不向きなのかなあと思ったりします。優秀な女性研究者って男っぽい人が多い印象もうけます。

女性が働きにくい環境 出産、妊娠とかのタイミングが難しいですね。研究はブランクがあるととてもつらくなりますから、(続けることが大切であるといわれます)とくに、キャリアを積まなくてはならない時期がそういう時期と重なりますから、本当に気が重いです。最近学振で、やっと(?)休みをとれる制度ができたそうですが、いち早く結果を出して欲しいポストからみれば、こんな時期に、、、と腹立たしく感じられても仕方がありません。

5) 1 博士卒の女性で企業の研究職での就職はかなり厳しいと聞きます。採用しても、すぐに出産、育児で働けなくて使えないという理由だとは思いますが。ポストクなら、実力次第だとは思いますが、、まだ決まっていないので、何とも言えませんが。

2【男女共通】ポストクの待遇が悪いと思います。皆朝から晩まで働いて、学生時代から熱心に勉強、研究を続けてきているのに、不安定だという理由で安定な(今はそうでもないかもしれませんが、少なくともポストクよりは企業就職の方が安定)企業就職の道に進む人が多いです。もっときっちりとした待遇があってもいいのではないかと思います。

【女性】差別しないで欲しいです。出産、育児で、、という人は確かに多いですが、。

- 6) 1 研究の生活スタイルが、一流のラボであるほど、朝から晩まで、土日なしというものであるために、体力的な問題が大きいと思います。あと、一生懸命がんばっても、研究もしたいけど、結婚、出産、育児もしたいと思うと、、、迷いの気持ちが出てきて、(完全な両立は研究者の場合、無理なので)、なかなか研究にうちこめなくなるときもあります。どうせ頑張っても、、、という感じで。増やすのはいいですけど、無理に増やすのもどうかと思います。能力のない人を無理にポストにつけても、惨めな感じがするので、、、。
- 2 教員、研究領域に一定数の女性を確保するための目標値を設定するのは、いいかもしれませんが、もちろん実績も必要ですが、、、。あと、出産、育児などで少しブランクができて、働けるように、賞とか、いわゆる名誉みたいのがあると、復活できやすくなるかなあとは思いますが、、、。
- 7) 女性研究者の問題は、研究を続けるうえで、本当に自分自身悩んでいるところです。研究もしたいし、結婚、出産、育児もしたい、、と思うと、努力だけではどうにもならないことができてきます。でも、ここで負けてしまっただけでは、良い方向にもむかないので、何とか、両立できるように頑張って研究を続けていきたいなあと思っています。このような問題を取り上げて下さることは本当に嬉しいですし、自分としても数少ない女性研究者として、研究の環境の改善に取り組んでいけたらいいなあと思いますので、何かお役に立てることがあれば、参加してみたいなあと思っています。

回答者番号：33

- 1) 1 女
2 文系 修士課程
- 2) 1 研究者になると思ったから進学をためらう理由はあまりなかったがあえていえば婚期が遅れること
2 進学が決まったとき家族は喜んでくれたし、現時点で奨学金を借りていないので、経済的支援を受けている。経済的には問題なかった。
3 今思い出しても入試を受ける時点でどのような情報があったらといっても思いつくことがない。こんなものかなと思った。
- 3) 出身学部は文系で、現在の大学院も文系。
文系という点では学部も大学院も同じ。なぜ同じものを選んだかといえば、文系の学部で在籍すると、いきなり理系の大学院には進めない気がするし、そもそも理系の科目(理科や数学)が割合苦手だったので、理系に行くことはほとんど考えていなかった。逆はあるだろうけど。
- 4) 1 【大学院一般】指導教員の対応もよく、研究テーマの決定についても自発的に決定することができた。奨学金(日本育英会)はもらっていないが、なぜもらわないかというと、将来教員になると返金しなくてもいいという規定がなくなったから。そうすると、利子がつく奨学金をもらうくらいなら親に借金するほうがいと親がいう。結婚・出産については大学院(特に研究者コース)時代にすることは正直難しそう。私は女なので相手が働いているのでそんなに難しいことはないが、家庭と研究を両立することは難しそう。私の場合、大学院時代は修行時代と考えているので、一人前になるまで結婚するつもりはない。そういう意味で制約をうけているわけだが、そもそも社会人ではない大学院生が大学院時代に結婚して出産するということに対して大学院が好意的だと思えない。育児休暇が大学院時代にももらえるんですか? もらえたとしてもやはり就職のことが気になる。大学院時代に結婚して出産したことは就職について有利になるのか不利になるのか少し不安。特に不利になることがないかが不安。結婚、出産、育児、

おしなべて大学がどのように支援していこうとしているのか大学院生の私自身が知らない。そういう意味では大学院に入る前にそういう情報は示してもよいかもかもしれない。海外の大学院はこのことについてもっと進んでいるんでしょうね。もし、そういう体制が充実しているのなら結婚と出産についてもっと前向きに考えることができるでしょう。

【女性の問題】指導教員の対応や研究テーマの決定について指導教員が女性に不利にするようなことはなかった。もちろん有利にすることもなかったが。奨学金についてはもらっていないので女性が不利になるとかは考えたことはない。結婚・出産については現在特定の相手がいるので、私がもし大学院に行っていなかったらすでに結婚して出産もしていると思う。なぜそれを私がしないかといえば、私の親がまず大学院時代は研究に専念してほしいと考えていることと、私自身も研究と家庭を両立させることは難しいだろうと考えていることがある。経済的には相手は働いているし、自分も奨学金をもらえば問題は無いだろうと考えている。結婚・出産について経済的理由は働いていない。それよりも大学の支援体制がないこと、私の偏見かもしれないが大学院は研究するところであり、結婚は何か研究に専念していない印象を抱かれるような気がしてならない。男性の場合は相手の女性がサポートしてくれるのでまあ好意的に思われるのかもしれないが、私のような女性の場合は私が家事をすることになるだろうから負担が大きく、メリットがなさそうなのに結婚することが好意的に思われなさそう。また、就職するときの有利不利も結婚や出産をしているとありそう。結婚相手が関西にいて私が関東の大学を希望しても結婚していたり出産していたら就職させてくれなさそう。

- 2 大学院に進学をしたことは後悔していない。後輩の女性学生に大学院入学を相談されたら、婚期や出産の機会が遅れること、大学院にそれを支援する体制はないこと、閉鎖的なのであまり好意的に受け取られなさそうだということは一応説明すると思う。もし特定の相手がいるならなおさら。研究に関してはその道に進み、研究者になりたいと考えるのなら大学院進学をすすめると思う。そうではなくてとりあえず行きたいぐらいの気持ちならすすめない。
- 3 大学院在籍中の女性はいるが、卒業生はいない。同じ研究分野で結婚されて出産されている助教授の先生があらわれるので、話す機会があれば結婚や出産についてそれと研究との両立については相談してみたいと考えている。その先生は出産されてすぐ2年間の海外研修をされていたので、やはり夫との関係の維持とかについても聞けるなら聞いてみたい。やはり夫の協力・支援の有無が女性研究者の場合重要だと考えられるから。
- 4 女性研究者が大学院に少ないのは、そもそもそこまで突き詰めて研究しよう、研究して生計を立てようとする女性自体が男性よりも少ないからということも考えられると思う。やはり女性の中には男性に働いてもらうという意識の人もいると思うから。後は、研究者になるまで少なくとも5年は大学院に在籍するわけだがこの間が女性には結婚・出産適齢期にあたる。その割には大学院に支援体制がないと思う。また、大学院自体にそれを奨励する雰囲気もなさそう。研究に対して結婚はマイナス（特に女性の場合）になると考えられてそう。女性の能力への偏見を大学院にいて感じることはない。そういうことを話しているのを聞いたこともない。ただ、研究者になった後では、出産や育児休暇はむしろとりやすいのではないだろうか。その前、大学院時代に女性の結婚・出産について家庭との両立支援策があるのかどうかそれさえも知らない。また、あるとも思えない。
- 5) 1 女性の就職についてあまり周りに知っている人がいない。修士課程には女性が多いが、博士課程にいく女性は少ないから。男女で就職状況・就職先が違おうと考えたことはない。男性が優遇されているとも感じ

ていない。能力がある人は男女問わずばりばり働いていると思う。

2【男女共通】最近では公募が増えているが、本当に公募で公平に決まっているのだろうか。公募だといいながらすでに内々で決まっていたりすることもあるのではないかな。やはり自分の先生に力があれば決まりやすいのは男女関係なくそうなのではないかな。

【女性】就職の際に未婚と既婚で対応に差はあるのだろうか。また、既婚でも出産しているのとしていないのでも差はあるのだろうか。こういうことで噂を聞くことがあるが、未婚だと不利になるとか既婚だと不利になるとかいろいろある。何が出所なのかわからないが、そういう噂が流れるくらいだからもう少しそういうことにも透明性を確保してもらいたいと思う。

6) 1 女性大学院生の数が少ないのは、1つには女性で研究を生業としていきたいと考える人が男性よりも少ないということが考えられる。もう1つは結婚や出産に対する弊害だと思う。私は女性研究者を増やさなくてはならないとは思わない。これは増やすものではない。結婚や出産、家庭との両立をはかったら「結果的に」増えるかもしれないというだけである。30%の目標値なんてナンセンスだ。目標値があること自体おかしい。その目標値はどこからでてきたのか。それよりも支援策を持つ大学院の目標値を掲げるべきだ。実際現在の大学院生はある程度結婚や出産が遅れることは覚悟してそれでも研究したいから大学院に入学してきている。本当に支援策がないことが何か女子大学生の進学への妨げになっているかどうかは私達大学院生に聞くのではなくて女子大学生に聞くべきではないか。研究者を増やすためには確かに結婚や出産の支援体制が必要だとは思うが、大学が男女問わず優秀な研究者を輩出するカリキュラムや人材育成が果たしてできているのかを問うことが第一に大切なことではないかと思う。対して優秀でもない女性の数が増える必要は現在もない。

2 先ほど書いたこととも重複するが私の意見では女性を重宝してくれなくて全く構わない。私は男性と同じ土俵で研究したい。女性だけ恵まれることは望んでいない。出産や育児に対しては女性の負担は大きいけど、男性も然りである。男性だって奥さんの世話や面倒をみたいと思うこともあるだろう。女性偏重の支援体制ではなくて、男性も含めてもらいたい。そういう意味で男女を対象にした育児支援の奨学金はいいと思う。男性も結婚や育児を支援してもらえれば家庭と研究を両立させていこうとする気持ちをもってくれるだろう。女性も然りである。現在は日本のどこの大学もやっていないと思うが、女性研究者、男性研究者を対象にした保育施設もあれば女性研究者も結婚だけでなく出産しようとするかもしれない。そして結果的に家庭と仕事を両立させる優秀な男女の研究者が輩出できれば大学にとってもよいのではないかな。再度言うが、女性用研究費、奨学金、賞、目標値を掲げるくらいなら保育園を作ったりベビーシッターを雇ったり保育園の費用を払うほうが前向きなのではないかな。女性用なんていらない。それでは男性の結婚や育児に対する関わりを否定しているようだ。

7) この問題については男女問わず、現在研究者の人、現在大学院にいて研究者を目指そうとしている人、現在大学にいて研究者になるかどうか迷っている人、多様な人にその意見を聞いてもらいたい。そして、少しでも仕事と家庭を両立できる空気を研究者環境の中で作ってってもらいたいと願っている。女性の参画が大切だと言っている男性研究者も実は家庭そっちのけということも多分にあるのではないかなと思うので。最後にそもそも大学院に結婚や出産の支援体制がないことが女子学生の大学院への進学にどの程度影響しているのでしょうか。そして女子大学院生の増加が研究者全体の質を上げることに果たしてつながるのでしょうか。研究者全体の質を上げることを最終的な目的とするなら女性大学院生の増加だけではなくて現在の人材育成のやり方そのものを変える必要もあるのではないかな。また、現在の研究者の業績評価もまた

必要になってくるのではないのでしょうか。私は、女子大学院生の数に目標値を掲げることで大学院入試の際に同じ点数だったら男性よりも女性を合格にするというようなまちがった女性偏重につながらなければよいなと思っています。

回答者番号：34

- 1) 1 性別 女
2 専門分野 理工系 博士課程
- 2) 1 進学の原因 : 研究が好きだったから。
進学をためらう理由 : 金銭面が気にかかり、ためらった。
2 最初は女ということもあり、博士課程進学については賛成されなかったが、今では理解し、経済的にも支援してくれている。
3 ホームページの情報を充実させてほしい。研究室毎の、教授の教育方針をしっかりと掲載してほしい。
- 3) 出身学部 : 理工系 現在の大学院 : 理工系
- 4) 1 【大学院一般】大学院への進学率が上がっているが、奨学金の枠は減っている傾向があると思う。
【女性の問題】現在は、特に問題は感じない。
2 よかったと思っている。行きたいと考えている人には、是非進学してもらいたい。
自分自身も進学してよかったと思っており、同じように思う女性も多いと思うので。
3 いる。結婚、出産後の仕事復帰について。
4 自分自身で、現在そのように感じることはないが、将来的には不安がある。
- 5) 1 学部卒や修士の場合は、女性は若干不利な印象があったが、博士課程修了後については、分からない。
2 【男女共通】特でない。
【女性】女性で、地方出身者は特に厳しいと感じることがある。
- 6) 1 女性の場合、人生設計は多様なので、金銭面でも負担の多い学生を続けていける人は、少ないと思う。
女性研究者を、特に増やさなくてはならないとは思わない。
2 女性だから与えられる特権のようなものは、多く与え過ぎてしまうと、同僚の男性から、正当に評価してもらえなくなる可能性があるのでは、望まない。
- 7) 育児支援の奨学金については、是非あったらよいと思う。

回答者番号：35

- 1) 1 男
2 理工系 博士課程1年
- 2) 1 理系では大学院進学が研究職につく条件のため経済的理由ではためらったところもあった
2 理解、支援はあった
3 研究室の風景、卒業生の感想、業績を他の研究室と相対評価した情報
- 3) 出身大学、大学院も理工系
文系では資金に直結する能力を得ることができないため

- 4) 1 【大学院一般】研究テーマは教授がほぼ決める
 【女性の問題】女性への教員の対応に問題がある。セクハラに近い言動、行動がある
- 2 進学してよかった。後輩にはこれからの研究室の雰囲気次第で考える
- 3 相談に乗ってくれる女性はいるが、特に相談したいことはない。
- 4 特にそのような状況は見受けられない。
- 5) 1 特に就職先に違いはない
- 2 【男女共通】博士課程卒業者を敬遠しがち
 【女性】特にない
- 6) 1 研究室での不規則な生活や、男性が多いことによる雰囲気、女性にとって結婚を考えた場合に大学院への進学が必ずしもプラスになるとは考えにくい場合があることが原因。研究室での雰囲気作りや、研究への新たな視点を得るためには女性研究者は必要であるが、30%はかなり到達するのに厳しい設定のように感じる。
- 2 本質的に研究という一つのことに打ち込む性格は男性より少ないと考えている(30%が厳しいのはこの理由が大きい)ので、そのような女性が何も困ることなく進学できる環境を作るのが重要。育児奨学金や女性対象の賞などは大学院への進学がプラスになると考えられてよいと思う。目標値については、補充不足の場合に適任ではない女性が押し込められる場合が考えられるため、効果的ではないと考える
- 7)

回答者番号：36

- 1) 1 女
 2 理工系 博士課程3年
- 2) 1 研究者になりたかったから。別にためらったことはない。
 2 理解はあった。経済的援助は、自宅から通うことを許可されたことくらい。学費は自分で。
 3 特に不足は感じなかった。
- 3) 出身学部 / 理工系 現在の大学院 / 理工系
 学部での研究を通じて、科学者は面白そうだったから。
- 4) 1 【大学院一般】特にない
 【女性の問題】特にない
- 2 進学して良かった。後輩に勧めるとは限らない。本当に興味を持って楽しく出来そうだと思うなら進めばいいと思う。何となく行くのは、よした方がいいと思う。
- 3 いる。日々の細かい困ったことや、進路のことなど。
- 4 あまり感じたことはない。実際、半分くらい女性が存在する。
- 5) 1 少なくとも同級生ではない。
 2 【男女共通】特にはない
 【女性】企業に入った場合、結婚や出産でやめてしまうと、後輩がその企業に入社し辛くなってしまうのは、どうにかならないかと思うことがある。
- 6) 1 女性大学院生の数が少ないのは分野によると思う。女性研究者をただ数値で切って増やすのはおかしい

と思う。ただし、研究者になりたいのになれない環境があるとしたらそれは問題だと思うが、何となく研究者になるのは賛成できない。

- 2) 男女を対象にした育児支援の奨学金を設けることはいいことだと思うが、その他はあまり良いとは思わない。女性から考えて、奨学金をもらえるチャンスが増えるのはラッキーなので応募する人はいると思うが、それが直接女性研究者を増やす要因になるとは考えにくい。

7)

回答者番号：37

- 1) 1) 男
 - 2) 理工系 博士課程後期2年
- 2) 1) しっかりと自立した形で、研究の着想から、論文にまとめていく課程を習得したかったから。
 - 2) 家族の理解は得られていた。
 - 3) どういう奨学金等の補助が受けられるのか？という情報。
- 3) 出身学部：理系、大学院：理系、化学に関する研究をしたかったから。
- 4) 1) 【大学院一般】授業料免除に関する規定が厳しすぎる。
【女性の問題】特にないと思う。
 - 2) 研究の力をつけられて満足しているので、後輩の女性にも勧めると思う。
 - 3) いない。相談したいこともない。
 - 4) 自分の研究室見る限りでは、特にないと思う。
- 5) 1) 自分の研究室では、男女区別なく力ある人は、平等に研究職につけている。
 - 2) 【男女共通】特に博士課程にいえるが、やってきた専門性ばかりが重視され、個人の持つ資質への評価が低い。
【女性】特にないと思う。
- 6) 1) やる気がある女性なら増えていいが、ただ漠然と女性の数を増やすという安易な発想はやめてほしい。
 - 2) 男女平等というのなら、女性だけへのルールなどやめてほしい。そもそもポストクの数自体が多く職に困っているから、もっと大きな視点での改革をしてほしい。
- 7) 上にも書いたが、女性問題だけでなく、研究者の社会的待遇自体が低いことが、まず大きな問題と思う。研究者に対する社会からの理解、そしてそれ相応の支援が増えることがまず第一と思っている。研究者一人一人が社会性を意識して、日々の研究に取り組むことも大事だが、国からの明確な指針や支援が不可欠と思われる。

回答者番号：38

- 1) 1) 女
 - 2) 文系 博士課程4年
- 2) 1) 学部の勉強が物足らなく、さらに学びたいと思ったから。
 - 2) 家族は無干渉（無関心、消極的な理解）。経済的支援は特に無し。

3 研究室のメンバーの具体的な研究内容

3) 出身学部：文系 現在：文系

4) 1 【大学院一般】指導教官により、学生に対する「面倒見」(論文指導や就職に関して)の度合いが、かなりまちまちであること。

【女性の問題】特になし

2 良かったと思っている。後輩に勧めるかどうかは、人による。芯の強い人には勧める。

3 いる。研究生活全般について(研究の内容から、経済的な問題まで)、よく相談にのってもらっている。

4 女性の能力への偏見はなくなってきていると感じる。しかし、やはり実面的な面で、仕事と家庭の両立支援策がないことは、大きなネックになっていると思う。

5) 1 自分が院に入ってから(ということはここ7年)、同じ研究室の女性で、卒業後に大学で職を得るなど、研究職に就いた人はひとりもいない。男性はみな、どこかの大学で講師になっている。

2 【男女共通】就職口が少ない。研究職は初めは特に給料が安過ぎる。

【女性】特に無し、上に同じ。

6) 1 学問の厳しい世界にすすんで入りたいと考える女性が、単に少ないからではないか。あえて女性研究者を増やさなくてはならない、とは考えない。

2 「女性」を対象にした経済的援助には反対。男女の区別なく、育児支援などがあればよいと思う。

7) 自分の周囲を観察して思うに、大学院に進学する女性の割合が少ないのは、「環境」に問題があるからではない。本当にやりたいことがあったら、そういうことはあまり問題にならない。大学院に入ってまで勉強したいと思う女性が単に少ないだけ、と考える方が自然のような気がする。

回答者番号：39

1) 1 女

2 文系 博士課程後期1年

2) 1 大学で教鞭をとり、研究者としてだけでなく、教育者として働きたいと思ったため。

女性が多い世界ではないと思っていたので、女性であることの不利さがあるかもしれないと思い、少しためらいはあった。

2 進学したい旨を伝えた際は、その道で職があるのか、生活していけるか等について心配されたが、きちんとした研究をしていけば生活していけることを伝え、説得した。前期課程の頃、経済的支援はあったが、研究に関わって必要となる諸費は家庭教師などのアルバイトで賄い、後期課程からは奨学金とTAや家庭教師からの収入により、生活費と学費の全てを賄っている。

3 昨今、社会科学系では欧米諸国が研究の最先端であると考えられるため、大学院の国際的な活動や交換留学の実績値などをあげてもらえると良い。交換留学についての情報が多少は載っているものの、実際を見れば、自分が希望するような学校は提携先として存在するだけで、最近の派遣実績がなかったということがあったので。

3) 出身学部 文系 / 現在の大学院 文系

大学での勉強がおもしろく、それを続けるために大学院へ進学しようと決めたので、他の道へ行くという選択肢はなかった。

4) 1 【大学院一般】学生にも教職者にも共通して言えることだが、真摯に研究に取り組んで実績をきちんとあげる人間と、そうでない人間が同じ空間にすることで、仕事の当たり方がアンバランスになっている。もちろん、実績をあげる人間は目立つため、その分諸々の仕事を振り当てられることが多く、かえって研究の妨げになっているような場合も見受けられる。

【女性の問題】大学院の学生としては特に問題ないが、教職に就いてから、出産などでどの程度仕事を休めるのか、そしてその期間は実際に取ることが可能なのか、という点で、前例が少ないため不安がある。

2 研究活動が好きであり、学習環境にも恵まれていると思うので、進学したことはよかったと思っている。しかし、依然として男性社会であり、会話の上で女性が話づらい内容が話題となることも少なくない。また、実際に、女性の大学院生が結婚を期に研究職への道を絶つという場合もあるため、男性の先生方から「女性の院生は育てにくい」という内容の話を聞いたことがある。これらの話の善し悪しを言うつもりはないが、差別とは言わないまでも、性別に基づいた判断がされ易いため、特に勧めることはない。ただ、研究活動が好きである後輩には、これらは取るに足りない問題なので、勧めたい。

3 女性の先輩はいるが、相談することはない。今までは、悩みがあっても、女性の先輩に相談する必要はなく、同世代に助けをもらいながら、または他の業種の人に相談しながら解決してきたため、特に相談したいこともない。

4 一部の男性院生には、女性に対する偏見があるが、ほとんどの学生にはそのような偏見はない。ただ、(少なくとも)私の周りでは、社交性が重んじられる感がある(懇親会や食事会の参加)ため、その点では、そもそも女性の人数が少ないところに、出て行くのが嫌な人も多いと思う(私もその1人)。

5) 1 私の知る限り、同分野でも8割以上の先輩が男性であるため、女性の数が少なすぎて判断がつかない。

2 【男女共通】財務会計の分野では、国内にレフェリド・ジャーナルが少なすぎて、大学院生のうちに、ジャーナルに自分で執筆した論文を投稿するという機会をもてない。そのため、経営学系の他分野の学生に比べて、自分の業績が一般的にどのように評価されるかを知る機会に恵まれない。就職では、そのような点がどのように判断されているのか分からない。

【女性】女性特別の問題はない。

6) 1 セクハラ問題などが近年顕在化しており、教授職に対する一般的な女性のイメージが悪いと思う。女性研究者が増えても可能な環境を作ることが優先されるべきで、増やそうという試みは必要ない。

2 既存の教職者の意識を変えない限り、表面的な制度の変更は何の意味もなさない。また、女性枠を設ければ男性から苦情が出ることも予想される。むしろ、名目ではなく実際に男女ともに育児休暇をとれる仕組みを作ったり、女性が働きやすい環境にある、他国の例に倣うなどの取り組みをしてほしい。

7)

回答者番号：40

1) 1 女

2 理工系 博士課程後期3年

2) 1 もともと大学の先生になりたいという希望があったため。父が病に倒れた時、家計を考えて進学をためらったことあり。

2 父は進学を賛成してくれていた。母は私の望むようにさせてくれた。

- 3 卒業後の進路情報について。
- 3) 出身学部 理工系 現在の大学院 理工系
専門分野に大変興味があるから。
- 4) 1 【大学院一般】特になし
【女性の問題】女の子の友達の割合が少なくなった。
2 とてもよかったと思う。後輩の女子学生にも勧める。これからの時代女性も男性と同等に仕事していく必要があると考えるので。
3 あまりいないのでわからない。仕事と家庭の両立の仕方について相談したい。
4 特に感じられなかった。
- 5) 1 特に違いがあるように思わない。
2 【男女共通】会社に就職する場合、博士後期課程まで進学すると雇用先が少なくなる。
【女性】生涯働ける場所を探すのは難しい。
- 6) 1 まだまだ女性の能力への偏見があるから。ふやせればよいと思う。30%という目標でよいと考える。
2 男女を対象にした育児支援の奨学金を設けるのがよいと思う。
- 7) 特になし。

回答者番号：41

- 1) 1 女
2 理工系 博士課程3年
- 2) 1 修士で面白いデータが出たので、博士でこのまま研究を続けたい。博士の学位が欲しい。
(躊躇ったこと) 指導教官とうまくやっていけるか。就職先があるのか。
2 「自分の人生なので好きにきなさい」と言われていたので理解はあったと思います。経済支援に関しては実家から通っていたので住に関しては支援してもらいましたが、それ以外の食事・学費・交通費・本代などは自分で支払っていました。
3 卒業後の進路に関するデータ、奨学金(学振も含む)に関するデータ
- 3) 出身学部 理工系 /現在の大学院 理工系
将来、理工系の分野で活躍したいという夢があったから。学部で学んだことを大学院でさらに応用して研究したかったから。
- 4) 1 【大学院一般】指導教官の対応に関してだが、学生を科研費をとるためにただ働きで来ている人だという認識が教官にあるのではないかと思う。論文書き方、学位論文に関する指導が全くない。研究室以外の人に自分の学生の誹謗中傷をする。データが出ない、論文を書くのが下手、悪いのは全て学生・・・そう言ってばかりで、自分に非が全くないと思っているので学生の質は上がらないし、退学者も増える一方。研究者であるのはいいのだが大学が教育機関だということを忘れてはならない。
【女性の問題】特になし
2 理系であれば修士は勧めるが、博士は勧めない。最近はどこ民間企業でも研究職は修士以上の学位を求められているため修士の学位はあった方がよいと思う。また、学部だと時間の関係で研究の上辺だけ学んですぐ卒業になってしまうのももう少し掘り下げて研究をする経験が必要と感じる。博士に関しては、

民間企業に限っては修士に比べてかなり採用率が低く、また博士の女性を採用する企業は少ないと聞いたので、それが事実なら民間の研究職を希望している女子学生に博士は勧めない。ポストクなどの任期制の職に関しても、例えば5年任期で採用された場合、大抵3年ぐらいで継続の審査などがあり、妊娠して1年産休や育児休暇をとったら事実上2年で結果を残さなくてはならず、非常に精神的に厳しい。以上の理由から女子学生には修士までは勧めるが博士はよほどの意思がない限り勧めない。

3 いる。将来の進路や指導教官の対応、研究室の運営について相談したい。

4 学生の立場だと、そういった事は感じられない。しかし誰もが、働くようになるとそういう状況がみられると言う。育児休暇や産休が任期制の職の場合は特にとりづらい(とっても良いのだろうが休んだ分の代償は大きい)そのため、私の周りの女子学生の間では、学生のうちに子供をつくった方が気楽・・・なんて意見まで出ていた。

5) 1 私の所属する研究室では本人の能力の差で就職先の違いはありますが、性による差で就職状況の違いはないと感じる。

2 【男女共通】指導教官が学生を科研費のための道具としてしか見ていないため、学生の将来のこと(就職活動など)に全く協力的でなく、文句まで言われ(就職活動で休むとデータが出なくなるため)就職活動をしづらい状況がある。結局、学位取得が確実になった2月頃でも採用しているポストクしか受けられず、民間は推薦がない限り、卒業見込みの状況で就職活動するのは厳しい。学生の将来を決める大事な時期であることを教官に認識していただきたい。

【女性】女性だからということで大学院において差別的なものは感じられないが、就職活動では男女で採用の仕方に違いを感じる面が多々あった。例えば面接で「女の子は面接でしっかり答えられる子が多いから、採用試験の点数や書類だけでいったらみんな女の子の採用になっちゃうな」と言いつつ、実際の採用比率は男:女=6:1で明らかにおかしい。採用が採用試験や書類のみで判断されていない、即ち男女という性差も判断基準に含まれているということである。男女の違いがどうしてもできやすい職種ならまだしも、研究開発職に男女の違いは関係ないように思われる。そういう失礼極まりない発言を平気で会社の上層部がするような会社は多く存在することを知った。人事ではないので実際女性の採用数を減らす意向があるのかなのか知りませんが、世間一般に言われる、「女性の就職は厳しい」と言うのは本当かもしれません。

6) 1 確かに女性大学院生は少ないが、それは性差ではなく個人の問題だと認識しています。大学院は男だとか女だとかで学問の自由を制限されるべきではなく、その大学院で必要な学力を有すると判断された者が入学すべきだと思います。それよりもその先の就職に関して性差を感じたり、女性にとって不利な状況があるから大学院に行く価値がないと思う女性が多いのではないかと思います。「女性研究者を増やさなくてはならない」というような考えには反対です。例えばその30%という数字によって本来研究者として能力の高い男性が職に就けなかったということは避けるべきである。それよりは女性も男性も働きやすい職場環境を作ることに力を注いでほしい。そうすれば自然に女性の研究者も増えるのではないのでしょうか？

2 定数の女性を確保することは反対です。目先の数字さえ上げれば良いというのではなく、内容を充実させた上で女性が増えた、という結果論での話なら分かりますが、単に一定の女性数を確保するとい考え方に何の意味があるのか理解できません。もし増やすのであれば大学院卒業後の進路においてもっと女性が働きやすい(お産などのことを踏まえて)職場を提供しないと増えないのではないのでしょうか？勿論男性が育児に参加できる体制を整えることも大事だと思います。実際男性が育児休暇をとれる会社も多いで

すがそれを利用した男性が驚くほど少ない(育児休暇をとりづらい)状況にもメスを入れるべきだと思う。男女を対象とした育児支援は賛成です。働く女性が増えているにも関わらず、男女のどちらかが子育てをしなくてはならないような環境は良くないと思う。女性の社会進出が原因で子供の数が減少しているのだとすればそういう支援によって改善されるのではないかと思う。

7)

回答者番号：42

- 1) 1 女
- 2 文系 博士課程後期2年
- 2) 1 研究することそのものが非常に面白く、自分にとってやりがいがあると思ったため。進学をためらったことは、経済的にやっていけるかどうかということと、就職があるかどうかということ。
- 2 家族の理解はありましたが、経済的な支援はなし。
- 3 指導教授についての情報。就職状況など。
- 3) 出身学部 文系 / 現在の大学院 文系
- 学部で学んでいたことを、さらにより専門的に研究したいと思ったから。
- 4) 1 【大学院一般】教務の事務の対応が、硬直的です。学生への情報伝達が大学の掲示板しかなく、調査などでしばらく大学院へいけないときに、必要な情報をチェックできないことがあります。メールやHPなどをもっと活用してほしい。特に奨学金の情報などは、経済的に困窮している大学院生にとって死活問題なので、配慮してほしい。
- 【女性の問題】大学院の中で女性が少ないので、設備など気になることがあります。女性向けの鍵がかかる更衣室などがあるといいなあと思います。あと、研究室で男性の院生がいすを並べて寝ていることがよくあるのも、非常に気になります。
- 2 就職については、本当か嘘かわかりませんが、女性は不利だといわれています。同じような能力なら、男性のほうが研究者として採用されやすいといったことが、今でもよく噂として聞かれます。こうした状況で大学院に進学し、研究者を目指すことは、かなり覚悟があるので、あまり、積極的には薦めません。
- 3 女性がほとんどいないので、思い当たりません。
- 4 女性への能力の偏見は感じませんが、男性と同じ条件で、深夜まで研究室に居残って研究することは困難です。(研究室そのものが性別への配慮がない環境です)。また、支援の有無よりも、女性の研究者としてのキャリアが、性的な理由で途切れる可能性が高いと先輩の研究者や同僚から思われていることそのものが、ハンディだと思います。(特に男性は意図的でなく、無意識に考えておられるように思います)
- 5) 1 女性の先輩がほとんどいないので、よくわかりませんが、研究者として就職された女性の方が、あれは女性枠だからと、噂されていたことは、ショックでした。
- 2 【男女共通】研究者の需要が非常に減っていますので、若手研究者間の競争がものすごく高くなっています。そのため、大学院在学中から、陰湿ないじめといったこと(足の引っ張り合い)が、あるように思います。
- 【女性】女性を研究者として採用する明確な意思があるのかどうか、採用側にはきちんと情報をだしてほしいです。採用条件には、性別による条件差はありませんが、実際は、よほどでないで女性研究者はと

るつもりがないといった、ことがあるようですので・・・。

- 6) 1 就職や就職後の昇進格差（見えない）が正されないと、女性研究者は増えないと思います。思い切って、大学ごとに女性枠を明示して、積極的に採用していただければ、女性研究者は増えるのではないですか？
- 2 育児支援の奨学金もよいことですね。そのほかに、育児休暇中の休業によって、その後の待遇格差が生じないようなしくみもほしいです。育児休業をしたから、就職条件が悪くなるということなら、誰もとらないでしょうし・・・。
- 7) 男女の問題も非常に、大きなことですが、社会問題化していませんよね。研究者は男女平等だと、世間一般では負われているようですが、実際に大学院にいるとそうでない、企業よりひどい（私は企業での勤務経験がありますので）と思うことが、よくあります。これは、大学の先生方（特に高齢の方）が、男性を優先的に考える刷り込みを意識せずにもっておられるからだだと思います。大学教員へのセクハラ教育など、もっときちんとすべきではないでしょうか？また、大学の採用枠で、年齢制限が非常に多いことも、問題ではありませんか？独立行政法人化された旧国立大学が、採用時に年齢条件をつけていることは、どうもおかしいように思いますが・・・。

回答者番号：43

- 1) 1 女
- 2 文系 博士課程前期1年
- 2) 1 学部時代にはクラブ活動ばかりに打ち込み、真面目に勉強しなかったため、社会に出るまでに、「私はこれを勉強しました」といえる専門性を身につけたかったから。
- 2 家族は賛成してくれたし、経済的にも十分な支援がある。毎月小遣いをくれているので、奨学金は申請していないし、アルバイトもしていない。
- 3 どんな企業と連携しているか。産官民の連携プログラムとして、どのようなものを行っているか。就職活動の実績と支援活動の実態。OBがどんな職場で活躍しているか、どのようなポジションについているか。修了者全員が学会に残るとは限らないので、当初は研究者を目指していたものの、途中で方向転換する人への情報もあったほうが良かった。
- 3) 出身学部 文系 / 現在の大学院 文系
- 文系から理系への転向は実質的に無理であるし、大学で触れた分野に興味があったから。
- 4) 1 【大学院一般】とくになし。
- 【女性の問題】とくになし。
- 2 よかったと思う。勉強したい人には十分に応えてくれる環境なので、そのような人には男女問わず勧める。
- 3 学内の先輩に相談できるが、したことはない。「女性」に限定して相談しなければならないことがどういうものなのか、理解し難い。
- 4 女性の多くが、男性と対等に働きたいとは必ずしも考えていない現状が最大の理由であろう。それゆえ、研究職というフィールドでも相応に女性が少ないのは当然だと思う。
- 5) 1 よく分からない。

2【男女共通】とくになし。

【女性】とくになし。

- 6) 1 4でも書いたが、女性の中で、男性と対等に張り合いながら仕事をしたいと考えている人がそれほどいないからだと思う。また、意識的に女性研究者を増やさなくてはならないとは考えない。
- 2 科研費などの研究費、奨学金、各種の賞に女性を対象としたものを設けることはする必要は無いと思う。なぜなら、優秀な研究者はそんなものを設けなくても実力が認められているし、国際的なフィールドで日本が勝つためにも、そのような女性だから、というような制度は無い方がよいと思うからだ。
- 7) 女性の立場から申し上げると、女性だから、という括り方はあまり喜ばしいものではない。体力的に生まれつき差があるスポーツなら理解できるが、研究に関して言えば、そのような性別による差はないものだと思う。そのようなフィールドで区別することは無いと思うし、むしろ、女性だけを対処にした科研費などの研究費、奨学金、各種の賞を設けることは、普通の、科研費などの研究費、奨学金、各種の賞は男性に負けて取れないから、女性向けのものを用意したのだ、と言われているようで面白くない。

回答者番号：44

1) 1 男

2 文系 修士課程1年

2) 1 研究者になりたいと思ったので。経済面でのためらいはあった。

2 理解、支援ともにあった。

3 大学院を出た後にどのような状況があるかということ。特に博士課程をまで進学した場合。

3) 出身学部 文系 大学院 文系

やりたいことが決まっていたので特に変更の必要なし。

4) 1【大学院一般】奨学金の状況。

【女性の問題】

2 進学してよかったとは思いますが、女子学生であろうと男子学生であろうと、大学院進学を勧める気にはなれない。

3 いない。

4 意識や環境ではないと思う。

5) 1 差は感じない。

2【男女共通】博士課程修了の人の状況を見ているととても不安。

【女性】

6) 1 研究に男も女も関係ないと思う。

2 あえて女性大学院生を増やすという必要があるのかわからない。院生全般的に、経済的な支援が必要だと思う。

7)

回答者番号：45

- 1) 1 男
 - 2 文系 博士課程前期1年
- 2) 1 財務会計の研究者を目指しているので大学院に進学したが、金銭的な面で進学をためらったことがある。
 - 2 家族は賛成してくれたが、基本的に経済的支援なしで大学院生活を送りたいと考えているため、ほとんど支援を受けていない。
 - 3 奨学金や学振などの経済的支援を受けることができる制度の情報。大学院修了者の民間就職と大学教員就職に関する情報
- 3) 出身学部 文系 大学院 文系
文系から理工系の大学院に行くことは能力的に無理があると思ったので、学部における勉強の延長として文系大学院に進学した。
- 4) 1 【大学院一般】国立大学は私立大学に比べて、資金面での補助が非常に少ない。お金が無い学生は進学できないようなシステムになっているように思える。
【女性の問題】特に無し。
 - 2 進学してよかったと思っているし、実際後輩の女子学生に大学院の進学を勧めている。理由は、大学院は自分の知的好奇心を満たすには最高の環境であるし、学部4年間では得ることができないような専門知識を身につけることができるからである。また、職業のひとつとして考えても、大学研究者は魅力的な職業だと思うから。
 - 3 いない。相談したいことも特に無い。
 - 4 研究活動は場所を問わず、どこでもできると思うので、むしろ民間企業よりは仕事と家庭を両立しやすいと思う。特に、女性が働きにくい環境にあるとは思えない。
- 5) 1 まだM1なのでよく分からないが、無いと思われる。
 - 2 【男女共通】就職の決め手になる要素がまったく分からない。良い研究をすればよい就職ができるとは限らないように思われる。
【女性】女性の大学教員が少ないため、問題があるのかどうか分からない。
- 6) 1 無理に増やす必要はないと思う。何をもって30%という数字を目指すのか意味が分からない。
 - 2 金銭面で女性が不利であるとは思えない。育児についても大学内に保育所などを作ることは良いことだと思うが、無理に一定数の女性を確保する意味が分からない。
- 7)

回答者番号：46

- 1) 1 男
 - 2 文系 修士課程1年
- 2) 1 専門性を身に付けるため
 - 2 あり
 - 3 特になし
- 3) 文系 文系

興味の問題。大学時代の知見が院時代にも繋がっているということ。

- 4) 1 【大学院一般】奨学金の状況
 - 【女性の問題】 深夜の帰宅時の安全。
 - 2 自身は良かったと思う。女性の後輩に関しては、「深夜の帰宅時の安全」以外は特に女性不便を私は感じないので、勧める。
 - 3 なし
 - 4 なし
- 5) 1 研究職に限らず、一般企業でも女性は不利だということを若干感じる。
 - 2 【男女共通】なし
 - 【女性】 1で回答済み
- 6) 1 女性が少ない理由は入学志願の絶対数が少ないのではないか。私が所属する経営学系ではやや女性が少ないが、文学部などでは女性が比較的多いのではないか。女性の大学生数と進学への志望者数の低さ。
 - 2 院生に子供がいる例は男性でも極少数だ。女性・男性共に育児支援、奨学金を設けても、女性の数増加の抜本的な解決になるとは思えない。ないよりマシだとは思うが。大学生や働いている方、専業主婦等へ進学への啓発活動をした方が効果はあるのではないだろうか。
- 7) 大学の教員に男性が多いのは事実だと思うが、男性の視点では、女性の大学教員や管理職が少ないことと現代の女性院生が少ないことの因果関係には疑問が残る。院に限らず女性の進学率を高めることが、院生の女性増加に繋がるのではないか。その対応として育児支援・奨学金がベストだとは思えない。「女性の大学教員や管理職が少ないこと、任期付きの職に就く女性が多いことなど、男性優位の社会にあることは明らかです」とあるがもっと詳しい説明が必要なのではないか。

回答者番号：47

- 1) 1 女
 - 2 理工系、博士課程後期3年
- 2) 1 修士課程に進学するときは、あまり深く考えなかったが、もう少し勉強したいとは思った。
 - 博士課程に進む時は、研究が楽しかったから。
 - 2 理解・経済的支援とも十分あった。
 - 3 特になし
- 3) 出身学部：理工系、現在の大学院：理工系
 - 選んだ理由：学部の分野に興味があったから
- 4) 1 【大学院一般】研究室があまりにも閉鎖的。問題があっても内部で抱え込み、結果的に学生にしわ寄せが来る。
 - 【女性の問題】特になし
 - 2 大学院に進学して良かったと思うが、後輩には勧めない。多くの苦勞を伴い、生易しい事ではないので、人には簡単に勧められない。本当に行きたいと思う人にだけ進んで欲しい。
 - 3 いる。研究室のおかしな問題で学生が困ってしまったときの対処法など。
 - 4 所属研究室の事しか分からないが、家事への理解・仕事とかの両立支援は極めて少ないと思う。仕事一

辺倒が良しとされていると感じる。大学院に進んで良かったとは思いますが、ここでは絶対に働きたくない。

- 5) 1 就職に男女差はないと思う。
2 【男女共通】教授が就職を甘くみていること（簡単に就職が決まると思っていると感じる）
【女性】特になし
- 6) 1 女性大学院生の数が少ない理由はよく分からないが、大学に進む時点で意識に差がありそうな気もする。
別に特に意識して女性の数を増やす必要はないと思う。30%という目標を作ること自体、あまり理解できない。
2 女性だけ特別な賞や人数設定を作るのはおかしいと思う。男女に拘わらず進む意欲のある人が大学院に行けばいい。出産は女性しかできないので、出産・育児支援はあったほうがいい。
- 7) 男性優位の社会システムはあると思うが、大学院の教育システムに関して、女性が勉強しにくいといった環境と感じたことはない。

回答者番号：48

- 1) 1 女
2 理工系 修士課程2年
- 2) 1 将来研究職に就きたいと考えており、それに必要な知識や経験、技術を得るため。
2 進学するにあたって理解・経済的支援に関して特に問題はなかった。
3 特になし。必要な情報は得られていたと思う。
- 3) 理工系出身、理工系大学院
大学、大学院を通してさらに知識を掘り下げたかったから。
- 4) 1 特になし
2 進学してよかったと思う。明確な目的や意欲のある後輩には勤めると思う。
3 相談できる女性はいるが、相談したいことはない。
4 一般的には偏見があるのかもしれないが、私が所属していた研究室では女性という理由で苦痛を感じたことはなかった。
- 5) 1 男女間に違いは見られない。
2 【男女共通】研究室と企業とのつながりの有無で、就職状況が研究室間で差があること。
【女性】特になし
- 6) 1 結婚、出産を考えると、大学院まで進学することが難しくなるので、女性大学院生が少ないのだと思うが、個人の意志の問題だと思うので、特に増やす必要はないと思う。
2 育児支援の奨学金というのは実用的であると思う。
- 7) 特になし。

回答者番号：49

- 1) 1 女性
2 文系、博士前期課程1年

- 2) 1 現在の指導教官のゼミに入りたいと思ったため。
- 2 経済的支援は特にありませんでしたが、自分のやりたいことを選んだことに関しての理解はしてくれました。
- 3 卒業後の就職状況に関する情報。研究者育成という研究科の方針
- 3) 出身学部 文系 / 現在の大学院 文系
- 学部は国際関係学部で、経営学研究科への進学であったが、社会科学の研究に関心があったため。問題意識は一貫している。
- 4) 1 【大学院一般】
- 【女性の問題】厳しすぎると結婚して辞めてしまうので(?) 指導教官の女子ゼミ生に対する指導があまくなりがちである。結婚して出産した後、研究を続けることは不可能ではないが困難
- 2 進学してよかったと私自身は思うが、後輩の女子学生の目的によっては勧めない。
- いずれ企業に就職するつもりならば早いほうが良いため、学部でするのが良い。また結婚や出産を優先したいならば、進学しないほうが良い。研究を続けながら家庭を支えることは楽ではないため。また主婦になるつもりならば高学歴が有利になるとはいえないため。
- 3 います。どのように結婚し、家庭と研究を両立しているのか。これまでに女性の研究者として、困難だと思ったことは何か、それにどう対処したらよいのか、を相談したい。
- 4 女性の能力への偏見はないと思いますが、男性中心の世界で女性よりも男性と一緒にのほうが仕事がしやすいという男性研究者の理由は理解できます。大学院で研究をする上で、現在私自身が女性だからやりにくいというとは感じていません。既に結婚をしていて、家事の負担が大きい女性にとっては、問題があるかもしれません。
- 5) 1 わかりません。個人的能力よりも男女差が優先されることは無いと思います。
- 2 【男女共通】研究者の需要の少なさ。勤務地が不確定なので、結婚相手の職業によっては別居の可能性がありうる
- 【女性】女性という点で男性と一緒に仕事をしづらいのではないかと、というハンデ
- 6) 1 女性研究者を「増やさなくてはならない」とは思いません。数値目標は無意味だと思います。ただ、能力のある研究者を増やさなくてはならないと思います。
- 2 男女の比率は、専攻内容によって異なると思います。女性のみを対象とした奨学金、賞、数値目標は、逆に女性を不利にする可能性があるので止めて欲しい。
- 7)

回答者番号：50

- 1) 1 女
- 2 理工系、修士課程2年
- 2) 1 企業の研究職に就くために修士の学位が必要ということで大学院に進学した
- 2 家族は進学することに賛成してくれていた
- 3 特になし
- 3) 出身学部も大学院も理系、この研究科で研究したかったから

- 4) 1 【大学院一般】特になし
 【女性の問題】特になし
- 2 進学して良かったと思っている。後輩も、就きたい職業に修士の学位が必要ならばもちろん進学した方がいいと勧める。
- 3 研究室の先輩に相談できるし、今は特に相談したいと思っていることもない
- 4 私も周りを見ると女性だからといって大学院へも進学率が悪いとは感じないし、もともと理系には女性が少ないから女性の研究者が少ないのではないかと思う
- 5) 1 私の知っている範囲では特に違いはないと思う
- 2 【男女共通】特になし
 【女性】やはり多少は男性の方が早く内定をもらっているとは思う
- 6) 1 理系には元々女性が少ないから仕方ないと思う。でもこの学部は理系の中でも女性が多い方で特に私の学年は30%近い数字にはなっていると思う
- 2 育児についての制度は充実させるべきだと思う
- 7) 特になし

回答者番号：51

- 1) 1 男
- 2 理工系 博士課程前期1年
- 2) 1 興味のある専門分野の勉強がしたかったからです。
- 2 両親からの仕送りの金額は減りましたが、授業料を払ってもらい、非常に理解してもらっています。
- 3 就職など将来の進路について具体的な情報があつたら良かったと思います。
- 3) 出身学部 理工系 / 現在の大学院 理工系
 興味のある分野を深めようと思ったからです。
- 4) 1 特に問題はありませんでした。
- 2 大学院に進学して良かったと思っています。後輩の女子学生が大学院進学を希望していたら、研究を続けていくやる気と体力があるかを聞いてから勧めます。
- 3 います。以前は就職について相談したいことがありましたが、今はありません。
- 4 女性には、大学が求める長時間の研究・実験をする体力がない人が多いように感じます。大学の要求が過剰だとは思いますが、そのことが女性が研究職に進みにくい要因になっていると思います。
- 5) 1 私の学部についてしか分かりませんが、多少差があると思います。
- 2 【男女共通】仕方ないと思いますが、所属している研究室、研究している分野によって就職にバラつきがあると思います。
 【女性】研究職での就職が難しいようです。
- 6) 1 先に述べたように、大学院の研究体制が女性に厳しいことも一つの要因だと思います。女性研究者を増やすことについてですが、増やさないといけないとは考えていません。研究を希望している女性が働きにくさを感じない程度の人数が必要だと思います。そういった意味で30%という数値は適度だと思います。
- 2 女性を対象としたものを設けることは大事だと思います。さらに、大学院進学について迷っている女性

がその情報に触れることのできるためのメディアが必要だと思います。

7) 特にありません。

回答者番号：52

- 1) 1 男
 - 2 理工系 修士課程1年
- 2) 1 学部時代に引き続きさらに同じ研究がしたいと考えたから。
 - 2 あり
 - 3 特になし
- 3) 理系 研究をさらに続けたかったから
- 4) 1 【大学院一般】、【女性の問題】 とともに特に思いつきません
 - 2 よかった。少なくとも将来企業で研究職に従事したいと考えるなら大学院進学は必要。
 - 3 いない。 特になし
 - 4 女性の教員は確かに少ないと思うが、職場環境がどうかはわからない。
- 5) 1 特に違いは感じない。
 - 2 【男女共通】【女性】 就職に関しては性別による違いは感じない。
- 6) 1 増やさなくてはならない、とは思わない。少なくとも私の学部は大学院進学について男女差は感じない
 - 2 女性を対象としたものをつくるなら男性を対象としたものもあるということが必要だと感じる。男女を対象にした育児支援奨学金はもうけたらいいと思う。
- 7) 特になし

回答者番号：53

- 1) 1 女性
 - 2 理工系、博士課程後期3年
- 2) 1 将来研究職につきたかったので、専門技術及び知識を身に付けるため。
 - 2 修士課程に進学することには全く異論はなかった。ここでは男女関係なくほとんどが修士課程に進学し、学部で就職する人のほうが珍しいため。

博士課程に進学する時は母親から反対された。博士課程での研究には向いていないという意見と、卒業時に28歳という年齢になるので婚期が遅れることが理由だった。自分がもう少し大学で今の研究を続けたいという気持ちと、将来研究者として働くには博士号を持っていたほうが良いということを説明して、進学を認めてもらい学費を払ってもらった。生活費は、育英会の奨学金とCOEの給与を使った。
 - 3 特になし
- 3) 出身学部 理工系 現在の大学院 理工系
 - 4 年生の時の研究テーマが面白く、修士課程でも続けようと思ったので、同じ研究室でそのまま進学した。
- 4) 1 【大学院一般】
 - 2 修士課程は充実していたので進学して良かったと思うが、博士後期課程に行っても良かったかどうかは微

妙なところ。国際学会での発表や論文作成など、いろいろな経験ができたが、ドクターに値する研究は出来なかったと思う。それは、自分の努力、能力、精神力が足りなかったためである。若い時期に会社でばりばり働くという選択もあったと思う。今考えると、博士後期課程に進むにしても、環境を変えて別の研究室に行った方が良かったのではないかと思う。4年生から配属して6年間同じ研究室にいと、モチベーションの維持と向上が難しい。他の研究室の研究、技術を学んで研究を積んだほうが良かったのではないかと思う。後輩の女子学生に勧めるかどうかですが、進学するかどうかは、男女関係なく、その人の能力、モチベーションの高さによるので一概には言えない。

3) いない

4) 指導教官は、セクハラ的なことを言うこともあったが、差別というよりは「スカート姿はいいね」等の素直な感想で、それほど腹がたたなかった。研究においては、暖かく見守ってもらい時には厳しく指導してもらったので感謝している。他のスタッフや学生にも、差別された記憶はほとんどない。特別扱いなどは全くなく、男子学生と同じ実験量を、荷物運びを要求されたことは当然であり、良かったと思う。しかし研究室に長時間いることが良いという雰囲気なので、体力が乏しい私にはつらかった。学校に長くいるといっても、学生同士でおしゃべりしたり、インターネットをしたり、夕食を食べにいたりする時間も込みなのに、早く帰る人間は批判の対象になる。夜九時に帰ろうとすると、助手に「早く帰るね。東大のさんは女性で4年生だったけど、朝10時から夜中二時までいたよ。」と言われ帰りづらいこともあった。無理をして無茶な夜型生活になったり心身を壊したこともあった。男女関係なく、体力に自信のない人間は、集中して要領よく仕事をかたづけることと、批判を気にせず自分の体力に合ったペースを貫くふてぶてしさが必要だと切に思った。

5) 1) 製薬企業研究職。

2) 特になし

6) 1) ここでは、女子大学院生の数は少なくないと思います。生物系の研究室では男女半々くらいです。有機化学の研究室には確かに女性が少なく、0 - 2人です。これは男性がほとんどなので来にくいのでしょうし、ハードワークなので敬遠されるのだと思います。

2) 研究費、奨学金、賞で女性を特別扱いしたり、無理矢理に女性を採用することは、逆に差別を助長すると思います。「女性特別枠で採用されたんだろう、昇進したんだろう」と思われて、本当に成果を上げている人も対等に評価されなくなる。絶対に止めてほしい。女性を特別扱いするのは、もう時代遅れだと思います。本当に優秀な人は自分の力でどんどんやっているでしょう。「女性はまじめだ」とか「女性は優秀だ」とか変に持ち上げられるとプレッシャーを感じますし、また自分がそうでなかった場合、女性の人数が少ないだけに「やっぱり女性はダメだ」という結論に直結してしまうのがつらいです。もう普通に対応してほしいというのが正直な願いです。

数年前のある学会で、有名な女性教授の講演があったのですが、座長が「この世界(有機化学)に女性が入ってきて久しいですが、先生には女性化学者のリーダー的存在としてこれからも頑張ってもらいたい」というコメントをしていました。なんと時代遅れなことを言うのだと呆れました。おじさん世代と私たちの意識の違いに愕然としたことがありました。

7)

回答者番号：54

- 1) 1 男
2 理工系、博士課程3年
- 2) 1 生物がなぜ現在あるような生活史を持つようになったかに興味があり、それを解明できる研究者という職業に魅力を感じたから。進学時には進学に関する躊躇はなかった。
2 家族は私の選択に極めて深い理解を示してくれており、十分な経済的支援を受けている。
3 学位取得後、定職に就くのがどれほど大変かということを知っておきたかった。
- 3) 出身学部 理工系
現在のような研究を志して学部に入学したので、その延長として同じ系の大学院に進学した。
- 4) 1 【大学院一般】研究環境が非常に劣悪である。大学院定員が大幅に拡大したにもかかわらず、研究設備・空間の充実が全く図られていない。
【女性の問題】とりたてて男性・女性を分けて議論する必要は感じない。
2 自分の選択に後悔はないが、それと後輩に進学を勧めるかどうかは別である。進学したければすばよい。男性であるか女性であるかにかかわらず。
3
4 例に挙げられているような外的要因で女性研究者が少ないとは思わない。
- 5) 1 博士号取得後の就職状況は極めて厳しいようである。男女の差は感じない。
2 【男女共通】
【女性】女性特有の問題はない。
- 6) 1 女性大学院生が少ないのは性差によるところが大きいと思う。この問題以外にも男女の嗜好・得意分野などに違いがあるのは明らかである。数値目標を挙げて無理矢理増加を図るのはバカげている。能力・実績に関係なく数値目標達成のために女性研究者を増やした場合、その影響で職につけなかった男性研究者をどうするのか。これは男性に対する逆差別である。女性研究者が「増える」ことは結構だが、「増やす」ことには断固反対である。
2 先にも述べたように、女性を殊更優遇して増やす必要は全くない。
- 7) あたかも男性の側の抑圧によって女性研究者が少ないと決めつけているようなアンケートは非常に不愉快である。

回答者番号：55

- 1) 1 男
2 文系、博士前期課程2年
- 2) 1 研究職に就きたいから。
2 家族は何のためらいもなく進学を認めてくれた。
3 博士号を取得できず、あるいは大学等の研究機関に就職できずに大学院内に居残っている人(オーバー・ドクター)の数。
- 3) 出身学部：文系 / 現在の大学院：文系
学部選びの段階(高校時代)で今の進路を目標としていたので、そのまま文系であってよいと思ったから。

- 4) 1 【大学院一般】自分のゼミの指導教員には大いに満足しているが、あるゼミでは特定個人に対する嫌がらせなどをする教員もいるということをよく耳にする。大学の支援体制の充実度について、(自分に限らず、院生仲間も含めた一般的意見として) 授業料等の免除枠をもう少し増やして欲しい。
- 【女性の問題】特になし。
- 2 就職に対する不安は大きいですが、良かったと思う。女子学生に限らず、大学院には進学したほうが良いと思う。その理由は、学部の学習レベルがあまりに低すぎるから。
- 3 いない。
- 4 特になし。
- 5) 1 最近では女性の方が就職しやすい、ということをよく聞くので正直残念です。
- 2 【男女共通】就職が少なすぎる。
- 【女性】
- 6) 1 女性研究者を増やす等の意見には反対。能力があれば、男女問わず研究者になってよいと思う。女性研究者を増やす目標値などは不用だと思う。
- 2 育児支援金を設けることについては大いに賛成。
- 7)

回答者番号：56

- 1) 1 男
- 2 理工系 博士課程1年
- 2) 1 理由：研究を続けていきたくかったから
ためらったこと：将来の就職について
- 2 家族の理解はありました。
- 3 大学で行っているオープンキャンパスみたいなもの
- 3) 出身学部 文系 / 現在の大学院 文系
指導していただきたい教授が違う分野であったから
- 4) 1 【大学院一般】奨学金など金銭面での負担。学部生と修士学生、博士の学生とで意識の差にズレがあること
- 【女性の問題】特に見当たらないですが、夜遅くまで研究がしにくい
- 2 進学は良かったと思います。本人がやりたい、行きたいのであれば大学院を進めますが、就職できないための進学は勧められません。
- 3 いません。
- 4 就職に就いたことがないので職場の雰囲気自体が分かりませんが、すみません。
- 5) 1 すみません、わかりません
- 2 【男女共通】
- 【女性】
- 6) 1 意識や職場環境よりも大学院を出た後の受け入れ口が少なすぎる(将来への不安)が大きな問題であると思われます。また、現在の大学自体の女性教員が少ないために女性が関心を抱きにくいことも原因

と思われます。30%という数字ですが、女子大ばかりだと全く意味がない共学の大学でこの数字くらいだと妥当かと思われますが、無理矢理目標値を設定して女性研究者を増やすことは全く意味のないことと思います。

- 2) 本当に研究をしたい女性の方がどれくらいいるのかわからないので・・・上記のようなことで、「育児支援」以外の事柄でわざわざ女性だけの枠組みを設けることに意味があるのかわからないです。かえって格差が広がるような気がします。また、現在の女性研究者のあり方を改善する方が先だと思われます。ただ、制度を変えても女性大学院生は一時的に増えても長い目で見れば増えないと思います。現在、絶対的に日本の保育所は足りないの、大学（内）に保育所を併設したらどうでしょうか？雇用対策と育児支援が両立できると思います。
- 7) 近年、特に女性の価値観が多様化（昨年話題となった「勝ち組・負け組」のように）してきて一昔前の「結婚＝幸せ」という図式が「結婚か仕事か」のどちらかを取りそこから「幸せ」が導き出され価値観の2極化が進んでいると思います。女性大学院生を増やすには、金銭面や卒業後の就職なども大切ですが、大学において憧れとなる研究者や興味を持てる研究を見つけることができるかということ、つまり大学や大学教員における研究・教育のあり方が重要な気がします。そのためには、現在の研究者の見直しが必要となってくると思います。よい研究者・教育者（公平な人・・・）が多くなると、現在の世の中の流れ（やりたいことをやる、という意味で）から自然と女性は増えると思います。するとさらに少子化・晩婚化が進むと思われるのですが・・・。話はかなりそれでしたが、将来的に明るいと思えるようになったら女性大学院生は増えると思います。

回答者番号：57

- 1) 1 男
2 理工系、博士課程2年
- 2) 1 子供の頃から昆虫に興味があり、専門的な研究をしたいと思っていたから。
2 十分な理解と経済的支援があった。
3 おおまかな採点基準や出題傾向など、入試に関する詳細な情報
- 3) どちらも理工系
学部4回生の時に所属した研究室で、研究を継続したいと思ったので。
- 4) 1【大学院一般】研究スペース（机や機器を置く部屋など）の拡充
【女性の問題】女性に対する普通の言動や気遣いなど
2 自分は進学して良かったと思っている。本人に進学の意志があるか、もしくは迷っている場合には勧めるが、就職を希望している人には勧めない。
3 身近にはいない。いたとしたら、自分の進路や研究の相談など
4 少なくとも自分が所属する研究室では、見られない。
- 5) 1 男女ともに研究職への就職は厳しいため、違いはあまり感じない。
2【男女共通】大学院生の数が増加しているため、研究職への就職をめぐる競争が激しくなっている点と、一般職へ就職する場合に、大学院卒業が不利になる場合もある点。
【女性】（職種にもよるが）一般職への就職は女性の方が男性よりも厳しいように思われ、前述の大学院卒

業が不利になるのも女性の方が多いように思われる。

- 6) 1 研究室によって女性の多いところと少ないところがあるので、一概に理由を言うことはできない。社会的背景、学問分野の特性など複合的な要因によるところが大きいのではないか。女性研究者を増やす必要性は認めるが、30%という数字にこだわることはないと思う。自分の専門分野では女性大学院生は増えており、学問分野が発展し、研究環境が十分に整えられれば、活躍する女性研究者も増えるのではないかと考えている。
 - 2 奨学金や賞などを設けることは、積極的にやってもよいと思う。育児支援に関しても賛成だが、目標値の設定はあまり効果がないように思われる(むしろ男女を問わず若手の研究者の枠を定める方がよいように思う)。
- 7) 特になし。

回答者番号：58

- 1) 1 男
- 2 文系、修士課程2年
- 2) 1 進学した理由：自分個人の努力によって何かを残せると思ったから。
進学をためらった理由：就職先が見つかるのかどうか。
- 2 家族は好きなことをすればとのことで理解は得ることができた。経済的支援については、自宅通学なので、奨学金でやりくりし、できる限り受けないようにしている。
- 3 図書館の蔵書(とくに洋書雑誌)が多いかどうか。研究に利用しそうなデータベースを所有しているかどうか。
- 3) 出身学部：文系、現在の大学院：文系
現在の研究分野について、大学時代に関係のある資格試験の勉強をしており、興味があったため。理系の大学院も考えたが、数学・化学などから離れて久しく、院レベルにもっていくのに時間が非常にかかると思ったため。
- 4) 1 【大学院一般】大学みたいに、進学を目指している人のために、オープンキャンパスのようなことをしたり、大学院生と会って話せる時間をつくる。
【女性の問題】大学にどのような支援体制があるのか不明確である。結婚や出産が、女性の就職に不利なイメージがある。
- 2 進学してよかったとは思っている。彼女に強い意志があれば勤めるが、女性は男性よりも就職が大変かもしれないことを話す。
- 3 そのような女性はいるが、女性だからという相談はない。
- 4 夫が転職になった場合に単身赴任できるか、出産した場合の休暇などの理由から、女性は男性に比べて、就職が大変だという噂がある。
- 5) 1 女性は男性に比べて、就職が大変だという噂がある。
- 2 【男女共通】少子化のため、就職先が減るのではないか。最近、公募が増えているが、公平な審査が行われているのか。
【女性】夫が転職になった場合に単身赴任できるか、出産した場合の休暇などの理由から、女性は男性に

比べて、就職が大変だという噂がある。

- 6) 1 女子大学院生が少ないのは、大学院や大学が男性社会のイメージが強いことや、結婚・出産などに対する支援が十分でないためだと思う。無理に増やしたり、目標値を設定したりせず、イメージの払拭や支援の充実などにより、女性が研究者になりやすい環境をつくった結果、女性研究者が増えれば、それが適正な割合ではないのでしょうか。
 - 2 女性研究者の人数に応じて助成金を国から支給する。育児支援の奨学金を設けることはよいことだと思う。
- 7)

回答者番号：59

- 1) 1 女
 - 2 理工系、修士課程2年
- 2) 1 研究職に就きたかったから。金銭的な面で進学を一時ためらいました。
 - 2 私の意見を尊重し、応援してくれました。学費を出してくれました。
 - 3 特になし。
- 3) 出身学部 - 理工系 現在の大学院 - 理工系
専門知識を身につけ、それを活かして研究職に就きたかったから。
- 4) 1 【大学院一般】特になし
【女性の問題】特になし
 - 2 私は希望だった研究職につくことができたので大学院に進んでよかったと思っています。しかし、大学院生活は楽なものではなかったので、後輩にはそれを覚悟した上で進学してほしいと勧めると思います。
 - 3 います。研究や就職のことなどいろいろ相談にのってもらいました。
 - 4 特にないと思います。
- 5) 1 分野によっては多少異なるという話は聞きますが、私はそれほど強くは感じませんでした。
 - 2 【男女共通】不景気で求人が基本的に減っていることが問題だと思います。
【女性】特になし。
- 6) 1 基本的に、体力的、精神的に大学院生に向く女性は男性より少ないことが女性の大学院生が少ない理由ではないかと思います。特に女性研究者をふやさなくてはならないとは考えませんが、今後自由に進路を選べるようになり研究者を目指す女性が増えればよいと思います。
 - 2 子供がいて大学院生活を送ることは大変なことだと思うので、男女を対象にした育児支援の奨学金を設けることはよいことだと思います。しかし、教員・研究領域に一定数の女性を確保するための目標値を設定するのはむしろ女性を女性であることで優遇することにつながるのではないかと考えます。男女を公平に評価することが理想的であると思います。
- 7) 特になし

回答者番号：60

- 1) 1 女
 - 2 理工系 修士課程1年
- 2) 1 研究職につきたかったから。就職難なので、修士に進んで結局研究者になれなかったらどうするのかと
思い、進学をためらったことがある。
 - 2 家族はやりたいことをしてよと言ってくれ、応援してくれた。今は学費と(自宅外通学のため)家賃
を負担してもらい、その他の生活費は育英会の奨学金をあてている。
 - 3 外部受験であったため、学部の定期試験など公開してもらって、対策を練りたかった。院試は当然なが
ら内部がかなり有利。
- 3) 出身、現在とも理工系。進学理由と同様、研究職につきたかったから。
- 4) 1 【大学院一般】研究テーマは自分で捻出すべきなのだと思うが、先生達に出してもらう場合、計画性の
ないテーマが多い。そのためすぐにドロップアウトするものが多くみられた。また授業が行われるが、
年によって開講講座数にばらつきがありすぎて、修了単位が取れるのが修士2年ぎりぎりということがあ
る。修士は1年目より2年目の方が研究も分かってきて、自分で進めることができるので、やはり実験に
時間を費やしたいと思うし、1年のうちに多くの知識を吸収したほうがいいと思うので、開講講座を年
によって変えず出来るだけ1年のうちに修了単位数が取得できるようなコンスタントなものにしてほしい。
【女性の問題】女性の先生や先輩がごくわずかなので結婚出産育児のことはわからない。先生方が女子学
生に対し関わり方に気を使いすぎてらっしゃると思う。雑用は絶対にさせないし、研究のことで女子学
生をおこることもない(同じことを男子学生がやるとおこられるようなことでも)。逆にやりにくい。
また食事や睡眠などの最低限のこと以外の時間は研究をしている感じなので、未婚既婚かわらず女性
研究者は生まれにくいと思う。
 - 2 当初の希望通り研究職に就職が内定したので、進学してよかったと思う。でも他の人には進学を勧めな
い。(特にこの学部の人)もう手に職があるならそれを活用してはやく社会に出るべきと思う。大学の
研究室はやはり異質であると思う。また、就職が思うように行くわけではないので、年齢が上がったほう
が不利になってしまい結局学部卒の方が行きたい職につけることがあると思う。
 - 3 いる。就職後仕事において性差別をされることがあるか? 女性は何年ぐらい働くのか?(結婚出産後も
うけいれてくれるのか?)
 - 4 特になし。またその状況を考える以前に女性研究者がほとんどいない。
- 5) 1 私は決まったが、周りの女子学生はほとんど決まっていない。男子学生でもかなり苦労していた。また
ドクター出を欲しがめる企業が多いことから男子学生はドクターに進学する人も多い。
 - 2 【男女共通】 研究職はほとんど修士出をとらなくなっているようなので、なかなか内定がもらえない。
【女性】特になし。
- 6) 1 院生になったら忙し過ぎて体力がついていかないことがあり、プライベートの時間をもつことすらま
まらないので、女子学生はきにくいと思う。また就職も、就職先が絶対あるならまだしも、この就職難で
は年齢のせいなどで就職活動が困難になる恐怖もある。女性研究者を無理に増やす必要はないと思う。本
当に研究をしたい人だけが頑張るやればいいだけの話。(男女問わず)
 - 2 このように女性研究者というくくりをつくったり特別視することがいっそう女性研究者を育てにくくし
ているのではないですか?ただし、出産は女性にしか出来ないもので、育児休暇、支援は今以上に必要だと

考えます。

7) 特になし。

回答者番号：61

1) 1 女

2 理工系，博士課程1年

2) 1 私は大学卒業後，数年間の家業手伝いを経て大学院に進学しました。その期間に経験した病気療養生活，周りの環境（友人達の生活）の変化などを通じて，何か1つのこと，特に未練のあった学問について深く追求していきたいと思うようになり大学院進学を果たしました。

2 家族の理解は全面的に得ることができました。ただし，父が定年退職しましたので，経済的には家族にできる限り甘えないようにしようと考えました。

3 私の場合，あまり現実的な情報がありすぎたら受験を断念していたかも知れません。

3) 出身学部 理工系 / 現在の大学院 理工系

より専門性を深めていきたいと考えたからです。

4) 1 【大学院一般】研究室の方針について不満はありません。金銭的には負担を感じています。奨学金についても返済を考えるとため息が出ます。

【女性の問題】今のところ結婚などの選択の予定がないので，現実問題として認識できていません。

2 大学院に進学して充実した毎日を過ごしていると本当に思います。しかし，後輩の人に勧めるものでもありません。何の保証もない中，自分自身が後悔しないように必死な状態だからです。

3 過去に留学生の先輩（既婚者）が相談に乗ってくれました。多忙な研究生活に不慣れだった頃，不安を感じて，どのように自分を見失わずに研究を進め，且つプライベートと両立させてきたのか聞きました。

4 今の研究室において，男性の偏見意識は全く感じません。

5) 1 博士課程まで進むとかなり男女間で採用枠に違いがあるのではないのでしょうか。あくまでも推測です。

2 【男女共通】専門性を高めることで逆に企業側に「視野が偏狭になる」という偏見をもたらしているという話をよく聞きます。労力や費やした時間に見合う仕事に就ける保証もないことも気がかりです。

【女性】特に女性は年齢も問題にされる気がするのですが。

6) 1 研究とプライベートの両立への不安，年齢差別や外からの偏見に対する就職の不安が理由になっていることもあると思います。女性研究者を特に増やさなければならないとは思いません。先に申しましたように，自分自身が後悔しないよう必死な状況下で希望的観測から意見を述べることはできません。

2 金銭的な問題は勿論ですが，大学院終了後の就職状況にもう少し明るい話題があればよいと思います。研究生活に対して身を捧げる覚悟を決めた人には上記のような提案は有効であると思われる。

7)

回答者番号：62

1) 1 女性

- 2 理工系、博士課程3年
- 2) 1 学部生の時にやりたかった分野の研究を選択できなかったから。
 2 あった。むしろ積極的に進学を勧められた。
 3 研究以外での活動や困った点などの情報。
- 3) 出身学部 理工系 / 現在の大学院 理工系
 昔から理科学に興味があったため大学進学・大学院進学にかかわらず理工系を選択してきました。
- 4) 1 【大学院一般】もともと自由に研究をさせてくれる風潮の研究室であったため、改善すべき点があると思えばそれは自分の研究態度であったと思います。
 【女性の問題】水産と言う分野であるため、実験所によっては女性用の宿泊施設がないと言う事から実験に行くことができなかったことがあった。
 2 私自身は、大学院に進学したことでとても多くの事を学べたため、進学してよかったと思っています。後輩に対しては、本人が研究を希望するなら男女にかかわらず進学を勧めます。
 3 大学院卒に限定するなら相談者はいませんが、もしあれば研究と恋愛のバランスのとり方について意見を聞いてみたいと思っています。特に院卒で就職する場合、遠隔地勤務になることも多いかと思うので、体験を聞いてみたいと思います。
 4 私が見た限りでは、職場環境での問題はないと思います。ただ、もともと女性の先輩のいない状況では、女性の新入生は研究をし辛い環境になるかもしれません。
- 5) 1 就職率に男女差は見られませんが、就職先は女性はほぼ全て公務員となっています。
 2 【男女共通】院卒であれば研究職を希望する人が多くなるため、狭き門になっていると思います。
 【女性】大学院を卒業してから就職するとなると年齢が上がるため、一般就職の道がほとんどなくなっているのではないかと思います。結果的に就職先が公務員以外にはほとんどなくなっているため、就職しにくいことが何より問題であると思います。
- 6) 1 何より院を出たあとの就職先がほとんどないことが最大の理由だと思います。女性研究者を無理に増やさなくてはならないとは思いませんが、男女比が半々程度であることが基本的には自然であると思います。
 2 育児支援等の規則ができることは望ましいと思います。また、女性を排除しないという意味では女性確保の目標値の設定があれば良いと思います。ただ、奨学金等で女性であることを特別に対象とする必要はないと思います。
- 7) 私自身はあまり女性であるが故の問題には直面したことがないので男女比を気にしたことはありませんでしたが、女性の比率は確かに低いとは思いますが、研究施設のインフラを整備するとともに就職に関してもう少し道が広がれば、女性が研究職に進むことも増えるのではないかと思います。

回答者番号：63

- 1) 1 男
 2 理工系、博士課程1年
- 2) 1 将来研究をするために必要な知識、技術を学ぶため
 博士後期課程に進学するときには経済的な問題はあった
 2 あり

3 研究補助費や研究室の雰囲気

- 3) 出身 理工系 現在 理工系 興味のある分野である
- 4) 1 【大学院一般】教授が就職希望の学生を無理に進学させたり、就職するひとへの扱いがひどくなったりしている
【女性の問題】いないのでわからない
2 はい。勧めない。体力、精神的な苦痛が多いと思う
3 いない
4 研究時間が長い、危険な試薬を取り扱うなど働きにくい環境であると思う
- 5) 1 あまりない
2 【男女共通】先にも述べたとおり教授が進路の決定権をもっているのはおかしい
【女性】いないのでわからない
- 6) 1 系全体では少なくはない。増やす必要はないと思う。むしろ、増やす目的がわからない。
2 育児支援は必要であると思うが、その他一般の女性のみを対象とした奨学金を設けるのはおかしい。男性も経済的に苦しい人はいるはずで、不満がでると思う。
- 7) 特になし

回答者番号：64

- 1) 1 女
2 理工系 博士課程2年
- 2) 1 さらに研究を深めたかったため。経済的理由で下宿が認められていなかったので就職を考えたこともあった。
2 家族はむしろ進学を勧めており、実家がかろうじて大学まで通学できる距離にあったこともあり下宿は認められなかったが、授業料は払うと申し出てくれていた。
3 特になし。
- 3) 出身学部 理工系 / 現在の大学院 理工系
4 回生で所属した研究室で行った課題研究をさらに進めたかったため。
- 4) 1 【大学院一般】私自身はD2から幸運にも学術振興会の特別研究員に採用されたため経済的に自立した生活をさせて頂いているが、私以外の学生は親の援助が期待できないという理由で進学をあきらめたり、また奨学金の貸与を受けている者でも進学すればするほど返済金が増加するため進学を躊躇している場合が多く見受けられる。奨学金の貸与額を増やすだけでなく、返済金の一部免除やまたは給与奨学金の制度を増やす必要があると思う。
【女性の問題】 特になし。
2 私自身は進学してよかったと思っているが、今後の進路のことを考えると、修士卒の学生に比べて博士卒の学生の就職口は圧倒的に少ないので、後輩の女子学生には、一生研究をしたいと思っているのでない限り進学は勧めないと思う。
3 相談に乗って下さる大学院博士課程卒の女子先輩がおり、仕事と育児の両立について相談している。
4 子供のいる大学院女子学生がまわりに何人かいる(いた)が、保育園で預かってもらえる時間が短い、風

邪をひいたら預かってもらえないなど、何かと研究に支障があり、独身の学生ほど研究は進まず、指導教官も仕方がないと思いつつも不満を隠せない様子であった。

- 5) 1 修士卒で一般企業に就職の場合は明らかに就職状況に差が見受けられ、内定者の大半が男性という企業も多くある。
- 2 【男女共通】博士卒の学生の就職先が少ない。一般企業は大部分が修士卒までの学生しか採用せず、博士卒の学生の大部分は公務員試験を受けるか任期付き研究員(ポスドク)になるが、ポスドクの場合はその後の就職先もさらに狭き門となっている。
- 【女性】一般企業への就職の場合は、圧倒的に男性有利という状況が見受けられる。試験採用の公務員に関しては女性の問題はあまりないと思われる。博士卒の女子学生が研究員として公的機関に就職する場合(試験のない場合)に関してはあまり知らないが不安は感じている。
- 6) 1 女子大学院生の数が少ないのは、女性の勉学に対するモチベーションの低さと大学院に進学したら結婚が遅れるという結婚と仕事に対する人生観が男性と異なるためであると思う。私自身は、女性研究者が男性と同様に研究をし仕事につく機会を作らねばならないとは思いますが、無理に女性研究者を増やす努力をする必要はないと思う。
- 2 女性のみを対象にした奨学金や一定数の女性を確保するための目標値を設定することなどは逆差別となり適しているとは思えない。しかし現在の社会状況のもとで男性よりも圧倒的に負担の多い既婚の女性が差別を受けずに研究を進めるためにはこのような制度は有難いものであると思う。男女を対象にした育児支援は是非進めるべきだと思うが、奨学金など経済的な面だけでなく、子供の教育に費やす時間の確保という面で既婚男女の勤務時間や日数の推奨値を設定する(フレックスタイム制の導入なども)といったことも、既婚男女(特に女性)に対する社会的な認識が低い間は必要なことだと思う。
- 7)

回答者番号：65

- 1) 1 女性
2 文系 博士課程2年
- 2) 1 美術史の研究者になることを希望したため
2 大学院に合格した時点で理解を得られるに至った。
3 社会人から受験したので、前年や、さらにその前の講義内容等については知りえず・・・これらを調べておくことが良いのは今ならわかるが、当時は認識できていなかった。
- 3) 出身学部 文系 現在も文系 (同分野)
同分野を深めたい、研究職希望というのが理由であったため。
- 4) 1 【大学院一般】
指導教員の対応：社会人入学で修士に入った当初、まだ最初だったこともあり教員も対応に苦慮された様子。社会から来た人は社会に戻ってもらわないと、というのを言われたり・・・色々。
研究テーマの決定：教官と全く同じでも難しく、かけ離れていても難しいところが難しい。
奨学金の状況：「年齢差別があります」！ 回答者は既に40歳を越えており学振の研究員には枠外。それ以外でも奨学金の年齢制限が多い。

結婚の問題：研究職は、卒業して社会に出た人に比べて経済的自立が遅くなり、晩婚化の現実があると思う。

大学の支援体制の有無と充実度：これについては詳細を知らない。

【女性の場合】出産の問題＝育児休暇後の復帰：周囲も本人がどこまでヤル気があるのか？という探り？が存在するように感じる。

2 進学して良かったと思っている。後輩については勧めも反対？もしない。

3 周囲に先輩は居る。しかしながら、相談にのってもらえる間柄というのとは少し違うように思う。

4 上記の女性の先輩の先生、数人に生涯研究者を続けたいと思ったら独身で居ることを勧められた。他の先生には結婚はしても子供は無理という先輩もいた。実際、まとまった時間がとれなくなることで研究に障害が生じることは事実かと思われる。・・・理不尽ではあるが事実か。その意味で、他の職業以上に困難さがあるように思われる。

5) 1 同じ研究職でも男女で就職先に差があるように思う。

2 【男女共通】求人の数が少ない。

【女性】教員職の場合は男性の方が有利？

6) 1 やはり婚期の問題がある？増えた方が良く、というよりそれが本来の姿では？その意味では人口比が理想？30%は現状では妥当な理想的数字かと思う。

2 先輩の就職先が開かれている「現実」を後輩が目にする。他には、質問に書かれているもの全て必要。

7) 昨今、女子学生と話していて、子供は欲しいが（手がかかる？）旦那はイラナイというスタンスの人が多いのに気づいた。私自身、以前（両親を亡くすまで）は同じように考えていた。さらに具体的には、アメリカのようにAIDで子供をもつことに興味のある女性徒が増えているのも事実の様子。普通にパートナーとの間に子供をもつのであっても、人生の何時にもつか、人生の時計に縛られているのが現代の女性の問題なわけだが、研究者の場合、留学があることで、さらに縛りが強い印象。離婚率の高さも、おそらく以上のことと無関係ではなく、また更には相手の家との付き合いにおいて「ヨメ」をすることの難しさもあるように思う。（よく「誰も勉強（研究）を続けて欲しいとは頼んでない、それより、子供・・・」に象徴される文化的背景。相手の家が東京ならばまだしも、西にいけばゆくほど。。。とも聞く。）人生の時計から女性を解き放つには、、（少し飛躍の印象かと思いますが、）ひとつに女性の卵子の保存が自由になると良いのに、ということも考える。（現状では伴侶との受精卵の形では可能。しかしながら、これでは結婚の時間割？からは自由にはなれない。特に研究職の場合、留学があることから、例えば・・・留学前に受精卵を保存し、その後、離婚をしてしまった場合、受精卵だけが残ることになってしまう。・・・事実、周囲を見ていると留学を契機に上手くゆかなくなるカップルは多いように見受けられる。）先輩たちを見ていて、結婚はされていても、自己実現の道を選択したために、子供をもつことは「断念」された人も多くいる印象。・・・日本の少子化の問題は、生みたくてもそれを許さない状況があることには目が向けられていないように感じる。（・・・結果、日本の少子化は、かろうじて「欲しくもなかったのにできちゃった婚」の若年層に支えられ？・・・幼児虐待の増加？）研究職（女性）は、経済的にも人としても親になれる状況に到達した時、生物としては親になることが困難な時期に入ってしまう可能性が高く、万一、それを押して子供をもったとしても余程の超人でなければ研究者としてハンデを負うことにしかならない現状を、いつまでも放置することにより、高学歴で自己実現を目指す女性が、その代償として遺伝子を残す状況を奪われ、そういう状況に押しやられ

ていることは・・・亡国に繋がる重大な問題と考えている。

回答者番号：66

- 1) 1 男
 - 2 理工系 (学年不明)
- 2) 1 より高度な専門技術をつけるため。
ためらった理由は経済的な理由が若干。
 - 2 理解はあった。経済的な支援は授業料を出してもらっている。
 - 3 就職状況。奨学金や研究室の経済状況。
- 3) 理工系。同じ。より専門的な技術をつけるため。
- 4) 1 【大学院一般】指導教官の対応。奨学金の状況。大学への国からの支援
【女性の問題】結婚、出産への支援。
 - 2 自分自身は進学してもよかったとおもっている。
女性にも進める。男女差は勉強においては関係ない。
 - 3 若干いる。相談したいことはない。
 - 4 あまりみうけられない。
- 5) 1 あまりない
 - 2 【男女共通】研究室や大学によるコネなどによる決まり易さなどはある。
【女性】容姿が綺麗な人は決まりやすい。かも？
- 6) 1 理系自体女性が少ない。無理に増やす必要は無いと思われる。
 - 2 抜本的な教育の改革。社会の雰囲気。男女両方への育児支援の奨学金は必要
- 7) もっと基礎(義務教育時)からの教育のあり方の見直しが必要だとも思います。

回答者番号：67

- 1) 1 女
 - 2 文系 修士課程2年
- 2) 1 もっと勉強がしたかった
 - 2 経済的支援はありました。理解はあまりしてくれなかったように思います。
 - 3 終了後の進路など。
- 3) 文系、文系
- 4) 1 【大学院一般】
【女性の問題】
 - 2 良かったと思う。進学を勧めるか否かについては、特に、とりたてて勧めるということはないと思いません。
 - 3
 - 4

5) 1

2【男女共】

【女性】説明会等、平等に機会が提供されたとしても、結局のところ男性しか採用しないという現実はあるように思います。

6) 1

2 特に女性に対して研究費等設けた場合、逆に女性差別との批判がおりそうな気がします。

7)

回答者番号：68

1) 1 女

2 文系 修士課程1年

2) 1 「もう少し勉強がしたいと」思ったために大学院を希望したが、周囲の反対や、就職に不利になるという意見によりためらった

2 なかった。

3 語学力を伸ばすために、多くの院生が語学校に通っている。もう少し語学の授業（英語以外も）が増えるといいと思う。

3) 文系、文系

大学時代の勉強を続けたかったから。また、就職する上でも修士号を持っていたほうが有利になると感じたから。

4) 1【大学院一般】奨学金は必要としない人でももらっているが、成績のためかもしれないが、必要な人に行き渡っていないこともある。

【女性の問題】改善できるわけではないと思うが、大学院になると女性の数が更に減り、完全な男社会となっている。特に、男性基準の格好を求められることも多く、不愉快になることも多々ある。（セクハラではないかもしれないので、いえないようなパターン）

2 自分はよかったと思うが、後輩は自分の意見で考えるよう、就職の状況などを教えて、よく考えるように促す。

3 大学院卒業の女性はいるが、相談できる女性はいない。男性集団の中では、女性のみで集まることがあまりないため、もし相談できるのなら、院生男性に関する恋愛相談（セクハラではないが、困っている場合）にのってもらいたい。

4 大学時と比べて女性の大学院進学率が大きく変わっているとは思わない。しかし、大学教授（男性）の意識にも、男性大学院生の意識にも、女性と研究者は別の問題だと考えている節はある。女性のすばらしい研究者がいることは認めているが、学会などの、自分の土俵とは別枠だと思っているのではないだろうか。「まあ、女性なので・・・」という軽い一言でも、女性として聞く側は不自然に感じる。

5) 1 大きくあると思う。男性は皆一流企業に就職したが、女性の多くは内定をもらえないか、少し小さめの会社に就職した。女性と男性の位置は大学では同じで、社会に出ると変わると感じた。

2【男女共通】就職活動と修士論文の両立は難しい。

【女性】就職活動が女性であるだけで難しいので、更に大変。

- 6) 1 個人の問題が大きいと思うが、女性が院に行くなんて、という考えも多い。
2 女性専用の奨学金。まだ経験していないのでわからないが、大学院在学中、もしくは職につく前の博士課程で子供ができると大変だと思う。男性の先輩には子供がいる人もいるが、女性の先輩にはいない。
- 7)

回答者番号：69

- 1) 1 女
2 文系 修士課程2年
- 2) 1 勉強が続けなかったから。就職をしたいと思わなかったから。
2 あった。
3 研究者になるまでの道程について、先輩の進路など。
- 3) 文系、文系
同じ興味が続いていたので。
- 4) 1 【大学院一般】論文指導の不足(もちろん学生が自分自身で方針をもち、それを研究と呼ぶに値する方向へ向けていくことは必要だが、私は修士論文を書き終わってから自らの方向性が研究と呼べないことに気付いた。)
【女性の問題】情報の少なさ、手に入れにくさがあると思う。結婚、出産等についても相談はしにくかるう。
2 全般的には良かったと思っている。だがますます現実離れをしまい、自分に土台が欠けている気もする。後輩の方たちには、もちろん進学を十分に勧められるが、進学をしても迷うことはたくさんあるとも言うておくと思う。
3 将来の人生設計について相談に乗ってもらえる女の人がいるが、互いに答えをもっているわけではないので、あまり相談は進展しない。
4 女性が研究者になって働き続ける、続けないは、結局はその女性の意志の強さや性格で決まり、他の要因は補足的なものに過ぎないように思われる。私がこうした状況を感じる機会をまだ持っていないためかもしれないが、しかし、地方への赴任、留学などが必要なので、仕事と家庭の両立は困難であろうと思う。
- 5) 1 文系の女性で就職したいと考える人は、ほとんど学部卒業で就職しているな、という印象がある。男性の場合にはそうでもなく、修士課程卒業後にしっかり就職する人もいる。
2 【男女共通】特に思いつかない
【女性】特に思いつかない
- 6) 1 私の所属する研究科には十分多くの女性大学院生が在籍していると思うので、むしろ理系と文系のアンバランスさが問題なのではないか。それに私は無理に女性研究者を増やす必要はないと思います。
2 やる気をおこさせるということで、歓迎すべきことだと考えます。
- 7) 私は出会ったことがありませんが、女性であるからと不当に扱う人物はいると思います。そうした人たち一人一人の意識を転換させ、女性であれ男性であれ厳しくも適切な指導を与えていけば、女性研究者もある程度は自ずと増えるのではないのでしょうか。

回答者番号：70

- 1) 1 女
 - 2 文系 修士課程2年
- 2) 1 興味を持っている事柄があり、研究したかったため。但し、大学院生は収入が無いこと、院卒業後の就職状況が不透明なため、進学をためらったことはある。
 - 2 進学について応援してくれ、修士課程は学費を親が負担してくれている。
 - 3 修士終了後の就職状況(就職先、就職率など)。また、奨学金、学振などの、院生の経済状況に関する情報。
- 3) 文系、文系
学部時代に行っていた研究を継続したかったため。
- 4) 1 【大学院一般】奨学金制度がもっと充実してほしい。
【女性の問題】結婚、出産等の問題、育児休暇の復帰。
 - 2 興味のある研究に専念できるため、進学してよかったと思っている。後輩の女子学生にも、本当に研究したいのならば、進学を勧めたいと思う。
 - 3 いる。大学院卒業後の就職や結婚について。
 - 4 出産、育児についてのサポートが少ない。休暇をとると必然的に研究が遅れてしまうので、その後復帰できるかが心配である。
- 5) 1 必ずしも全員が安定した就職をできるわけではない(PD、期限付き契約研究员になるなど)。男女差は分からない(そもそも女性がとても少ないので)
 - 2 【男女共通】就職先が少ない。
【女性】もともと女性が少ないので、就職に関するデータが少ない。
- 6) 1 もともと学部の時点で女性が少なく、それが大学院進学者中の女性の割合にも反映されていると思う。産休や育休などは改善すべきと思うが(そして、その結果として女性が増えるのは歓迎だが) 数値目標を決めて達成する、というようなものではないと思う。
 - 2 研究費、奨学金、賞や教員数などに関して、女性を特別扱いする必要は無いと思う(応募機会や選考基準が平等ならば)。男女を対象にした育児支援の奨学金については賛成である。また、産休、育休、その他の復帰支援策を充実させるべき。
- 7)

回答者番号：71

- 1) 1 女
 - 2 文系 博士課程1年
- 2) 1 言語研究を通じてドイツ語とかかわりたいと考えるため。進学をためらったことはありません。
 - 2 全面的に支援してくれています
 - 3 院生数、学外・学内からの進学者の割合、就職先などの情報
- 3) 出身：理工系 現在：文系
以前は数学を専攻していましたが、能力の欠如を痛感したため専攻を変えました

- 4) 1 【大学院一般】特にありません
 【女性の問題】特にありません
- 2 たいへんよかったですと思います 大学院進学の見聞は、女子学生であろうとなかろうと個人に帰せられることと思いますが、研究テーマを見つけ、先行研究を調べた上で自分なりの発見や解釈を論文として形にする一連の作業の楽しさ、苦しさを経験するのはよいことだと思います
- 3 留学・博論・就職など、これからやるべきことに対して相談できる院卒の女性は複数います
- 4 上記の状況は、大学院にもあると思いますが、私の身の回りには具体的には今のところ見だせません
- 5) 1 大学への就職は男女を問わず困難であるように思われます
- 2 【男女共通】人文系の研究者の大学への就職は難しいように、先輩を見ていて思います。非常勤講師を数年続けて、ようやく常勤職が決まるケースが多いようです
 【女性】女性に限って、特別に問題があるようには思われません
- 6) 1 人文系（少なくとも文学研究）に関して、女性大学院生の数が少ないとは思えません
- 2 周囲には、結婚し子供を持つ院生もいます。そのような学生に対する経済的なバックアップ（例えば奨学金など）は必要だと思います
- 7) 特にありません

回答者番号：72

- 1) 1 女
 2 文系 修士課程1年
- 2) 1 専門分野の知識をより深めるため 進学した理由
 2 家族は初め反対したが、最終的には理解を示してくれた 生活費は支援してもらっている
 3 ここ数年の倍率
- 3) 文系 文系
 2) 1に同じ
- 4) 1 【大学院一般】日本学生支援機構 一種奨学金の貸与額も何段階かにわけべき
 【女性の問題】特になし
 2 私自身はよかったですと思っている。先輩に勧めることはしない。理由) 他人の人生に助言できるほどの経験がないため
 3 いない
 4 特になし わからない 大学院に問題がなくても、就職先の環境に問題があるから、大学院に進学したくないと考える女性も少なからずいるでしょう
- 5) 1 男女で違いはない
 2 【男女共通】大学院を修了する学生数に対し、研究職の採用口が少ない
 【女性】特になし
- 6) 1 研究職に就きたいと考える女性が少ない。(好みの問題) 就職先の環境が整っていない。前者が原因なら無理に増やす必要はない。
 2 女性を優遇する制度には反対。(出産時を除く) 制度の存在自体が女性を劣位とみなしている証拠。男

女を対象にした育児支援は賛成。保育施設の拡充も。

- 7) もう少し簡単に回答できるアンケート形式の方が、回収率も上がり、より問題の実体へとせまれるのではないかと・・・。

回答者番号：73

- 1) 1 女
2 文系 博士課程2年
- 2) 1 研究に興味があったから。学費、生活費の問題でためらいがあった。
2 奨学金をもらっていたが、修士の時は仕送りももらっていた。理解はあった。
3 卒業生の就職先。どのくらいの人が途中でやめていくのかという情報。どのくらいの割合の人が奨学金や、学振の研究員になれるのかという情報。
- 3) 文系 文系
学部4年の時に始めた研究を今も続けているから、同じ系です
- 4) 1 【大学院一般】もっとたくさんの人が学振の研究員になればいいと思う
【女性の問題】まだ結婚していないのでよく分からない
2 自分は後悔していないが、後輩には勧めない。あまり高学歴だと女性は嫌われる傾向があるし、研究室内に女性が少ないと、男女関係のトラブルが頻発し、人間関係が難しくなりがちだから。
3 いない。結婚して子供を育てながら、どうやって研究を続けるのか聞きたい。
4 両方あると思う。同じ研究をしていて、仕事量は同じでも、家事は基本的には女性がするものだという考えの男性がほとんど。時間が割と自由に使える分、女性は研究時間を削りやすいが、業績の評価は男女平等にされるので、女性に不利
- 5) 1 修士で研究をやめる女性が多くてよく分からない
2 【男女共通】夫婦が同居することが非常に非常に難しい。就職先が少ない上、同種の研究をやっている場合、絶対に同じ大学には就職できないから。
【女性】期限付きの研究プロジェクトの場合、途中で出産することが許されるのかどうか不明。職場が人里離れた所にあり、近くに保育所がない場合が多い。
- 6) 1 女性が勉強なんかできても仕方ないという風潮がある。親が学費を出してくれない。男性でも就職が困難なのに、女性が子供を育てながら就職できるとは思えない。研究者同士結婚した場合、同居が難しいから。女性研究者が増えてくれるとうれしい。30%? よく分からない。
2 就職先の確保が第一だと思う。夫婦の職場が同じ地域になるように考慮してもらえるとうれしい。
- 7) 無

回答者番号：74

- 1) 1 女
2 文系 修士課程2年
- 2) 1 分野にそれほどのこだわりはなかったが、専門的な学問を、究めてみたいという気持ちがあり、家族の

大きなサポートもあったから。

- 2 理解し、応援してくれた（進学を望んだ）。学費などを払ってもらっている。
- 3 先生方、先輩方が書いた修士、博士論文の公開。自分の、今後の研究の参考になる。

3) 文系 文系

1 度始めた分野の勉強、研究を究めてみたかったから。ただ、文系的知識に加え、理工系分野の知識や考え方も身につけたいという気持ちは、今でもある。

- 4) 1 【大学院一般】研究にあたり、調査（フィールドワーク）を行いたいと思っても、大学院生に対しては、大学から経済的サポートが全くない。研究室に配分されるお金の一部を、学生の研究にあててほしい。そうでないと、時に調査を伴うような研究を志す学生がいなくなってしまうだろう。研究者になるための大事な時期にこそ、お金を必要とする研究に、必要と思えばある程度自由に取り組める環境を望む。
- 【女性の問題】個人的には結婚・出産を望んでいるが、特に出産をする場合、研究の中断や、育児による研究時間の減少が予想される。また、出産については年齢的な制限もある。よって、20代のうちに、ある程度研究の成果を出し、早く就職をしようと思うと、それだけプレッシャーもかかるし、研究内容にも制限が出てくる場合もある。ただ、これについては、女性として生まれた運命によるものなので、特に改善を望む点はない。

2 進学してよかった。女性・男性問わず、希望する気持ちがあるなら、ぜひ進学を勧める。

3 いない。特に相談したいことはないが、女性の研究者で、いきいきと研究をなさっている人を見ると、励まされるし、色々話を聞いてみたいとは思う（分野問わず）。

4 差別意識があるとは思わないが、男性の先生が「女性研究者」という言葉を使うのを聞くと、女性の研究者を、男性とは違うものと見ているのか、違うなら、どう違うとみているのか、と思うことがある。

- 5) 1 分野の性質上、男女問わず、就職状況は厳しい。ただ、女性だから特に、ということはないと思う。

2 【男女共通】専門分野が特殊であると、研究職の道は厳しい。よって、院生時代、精神的、肉体的に不調になる人も多い。「35歳以下」などの制限付きの公募があるが、研究を始める年齢は人それぞれであるのだから、年齢制限はすべきでない。外国からの留学生などは年齢が少し上のことも多く、年齢制限は、そういう人たちの就職も難しくしている。

【女性】出産、育児と研究や仕事が両立できるかどうか、不安がある。

- 6) 1 分野によっては、女性特有の視点が必要となる場合もあるのかもしれないが、一般的に言って、特に男女比にこだわる必要はない。むしろ、こだわるべきではない。「30%」という目標値をもうけるのもおかしい。

2 女性を特別視するのはおかしいと思う。男女差別を余計に助長する可能性があって、よくない。ただ、学生の立場からすると、男性の先生ばかりより、何かの時に相談できる女性の先生が身近に1人でもいてくださると安心というのはある（今はない）。

7) 無

回答者番号：75

- 1) 1 女
- 2 文系 博士課程3年

- 2) 1 就職活動をしなかったため 大学での勉強に満足していなかったから
 2 あった
 3 就職状況 奨学金状況
- 3) 文系 文系
 理系に関心がないため
- 4) 1【大学院一般】学振の研究者なった人となれない人の状況(金銭、研究費)が違いすぎる。
 【女性の問題】少なくとも研究室では男性研究者(院生のこと)に認められるか否か仲良くやっていけるかどうか、生き残るための死活問題。その意味で男性よりもいろいろとハードルが高い。
 2 絶対すすめない。健康を害するから(家の中に閉じこもってばかりで)
 3 無
 4 ほとんど見られない ぶつうの企業よりむしろ女性にやさしい環境。問題は女性の能力への偏見と、女性自身のドロップアウト(研究職をめざすのをやめる)
- 5) 1 わからない
 2【男女共通】無
 【女性】密室人事をやめるべき 同じ業績だと男のほうが優遇される
- 6) 1 無理して増やす必要はない。遊び半分の子学生はいらない。個人的には、女が少ないほうが女にとっては居心地がいい 文系にはすでに30%ぐらいいると思われる
 2 アファーマティブ・アクションには絶対反対 ただし男女問わず対象とした育児支援はほしい
- 7) 女性研究者が少ないのは問題だと思うが、女性自身の選択(ほかの仕事につく、結婚するetc)によるところが大きい。それは”研究者”になるまでの過程が、あまりにも厳しいのが原因。男性はジェンダー??により、キャリアアップ志向から逃れられないが女性は発想を自由に転換して生きていく。女性を研究の場においておきたいなら、学界の競争原理や、いやらしい内部の対立など馬鹿げた慣行をなくすべき。もっと他に魅力的な職業・生き方がたくさんある。

回答者番号：76

- 1) 1 女
 2 文系 修士課程2年
- 2) 1 研究を続けたかったから
 2 あった
 3 無
- 3) 文系 文系
 学部で学んだことを続けたかったため
- 4) 1【大学院一般】特になし
 【女性の問題】特になし
 2 女子学生に限らず、進学を希望する学生には勧める
 3 いるが、女性に関する問題では特に相談したことはない
 4 見られない

- 5) 1 ある
- 2 【男女共通】文系では大学院修了は一般的な就職に際してメリットになりにくい
- 【女性】女性の方が内定率は低い 女性の方が男性よりも生活に困っていないと見なされる傾向がある
- 6) 1 研究分野によっては、その研究に興味を持つ女性が少ないから、特に目標値を設けてまでして増やす必要はない
- 2 男女を対象にした育児支援の奨学金は必要。産休休暇は男女を問わずにとる制度を設けるべき
- 7) 無

回答者番号：77

- 1) 1 女
- 2 文系 (学年不明)
- 2) 1 一般企業ではなく、個人として研究成果を発表して働きたかった。経済的には不安があったので多少のためらいはあった。
- 2 はじめは反対したが、そのうち理解してくれた。奨学金とバイトで足りない生活費は仕送りしてくれた。
- 3 就職がいつになるのか、どのくらい難しいのかをはっきり知りたかった。
- 3) 文系 文系
- 高校から大学に進学する時点で既に研究したい分野は決まっていたので、変更する必要はなかった。
- 4) 1 【大学院一般】先生によって、学生への指導内容にばらつきがある。面倒見の良い先生、放っておく先生。育英会の奨学金が、申請者3人のうち自宅外の2人は通らず、自宅生の1人が通ったのはとても疑問に感じた。
- 【女性の問題】留学や病気などの理由で休学できる年数と、出産で休学できる年数を別にもうけるべき。仮に若いうちに3人くらい子供を産みたいと思っても現行の規則では、休学できる年数が足りない。
- 2 研究を続けられたのは良かった。研究そのものは男女問わず自分が評価される職種だから。女子学生に限らず、研究したい人には進学をすすめる。
- 3 多くはないが、いないこともない。出産、子育てと、研究の両立について相談したい。
- 4 当然、大学院にもあるだろう。研究者同士での結婚が周囲でも多い(院生も先生も)が、家事・育児の負担はたいてい女性にある。院生結婚した場合、どちらか一人(当然男性)が常勤職につければ女性は非常勤くらいで良いという雰囲気がある。大学の採用者側にもそういう意識があって、男性を優先して採用しているのではないかと疑うこともある。
- 5) 1 女性の先輩がそもそも少ないので比べにくい、女性は自分は就職せず、「研究者の妻」になった人も多い。
- 2 【男女共通】ポストが少ない。
- 【女性】就職すると、忙しくて子供が産めないのではないかなと思う。夫婦が研究者の場合(そうでなくても)互いに日本全国どこへでも就職するわけにはゆかない。たいてい女性が犠牲になる。
- 6) 1 人口と同じ50%であるべき。ただ目標値をかかげて優遇したりすべきかどうかは何とも言えない。様々な障害を取りのぞくうちに自然とそうなら良いと思う。分野によっては男女比が違ってても仕方ないとも思う。
- 2 育児支援の奨学金があると良いと思うが、育児に多くの負担を女性がせおっている現状を考えると、そ

れを変えるためには女性限定の方が良いと思う。

- 7) 出産・育児休暇は、男性「でも」とれる現状をあらため、子供が一定の月齢に達するまでは、強制的に休暇を男性に取らせると良いと思う。(院生よりまず先に教職員たち) 女性は、絶対にとらなければ産めないのだから。男性が強制的に育児・家事に参加させられることで、同僚、後輩女性、あるいは女子学生に対する理解も変わると思う。そして女性研究者も、育児休暇をとることにためらいや遠慮を感じずにすむと思う。

回答者番号：78

- 1) 1 女
2 文系 修士課程2年
- 2) 1 学部時代に学んだ事について、仕事をする内に再び研究したいと思うようになったので
2 理解はあった。学費などは働いているときに作った貯金でまかなう事にした。
3 無
- 3) 文系 文系
無
- 4) 1 【大学院一般】コピー機 研究室パソコンが故障したらすみやかに修理してほしい。
【女性の問題】子供が居る人は、預ける所がないと授業を休んでいるようである。
2 自分では良かったと思うが、他人には特に勧めない。
3 一応居る。先に留学した人に経験談をきいた。
4 無
- 5) 1 女子のほうが若干状況が悪いようである。
2 【男女共通】無
【女性】結婚して子供が居ると就職しにくいようである。
- 6) 1 特になし
2 育児支援は必要だと思うが、未婚者については女子に対する特別な措置は必要ない。
- 7) 海外での就職についてもっと支援してほしい(情報収集、書類作成、面接時のアドバイス)

回答者番号：79

- 1) 1 女
2 文系 博士課程1年
- 2) 1 専門の学問がおもしろく、もっと深めたいと思ったため。就職が厳しいという点で進学をためらう時もありました。
2 最終的に理解が得られ、応援してもらっています。自宅生なので、生活費の支援をしてもらっています(学費は奨学金です)
3 特になし
- 3) 文系 文系
学部の授業、ゼミが面白く、専門の学問を深めたいと思ったため、同じものを選びました。

- 4) 1 【大学院一般】研究職についた場合の奨学金返還義務免除の制度がなくなったことは残念です。また大学の研究支援体制はもっと充実してほしいと思います。研究生、図書館の開室、開館の時間延長など。
- 【女性の問題】特になし
- 2 進学してよかったと思っています。ただ、後輩に進学を勧めようとは思いません。先行きが見えないので。
- 3 います。
- 4 女性の能力を蔑視する意識が多かれ少なかれ、男性にあると感じられる時が（ごくたまにですが）大学院においてもあります。例えば、上の学年の男性大学院生から「女には哲学はできない」といわれのない中傷を受けたことがあります。
- 5) 1 30歳を過ぎても非常勤講師の就職口があるのがやっとな、という状況です。なかなか専任の講師の口はありません。毎年1,2人がせいぜいです。男女間の違いは今のところ特にないように感じています。
- 2 【男女共通】大学院生の数が増えているのに、求人数がそれにあわない点。
- 【女性】よくわかりません。
- 6) 1 なぜなのかはよくわかりません。女性研究者が、より研究しやすい環境をととのえるためには、やはり女性研究者の数が多くなることが望ましいと思います。そのためには目標値を設定する必要があると思います。30%という数字はどういう基準なのかはよくわかりませんが・・・
- 2 活躍している女性研究者が多くなれば、女性大学院生数も増えると思います。そのために、上のような、女性が活躍しやすい体制をととのえてもらうのは、同性としてはありがたいです。ただ、「女性だから」というだけで優遇されるのは、またあらたな偏見を生むことにつながると思います。あくまでも男女問わず「能力のある」といえる女性を対象にしたものでなければならぬと考えます。
- 7) 無

回答者番号：80

- 1) 1 女
- 2 文系 博士課程2年
- 2) 1 就職してやりたいことがなかったのと、学び足りないと思った。（進学をためらったのは）自分に研究者としてやっていくだけの探究心と能力があるのかに疑問を感じた。
- 2 理解はないが、諦められた。修士までは学費を出してもらえた。今も生活費は全面的に頼っている。
- 3 特になし
- 3) 文系 文系
- 学部ではまだ全然勉強し足りない気がしたので大学院でまだ学びたかったし、他の分野にはあまり興味をもてない
- 4) 1 【大学院一般】何人かの先生とその先生に師事する学生が他の学生に対し高圧的な態度で接し、自分達の側につかない場合は潰しにかかる。
- 【女性の問題】無
- 2 色々考える時間ももてたし、自分にとってはよかったが、他人にはあまり勧められない。女性がいるには、よっぽど強く自分を保てる人でないときつい世界だと思うから。

- 3) いない。特に相談したいこともない。
- 4) ある。ある先生に「女が学問の場にいること自体が許せない」と言われた。他にもセクハラも日常茶飯事(の先生もいる)。あとやはり競争意識が激しい人たちの中なので、出産や育児などでの休暇はなかなか難しい。
- 5) 1) かなり難しい。女性はどうしても非常勤になりがち。
2) 【男女共通】就職口がなかなかない。
【女性】同じ能力だったら男性が優先的に良い職を回される
- 6) 1) 単純に男女の性差に関する社会的言説による影響が大きいのであって、一般社会と大してかわらないと思う。ただ、女性は生理的問題で男性との競争には大きなハンディがある。無理に女性研究者を増やす必要はない。30%という目標にするには、不自然な女性優遇が必要になってしまう
2) 特に女性だけを優遇するのは不要だと思うが、出産・育児支援は必要だと思う
- 7) 無

回答者番号：81

- 1) 1) 女性
2) 文系 修士課程1年
- 2) 1) 大学を卒業し、社会に出て働きましたが、仕事を通して、研究したいテーマに出会い、仕事を辞めて大学院進学を目指しました
2) 上記のような理由ですが、家族は理解してくれています。経済的支援としては、同居させてもらっていることです。
3) 修士課程から博士課程へ上がる人数や、それにかかる年数、修士修了と博士修了での、それぞれの就職先などの詳細な情報があつたらと思います。(入試を受ける時点でも、今現在でも)
- 3) 文系 文系
同じく文系といっても、学部の時と今の専攻は異なる分野です。今の専攻の分野を選んだのは、仕事を通して興味を持った訳ですが、確かに文系の領域に興味があるからのようです。
- 4) 1) 【大学院一般】先生ご自身がお忙しいときなど、自分の研究の相談などもしづらい時があります。日本学術振興会の奨学金などに年齢制限がありますが、私のように社会人経由の場合、年齢的に難しくなる場合が多く、制限は年齢ではなく、あくまで学年で決めてくれたらと思います。
【女性の問題】産休や育児休暇の取得と、その間は学費免除などの支援があればと思います。
2) 自分自身は研究職を目指しているので、進学してよかったと思います。大学院に進学することで婚期が遅れるわけでもなく、それは社会で働いても同じなので、あくまで研究を続けたいテーマを持っているかどうかで決めてもらえたらと思います。
3) すでに大学で教えたりされている女性がいて、色々話をさせてもらっています。今はとくに、いかにして修士2年で博士課程に上げられるかについて相談させてもらったりしてます。
4) 学会発表や学術雑誌への投稿だけを見れば、男女比はほぼ対等なので、現実として教職に就いている女性研究者が少ないのが不思議です。具体的には分かりませんが、研究職の採用の時点で落とされるのなら、実績評価だけでなく、女性だから、というもあるような気がします。

- 5) 1 もともと女性が少ないので、個人の事情による部分が多いですが、やはり研究に専念し研究職を目指している女性では、その道にいかれた方もいますし、博士課程に上がらない人は男女とも就職先をきちんとみつけているので、それほど差は感じていません。
- 2 【男女共通】特にありません。唯一の気持ちは、就職の際の年齢制限です。
【女性】とくにありません。
- 6) 1 研究に関してだけは男女の能力に差はないと信じているので、女性が少ないから全体の3割は入れよう、などという方針はむしろ女性蔑視につながると思います。
- 2 女性大学院生の数だけ増やしても、先に述べたように、研究の実績が研究職に就くことに結びついていないので、まず今研究に挑んでいる女性に、正当な評価が下され、仕事に結びつく可能性が広がれば、研究職を目指すことを大学院進学の時点で断念しなくなると思います。女性対象の賞などは6) 1の理由から、必要ないと思います。学生の身分で育児も重なると、金銭的に大変だと思うので、育児支援の奨学金は良いアイデアだと思います。
- 7) 無

回答者番号：82

- 1) 1 女
- 2 文系 修士課程1年
- 2) 1 勉強を進め、自分の研究をしたかったからです。進学をためらったことはありません。
- 2 ありました。
- 3 特にありません。
- 3) 文系 文系
- 同じ種類の勉強をしたかったからです。
- 4) 1 【大学院一般】奨学金等、経済的援助のシステムがもっとあればと思います。
【女性の問題】結婚・出産等はしていないのでわかりません。
- 2 学部の学習だけでは研究の入口にも至らないので、大学院に入ってなんとかそれよりは前進したという意味では進学してよかったと思います。同じ理由で、後輩にも研究をしたいのであれば進学するとよいと思うと思います。
- 3 いません。今のところ(女性として)相談したいことは特にありません。
- 4 特にみられません。
- 5) 1 わかりません。違いがあるという話は聞きません。
- 2 【男女共通】研究者の職が少なく経済的問題を抱えている人が多いと思います。
【女性】(女性だということで特に)問題があるという話は聞きません。
- 6) 1 進学後の就職口が少ないことから、学部卒業後に就職する方を選ぶ人もいるのではないかと思います(直接聞いたわけではありませんが)、女性研究者が増えればよいとは思いますが、どの程度増やすかといったことについてはよくわかりません。
- 2 研究に対して女性対象の賞を設けることには無理があると思います(研究そのものに性別は関係しないというのが原則だと思うので)、育児支援は意味があると思います。どうしても女性の負担が大きくなると

思うので。

7) 無

回答者番号：83

1) 1 女

2 文系 修士課程1年

2) 1 考えて、書く力を、さらにつけたかったから。

2 両親共にアルバイト勤務のため、継続的な経済的支援は無し。就職が比較的考え易い、という点での理解はあった。

3 就職状況

3) 文系 文系

そのまま、同一のことを深めていきたくったから。

4) 1 【大学院一般】特になし

【女性の問題】懇親会で、やはり女性として見られていると感じさせる言動をされたことがある。

2 各個人で大学院進学への強い希望があるならば、大いにそうして良いと思う。

3 いる。相談したいことは特になし。

4 大学院へ進んでくる人たちの中には、そうした意識をもっている人は少ないと思う。世界一般として、男性も、そして女性も、男性は働き、女性は家庭を守る、少なくとも比重的にその割合が多い、と思われるのだと思う。身体構造の違いからすれば、ある程度は合理的だとは思いますが。

5) 1 あると思う。

2 【男女共通】需要が圧倒的に少ない。

【女性】歳を重(原文ママ)

6) 1 半々ぐらいが健全なのだと思う。女性の数が少ないのは、結婚して出産するのが女の幸せだと考える女性が多いからだと思う。

2 いずれも大いに良いと思う。とりわけ、一定数の女性枠確保は良いと思う。意識を変えるのには長い時間がかかると思うので、外枠からの強制的な措置は必要だと思う。

7) 特になし

回答者番号：84

1) 1 女

2 文系 博士課程3年

2) 1 物心つく以前から「学者さんになる」と決めていたため。現実にそれで生活できるのかという不安はあったので、少しためらいはありました。

2 ありました。快く思っていない親族もいますが、表立っての反対はありません。

3 特にありません。

3) 文系 文系

文学の研究を続けたかったので。

- 4) 1 【大学院一般】同一学科内部で、指導教員間の指導内容や方針の格差が大きく、修論の審査基準は同じなのに提出までに受ける教員からのフォローに差があるのは不平等の感があります。
【女性の問題】特に問題を感じることはありません。
 - 2 よかったと思います。希望する後輩がいれば勧めます。止める理由がない(特に「女性だからやめた方がいい」という理由は自分の周囲にはない)からです
 - 3 たくさんいます。結婚や出産を考えることになれば相談すると思います。
 - 4 能力への偏見などは感じたことはありません。現実的な問題として、女性の方が家事負担が多いように見えるのは確かですが、それは各家庭の方針なので、特に研究機関への要望として、不満を覚えることはありません。
- 5) 1 男性は一般職、研究職両方に就職していますが、女性は研究職のみのように思います。院卒の女性が一般就職するのは難しいのかもしれない。
 - 2 【男女共通】就職に関するビジョンを立てにくいので、不安を感じている人が多いと思います。
【女性】特にありません。
- 6) 1 女性は院進すると一般就職できないイメージがあります。そのイメージのせいかもしれないとは思いますが、よく分かりません。増やさなくてはならないとは特に考えませんが、なりたいの女性であるがために断念している人が多いとすれば、配慮していただけるとよいと思います。
 - 2 女性向けの研究費などが特に設けられることになれば、一般向けの研究費などで逆に女性への門戸が狭まるのではないかと不安です。育児支援など、男女共通の支援の方が望ましいと思います。
- 7) 自分の所属ゼミは男性の方が圧倒的に少ないため、逆に男性が居心地の悪さを感じることもあるのではないかと思います。”女性研究者”に特有の問題も多いので、一概には言えませんが、”研究現場におけるマイノリティ”という捉え方で扱うべき問題も、今回のアンケートには含まれていないのではないかと感じました。

回答者番号：85

- 1) 1 女
 - 2 文系 修士課程1年
- 2) 1 研究続行のため。より専門的な研究をしたかった。
 - 2 あった。
 - 3 学術振興会の制度、など。科研費など、研究支援の制度の説明。
- 3) 文系 文系
卒論の延長上の研究だったので。
- 4) 1 【大学院一般】特に無し
【女性の問題】教員の対応。
 - 2 良かったと思っている。後輩には、本人の意思があればすすめる。
 - 3 研究室で女性が少ないので、どうやって対応していけばよいか、又、研究テーマなど相談した。
 - 4 具体的には研究には支障のあることはない。
- 5) 1 ない。

2【男女共通】就職先の研究機関がすくない。

【女性】特になし。

- 6) 1 就職の際に、年齢があがると不利になるから。修士卒よりも新卒のほうが一般企業や公務員に採用されやすいという概念があるから。30%くらいで妥当。
- 2 教員・研究領域に女性の数を増やすことは賛成。その分野における女性の意見がほしい。男性の多い社会の中で立場的に強く言える女性がいて欲しい。
- 7) 特になし

回答者番号：86

- 1) 1 女
- 2 文系 博士課程2年
- 2) 1 将来大学関係に就職を希望していたため ためらいはありませんでした
- 2 十分に理解し、生活費などの経済的支援をもらっています
- 3 就職状況に関する情報
- 3) 文系 文系
- 理系にはいけませんでした。(もしくは、とても負担が大きいです)
- 4) 1【大学院一般】文系にもう少し奨学金を出してほしい
- 【女性の問題】女性限定の奨学金もあってよいのでは？
- 2 まあまあ。すすめる 理由(女の子が沢山いた方が自分の居ごちがいいから)
- 3 いない 「どうやったら就職できますか？」
- 4 とりあえず数が少ないので、いごちがわるく、特別視されがち。あとのことは独身なのでよくわかりません。
- 5) 1 就職は男女ともきびしいと思います。でも、女の子の人でまともに就職した人を私は知りません。
- 2【男女共通】とりあえず、数が少ない。文系の部門が縮小傾向にあること
- 【女性】女の子の人で就職している人がほとんどいないので、特別視される。人に抜きんでた力がないと、それをはねかえせません。
- 6) 1 女性大学院生が少ないのは、それが大変だからです。でも、仲間が増えるというのが、とても重要なので、増えることは大歓迎です。欲をいえば、50%はほしい。
- 2 女性を対象にした奨学金はすごくうれしいし、一定の女性の目標値もよい(目標値よりも、強い拘束をしてほしいくらいです) 育児支援は、まだ独身なのでよくわかりません
- 7) アメリカの大学で有色人種枠があるみたいに、女性枠がほしい。

回答者番号：87

- 1) 1 女
- 2 文系 修士課程2年
- 2) 1 就職に失敗したから。また、もっと学びたいという気持ちも強かったから。進学が決定してからはため

らったことはない。

2 はい。「人生、学べるときに学んでおきなさい。」とバイトをしなくても大丈夫なぐらいの生活費を送ってくれています。父(子供が二人産まれても、まだ無職だった・・・)も、資格試験を目指して、20代のとき勉強していたため、非常に理解があります。

3 特になし。ただ、東京以外から受験したため、基本的情報が少なかったです。

3) 文系 文系

文系 文系は当然だと思うので、特に理由はない。

4) 1【大学院一般】先生の努力で奨学金はいただけました。指導も丁寧にしていただき、特に問題はありません。

【女性の問題】特になし。

2 自分自身は良かったと思っている。しかし、後輩には勧めない。大学院でやっていくには、独特のポジティブさと要領の良さが必要だから。精神病の人、自己顕示の強い人等にふり回されるから。(要するに”ちょっと”変わった人が多い・・・)

3 相談に乗ってくれる人はいます。相談したいことは、「結婚と学問の両立」です。

4 大学院において経験はしていない。(しかし、知り合いの女性で、院修了後も職につけない人を数人知っている。たぶん、結婚相手としては敬遠され、職にはつけない。どうやって生きていくのだろう・・・)

「学ぶときは平等、職にはつけない」のでは？

5) 1 まだM2なので分からない。ただ、男性の方が選ばれている気がする。

2【男女共通】無

【女性】院卒は敬遠される。というか、若くても年齢が修了時24歳・・・ 女性としては厳しい!!

6) 1 社会が、「学ぶ女性」を嫌うから。(こざかしく、正当ぶって、口達者・・・)女性研究者は増やすべきだと思う。まずは30%というのは現実的だと思う。

2 とても素晴らしいと思う!! あと、社会の意識も変えてくれたらなお良い。院だけの内部の問題でなく、社会全体の問題だと思う。

7) 女性研究者への社会のまなざしを変えてください!

回答者番号: 88

1) 1 男

2 文系 修士課程2年

2) 1 研究者(大学教師)になるため。進学をためらったことはない。

2 どちらもあった

3 とくになし

3) 文系 文系

研究を継続するため

4) 1【大学院一般】教職員はみな親切で、研究についての支援も満足できる

【女性の問題】男性として、女性が不利益を蒙っているようには見えない。隠れた問題があるのかもしれないが。

- 2 私はよかったと思う。女性だけでなく男性の後輩にも進学を勧めることはない。なぜなら進学の決意は各自の自信や気概以外に依らないと考えるから。
- 3 今現在、そういう女性は身の回りにいない。
- 4 結婚・出産をした女性はいるが、何か困難を抱えているようには、傍目からは見えない。
- 5) 1 就職状況は悪い。男も女も一緒。
2 【男女共通】就職活動をしたことがないのでわからない。
【女性】同上
- 6) 1 何百年も前から大学における学問は特に男性によって担われているように思える。理由はよくわからないが、性別による能力の差がないのであれば、男女区別なく進学すればよいだろう。目標値についてはよくわからない。
2 そもそも何故女性大学院生だけを増やせば良いというのかわからない。
- 7) 男性からはわからないことが多いので、ぜひ女性の意見をききたいですね。

回答者番号：89

- 1) 1 男
2 文系 博士課程2年
- 2) 1 修士課程における研究テーマを継続して探求する為
2 理解が有り、経済的支援(主に授業料)があった。
3 主な就職先(研究職に就く人はどれくらいいるのか?)
- 3) 文系 文系
研究テーマが一貫している為
- 4) 1 【大学院一般】指導教員の対応は非常に良く、熱心に指導頂いている。
【女性の問題】指導教員の対応は、男性と変わらないと感じている。
2 教育・研究関係の職業に就きたいと思っているので、進学してよかったと思う。同じような職業(研究者など)に就きたいと考えている後輩には進学を勧める。
3 相談に乗ってくれる女性はあまりいない。男性は数名いる。
4それほど感じられない。
- 5) 1 卒業後の就職状況(特に博士課程)は十分知っている分ではないので、何とも言えないが、男女では違いがあるように思われる。
2 【男女共通】大学院生の総数が増加する一歩で、研究職の就職先の数は変わらない、もしくは減少していると感じられるので、就職は厳しい状況にあると思う。
【女性】女性の研究職に就く割合は、男性に比べて低いので、就職は、より厳しい状況にあると思う。
- 6) 1 女性研究者は、今後増えていく必要があると思う。女性からの視点で現代社会の問題を捉え、それに取り組むことが重要であると思われる。30%以上は増やす必要があるだろう。
2 女性研究者の数(女性が研究職にもっと就けるように)を増やす必要があると思う。上記の女性への支援策は適切であると思う。
- 7) 無

回答者番号：90

- 1) 1 男
 - 2 文系 修士課程2年
- 2) 1 関心を持つ分野の研究を深めるため、また将来においても研究にたずさわっていくことができるように。
 - 2 理解あり。家族の経済状況の許す範囲内での支援あり
 - 3 学費、入学金免除や奨学金についての詳しい情報
- 3) 文系 文系
つねに文系(文化・文学)の分野に関心を持っているため
- 4) 1 【大学院一般】学費免除・奨学金貸与のための条件が厳しい。特に、本人のアルバイトなどによる収入を勘案されて学費免除や奨学金の許可が下りないと就学が困難となる場合があります
【女性の問題】特に気付いたことはありません
 - 2 男子学生、女子学生にかかわらず研究に関心のある後輩には進学を勧めることもありますが、いずれにせよ本人が決めることであると考えます
 - 3 いません
 - 4 文学の研究を志す人には女性も多く、活躍している女性研究者も多いので、特に男女の別は感じられません
- 5) 1 よく知りませんが、特にないように思います
 - 2 【男女共通】日本ではマイナーな言語にかかわる研究であるため、就職口はきわめて少ないというのが現状のように思います
【女性】とくに女性だからという問題ははありません
- 6) 1 男女の別なく意欲のある人が研究職に就くべきであると考えます
 - 2 文学離れのはなはだしい昨今、男女共に多くの学生が文学研究を志してくれることを望みます
- 7) 無

回答者番号：91

- 1) 1 男
 - 2 文系 博士課程2年
- 2) 1 研究が面白かったから。
 - 2 学費、家賃を負担してもらっています。
 - 3 特にありません。
- 3) 文系 文系
理工から入ったので基本は理系です。しかし「心理学」を扱っているのは文系のみです。また学んでいる技術としては「神経生理学」にあたるので「なぜ文系か」という問いに対しては「たまたまやりたいことをやらせてくれる教授が文系に所属していたから」としか答えられません。
- 4) 1 【大学院一般】奨学金が非常に出づらく、また学費免除も受けづらくなっていて、月～土全て朝から夜ま

で(9:00~23:00)研究の仕事に専念している学生にとって厳しいものがあります。親の収入よりも本人がどれほど稼げるのかの方が余程重要です。

【女性の問題】(ここに当てはまることか分かりませんが)女子トイレが少ない。男子から見ても明らかに少ないように思えます。しかし女子が増えた後に改善すべきことでしょうね。

- 2 進学してよかったと思っています。企業よりは研究にまつわる研究以外のことから来る制約が少ないと思うからです。女子学生の進学は男子学生の進学と全く同じ程度に勤めるだけです(やる気があれば行けと言うだけ)。女性ゆえの問題を進学/就職の天秤にかけることに際してのアドバイスは無知ゆえ出来かねます。
- 3 いません。
- 4 特に思い付きません。
- 5) 1 そもそも知人に女性がほとんどいないので知りません。
2 【男女共通】「問題」は特に思い付きません
【女性】分かりません
- 6) 1 女性が就職しないのと同じ理由しか思い付きません。出産時は必ず女性は仕事を休まねばならず、責任が1人にかかるような地位には女性を置きづらい。研究でも企業でも、1年近く自由に空白を作れるようなのん気な仕事はそうそう無く、それゆえ「女性は家庭に居た方が対応はラク」という結論になる。女性研究者を増やすことに関しては「やる気があるのに非合理的な理由でやれない」という女性達を救済する積極的な措置は必要だと思うものの、研究者志望者の男女比が7:3である保障はないのだから30%という目標値にはあまり意味は感じない。
2 「ただ増やしたい」のなら女性に偏った報酬でも何でも設ければよいと思います。極端に言えば、男性の学費だけ上げたってやっていることとしては同じです。
- 7) 無

回答者番号: 92

- 1) 1 男
2 文系 博士課程3年
- 2) 1 大学での研究に飽きたりなかったから。研究者になりたかったから。
2 兄も同様の進路をとったので、問題なかった。経済的支援はなし。
3 特になし。
- 3) 文系 文系
自分の専門テーマをさらに深く広く学びたかったため
- 4) 1 【大学院一般】国費留学が決定した際、奨学金の支給が打ちきられた。生計をたてることと学業の両立が難しくなった。
【女性の問題】私達の研究室は例外的に女性の割合が男性の割合を超えており、肩身の狭さを感じているようには思われぬ。しかし、これは卒業後の進路とは別問題である。
2 私自身としてはよかった。私は男女を問わず大学院進学を勧めているが、それは大学4年間で社会に飛び出すのはいささか早いように思われるからだ。

- 3 なし
- 4 私の研究室ではそれほど顕著ではない。しかし、結婚、出産で研究室を離れていく女性大学院生が少なくないのも、又事実である。
- 5) 1 私達の研究室では卒業後、専門に連結した研究室、教授職につくことは極めて難しく、これは、男女の性差に関わりないと思われる。
 - 2 【男女共通】研究職教授職の絶対数の少なさ。
【女性】家事・育児の両立
- 6) 1 文系大学院では、さほど女性の割合が少ないとは思われない。むしろ、女性が生活の不安なく研究に打ちこめる環境づくり、又、女性が任意の学問に深い興味と敬意を払えるようになること（そうした教育を施すこと）が肝要と考える。
 - 2 仕事・研究の別なく、出産・育児の際に日本の女性に多くの時間とエネルギーの消費を強いるのは直視すべき現状である。大学院進学の際問題となるのは、やはり研究そのものは生計をたてることと無関係であるどころか、支障にもなる、という点であろう。ぜいたくを奨励するつもりはないが、生活の不安解消なくして、女性を大学院に誘導することは難しい。
- 7) 今回この「女性と大学院」というテーマ設定自体に多少おどろきとまどいを覚えた。確かに研究の現場で女性差別が行われているのなら、それは根絶されなければならないが、例えば、「30%」という数値目標などは、本末転倒で、いかなものかと思う。この問題はやはり日本に根強く残る「女性は家庭」という封建的風潮にいきつき、そうした風潮で中・高・大学を過ぎた女性が、真に学問を志すようになることは、現状として難しいのではないか。その点では、制度や環境をととのえ、女性が研究に集中できる下地をつくっておく、というのは歓迎すべき方向性を考える。

回答者番号：93

- 1) 1 男
 - 2 文系 博士課程2年
- 2) 1 学部生の中に学んだことをより深く研究したかったから
 - 2 ありました。
 - 3 無
- 3) 文系 文系

学部生の中に学んだことをより発展した形で研究することを望んだため。
- 4) 1 【大学院一般】無
【女性の問題】無
 - 2 思っています。後輩の女子学生にも、もしその女性が望むなら進学を勧めます。私の知る限り、女性の研究者であるがゆえの不利益というのがあまり（少なくとも学生のうちは）見当たらないと思われるからです。
 - 3 います
 - 4 あまり見られません。
- 5) 1 先輩や先生方の話では、状況は厳しいようです。男女共に厳しいようです。

2【男女共通】無

【女性】無

6) 1 無

2 男女を対象にした育児支援の奨学金を設けることは望ましいことだと思います。

7) 無

回答者番号：94

1) 1 男

2 文系 修士課程2年

2) 1 会社を定年退職後、向学の志に燃えて学士入学、つづいて大学院に進学。進学をためらったことはない。

2 年金生活者なので学資捻出の問題はあったが、一応家族の了解を得た。

3 特になし

3) 文系 文系

無

4) 1【大学院一般】特になし

【女性の問題】分からない

2 無

3 無

4 特になし

5) 1 一般に卒業後の進路は茨の道だが、専攻分野によって事情はさまざまかと思う。

2【男女共通】特になし

【女性】なし

6) 1 人文系の場合、女性院生は近来とみに増えており、問題はない。理想論だが、女性研究者は文系50%、理系40%位が望ましい。

2 設問に掲げられた方策はいずれも結構であるが、“一定数の女性確保の目標値”は、よほど慎重な配慮を要しよう。(米国の大学における逆差別問題にも通ずる危険がある)

7) 特になし

回答者番号：95

1) 1 男

2 文系 博士課程4年

2) 1 ひとまずもう少し深く勉強してみたかった。自分は能力・勉強が足りないのではないかと、あるいは就職から逃げているのではないかと、とためらいを感じた。

2 あった

3 院生の就職状況。(研究職の)

3) 学部での勉強にもの足りないものを感じたから、同じ系に進学した。

- 4) 1 【大学院一般】無
【女性の問題】無
- 2 よかったと思いたい。あるいは思えるように努力している。勤めない。研究は男女を問わず厳しいものだから。
- 3 いる。ない。
- 4 育児・出産といった問題よりも、研究室の狭い人間関係 (= 男社会) を敬遠するのだと思う。
- 5) 1 ないと思う。
- 2 【男女共通】ポストが少ない。若手に任期制を導入しつつ、一方で現職者の定年を伸ばしたりするのはおかしいと思う。
- 【女性】無
- 6) 1 少ない理由は4に書いた通り。増やさなくてはならない、ではなく、能力があり、かつ行きたいのに行けない人を行けるようにすることが大事。程度とか、目標値は必要ない。
- 2 どれもそれほど有効でないと思う。少なくとも文系に関しては。
- 7) 男性にもこのアンケートを配るよりも、その分女性に多く配ってより多くの意見を拾うべきだ。

回答者番号：96

- 1) 1 男
- 2 文系 修士課程2年
- 2) 1 研究者になるために大学院に進学しましたが、常勤職を得ることが難しいため、進学をためらいました。(この理由で、博士進学は断念しました。)
- 2 最低限の理解は得られましたが、十全とは言えませんでした。就職が難しく経済的に厳しいことがその理由です。修士の間は学費を出してもらおう約束をとりつけました。
- 3 各先生の詳しい専門。どのように学生の面倒を各先生が見てくれるかどのような研究会が行われているか。
- 3) 文系 文系
同じ専門をやりたかったため。
- 4) 1 【大学院一般】指導教員は全く面倒を見てくれませんでした。学生という弱い立場上、改善を求めることができませんでした。これが大学への最大の不満です。貸与でなく給与の奨学金の給付人数をもっと増やしてほしいと思います。
- 【女性の問題】無
- 2 悔いのない進路を選ぶという点では進学してよかったと思いますが指導教員が全く面倒を見てくれず自分が学問的にレベルアップしなかったという点では進学に意味はなかったと思います。学問と心中する覚悟がないなら、後輩の女子学生には大学院進学をすすめません。
- 3 いません。いたら、研究上の悩みや就職のためにどうすればよいかということ、奨学金を得るためにどうすればよいかということ、指導教員とどうつきあっていけばよいかを相談したいと思います。
- 4 あると思います。質問の項目どおり、男性の家事育児参加が少ないこと、女性の能力への偏見、仕事と家庭の両立支援策が大学にないことが原因だと思います。

- 5) 1 就職の状況は厳しいようです。男女の違いはわかりません。
 2 【男女共通】常勤職の枠が少ないこと。
 【女性】無
- 6) 1 女性研究者は50%近くいた方がよいと思います。30%は、通過目標としてはよいと思います。
 2 女性対象の研究費、奨学金、賞の設置には反対です。男女平等に評価されるべきだからです。女性確保の目標値設定、育児支援奨学金設置には賛成です。特に後者には賛成です。
- 7) この問題は男性よりも女性に多く聞いた方がよいと思います。(例えば男3:女7の比率で実施するなど。対象人数のことです)

回答者番号：97

- 1) 1 男
 2 文系 修士課程2年
- 2) 1 研究をしたかったのだ。
 2 理解を得られた。
 3 特になし
- 3) 文系 文系
 受験科目を考えて
- 4) 1 【大学院一般】よく言えば自主性の尊重、悪く言えば放任でしょうか・・・
 【女性の問題】研究室には、女性のほうが多く、特に問題は感じない
 2 よかったと思う。勧める。それ程、女子に不利な分野ではないと思う。
 3 いる。研究分野について。
 4 見られない。
- 5) 1 院に入って2年足らずなので、よく分かりません
 2 【男女共通】就職難
 【女性】無
- 6) 1 各個人がそれぞれのおかれた状況で判断するものだと思うので、増やすべきかどうかは分かりません
 2 育児支援などは必要と思うが、賞の設置などは、逆に不公平感を与えるのではないか。
- 7) 無

回答者番号：98

- 1) 1 男
 2 文系 博士課程3年
- 2) 1 今までやってきた勉強をつづけたいと考えたから。進学をためらったことはない。
 2 わたくしの両親は積極的に支持してくれた。
 3 この問いに対する答えは特に思いつかない。

3) 文系 文系

学部での勉強をつづけるために同じ文系の大学院を選んだ。理系の大学院に進むなど、考えたこともない。

- 4) 1 【大学院一般】指導教員が全く指導してくれないのでこまっている。指導教員が不公平なひとなのでおおいに不快だ。

【女性の問題】特に思いつかない。

- 2 自分の知りたいことをしらべ、論文にすることはやりがいのあることなので、後輩の女子学生に限らず、勧める。

3 相談に乗ってくれるような大学院卒業の女性はいないし、相談することもない。

4 特にないと思う。大学という場は男女をとくにわけへだてをするような気風はない。

- 5) 1 わたくし自身に関しては、研究職を得られそうにない。男女で就職状況に違いはあるだろう。

2 【男女共通】文系の研究職が少なすぎる。

【女性】考えつかない。

- 6) 1 男性・女性に限らず、優秀な人が研究者になればよい。女性研究者の数値目標を設定すること自体、理解できない。

2 女性大学院生の数を増やすために特にすべきことはないだろう。そもそも大学(学部)に女子学生がいらないだろう。

- 7) 女子研究者が少ないのは、女性の生き方に対する社会の側の見方が変わらない限り仕方がないことだ。学部レベルで女子学生を増やすことも考えるべきかもしれない。

回答者番号：99

- 1) 1 男

2 文系 修士課程1年

- 2) 1 勉強して、学位をとり、次のキャリアに活かしたかった。(社会人です)

2 はいありました。実家の父が車を処分してくれて、そのお金を入学金にしました。週一回、夜が遅い(ゼミのため)ことについて、妻と娘が理解してくれています。

3 オーバードクター率

3) 文系 文系

理工系で勝負できるほど、理工系に強くないから

- 4) 1 【大学院一般】家族を持って働いているのですが、奨学金や学費の減免など、所得制限にひっかかります。しかし、扶養と住宅ローン、教育費などで、自由になるお金は少なく、苦しいです。

【女性の問題】特に気が付きませんでした。

2 その人の資質ややりたいことにもよると思います。一般論としてなら、一度、社会に出てから、再度、勉強することをすすめます。

3 いません

4 私は男性ですが、家庭では、夜の仕事(子供にごはんを食べさせる、お風呂に入れる、寝かしつける)がありますが、ゼミや研究会が、夜が多いのでしんどいです。

- 5) 1 個人差もあると思いますが、女性で大学院卒のキャリアを活かすのは難しそうですね

2【男女共通】大学のポストが少ない。

【女性】大学外に職を得るのが困難

6) 1 無理に増やさなくても良いが、今、女性研究者や女性大学院生の抱えている問題を解決すれば良い。数字は後からついて来る。

2 育児支援の奨学金に賛成！

7) 特になし

回答者番号：100

1) 1 男

2 文系 (学年不明)

2) 1 研究を継続するため

2 経済的支援はないが、理解はある。

3 就職先とその割合。又、その職を得るまでにかかる年数。

3) 文系 文系

同じ分野の研究をつづけているから

4) 1【大学院一般】奨学金の問題。独立行政法人化して育英会でなくなったことは理解できるが、その後、返還免除の基準を示さないのは、全くおかしい。大学で対応するべきである。

【女性の問題】私の研究科では問題があるようには見えない

2 よかった。とくに勧めはしない。

3 とくにない

4 男性の意識は、むしろ、社会一般の問題としてある。例えば、女性へは授業での指摘が甘いこと。

5) 1 不透明

2【男女共通】いつできるか分からないという不安がある

【女性】男女差があるのかどうかすら分からない

6) 1 私の研究科は50%であるが、目標値を設定するのは奇妙だ。

2 育児支援には、おおいに賛成

7) 無

回答者番号：101

1) 1 男

2 文系 博士課程2年

2) 1 学問に携わる職に就きたかったため

2 あり。博士課程に進学してからは経済的支援は遠慮している。

3 内部進学だったため、不都合はなかった。

3) 文系 文系

興味が変わらなかったから。

- 4) 1 【大学院一般】理工系と異なり研究室から金銭的支援が無いため、アルバイトに時間をさかれ、研究の妨げとなる
- 【女性の問題】晩婚になることは間違いないが、これは男女共にそうなので一概に女性の問題とは言えない。しかし例えば大学院生同士で結婚した場合には何らかの金銭的優遇措置があつて良いと思う。
- 2 思っている。本人の意欲があれば女子学生にも勤められる。
- 3 女性だから何か特別なことを相談する、ということはない。
- 4 特に見られない。むしろ、経済力のある男性と結婚し、アルバイトの必要なく研究ができる側面がある。
- 5) 1 良くないが、業績主義が浸透しており分かりやすくはある。大学院生の男女の比率を考えると、男女間で就職先の不平等感があるとは思えない。
- 2 【男女共通】Ph.Dが必須条件となったが、Ph.D取得までに5～10年かかる現状との不具合がある。
- 【女性】分からない
- 6) 1 女性研究者の数を増やすことそのものが目標となるとしたら、極めて馬鹿げていると思う。
- 2 「男女を対象にした育児支援」を除いて反対
- 7) 大学院進学にあたって男女に同じ条件を課すことが前提だが、その後は「男」「女」ではなく、研究能力の「有」「無」が問題になるのであって、その時に女性に対して優遇措置をとるのは逆差別となるだけでなく、学問水準の低下を招くと思う。

回答者番号：102

- 1) 1 男
- 2 文系 博士課程2年
- 2) 1 自分の専門分野について、もっと深く勉強し、自分の視野を広げるために、大学院に進学した。
- 2 家族のすすめ、理解、そして経済的支援があるから大学院にいる
- 3 入試の回答例、大学院が学生に求めているものの詳細
- 3) 文系 文系
- 2 - 1と同じ
- 4) 1 【大学院一般】指導教員の対応（適切な指導、援助がほとんどなく、むしろほったらかしにされている気分）
- 【女性の問題】無
- 2 大学院に進学してよかったと思う。（結果としては自分の専門分野の知識が豊かになった）後輩の（女子）学生には、自分自身に対する目標がはっきりしていても、まだまだ探していても、まずは進学をすすめたい
- 3 相談に乗ってくれる、とまではいえないが、親しい大学院卒業の女性はいる
- 4 自分のいる場所ではあまりみられない
- 5) 1 わからない
- 2 【男女共通】自分の専門分野からは、そのままだと就職はかなり限定され、難しいと思われる。
- 【女性】？
- 6) 1 おそらく、女性の方が就職の方を重視しているから？ 無理してまで女性研究者を増やす必要はないと

思う。30%の目標値も、女性の志向によって変わるとされる。

- 2 女性(だけ)を対象にしたものを設ける必要はないと思う 教員・研究領域に一定数という目標値を設定する必要もないと思う 育児支援は大事だと思う

7) 無

回答者番号：103

1) 1 男

2 文系 博士課程4年

2) 1 音楽学の研究者になるための職業訓練のため

2 あった。最初の2年については授業料を払ってくれた。自宅生としてひきつづき生家に暮らせたし、食事も作ってもらうこともできた。

3 特にない。

3) 文系 文系

自分の学問的関心は文系の方に常にあった。

4) 1 【大学院一般】指導教官の対応には問題はなかったと思う。奨学金については、色々のものがあった方がよい。学振の特別研究員になれるか、なれないかで、生活パターンが大きくかわってくるのは、ちょっと問題がある。

【女性の問題】指導教官とどう距離をとっていいかわからずに孤立し、最終的に研究が行きづまってしまいう例が多い。

2 よかったと思う。女性の方にもどんどん入ってきてほしい。女性の学習環境をよくするきっかけにもなっていくから。

3 いない。もしいたら、大学院での女子研究者とのつきあい方について、カウンセラーになってほしいものだ。当事者である我々は、ともすると思ひ込みで女性をきずつける事があるから。

4 差別は見られる。私の同僚の中には、女性研究者の発表になるとムキになって批判する人がいる。研究は男がするものだ、と思ひ込んでいる人は、人文系の研究者の中には案外多いのではないか(女性には論理的な構成力がない、という神話の様々なヴァリエーションがよくきかれる)。ちなみに、そういう人(男性)に限って事務職の女性にはやさしかったりする。

5) 1 統計的には、女性の方が職につきにくいかもしれない。しかしそれがジェンダーのためなのか、能力のためなのか、自分には判定できない。

2 【男女共通】ポストが少なすぎる！ 経済的に自立するのが難しい状況である。(当然、晩婚志向が強まる・・・)

【女性】人脈が上手く築けない分、キャリアが上にいくほど状況は難しくなってくるだろう。ただし、身の回りに研究者として就職する例は少ないので、具体的な問題はわからない。

6) 1 ゼミの指導と飲み会が、一セットの「指導」になっているゼミは多いと思う。飲めない男、酌をしない女性は、ともすると「主流派」から外れてしまいがちだろう。つきあいだけでなく、研究の展開に必要なタテ横の人的つながり+知見のひろがりの構築においても、環境を皆で整える必要がある。ただ、30%という数字を考えるのはあまり意味がないかもしれない。

- 2 科研費等の審査をする側に、女性を増やせば、長期的には女性大学院生の数は増えるかもしれない。教員については、スタッフの一人に女性を入れる事で状況は変わるだろうから、それは目標にしてもいいかもしれない。育児支援よりは、まずは女子学生を支援する奨学制度を充実させてみてはどうか。
- 7) 最近『キャンパス・セクシュアル・ハラスメント対応ガイド』(沼崎一郎著、嵯峨野出版)という本を読んだ。私自身は女性にやさしく対応してきたつもりだったが、女性研究者をとりまく環境の厳しさについて、改めて考えさせられた。いろいろな目標値を設定するのもいいが、普段十分意識されていない『男のヘゲモニー』の弊害について、男性側に問題意識を持ってもらうように動いてみたら、どうだろう。例えば、上述のガイドの内容のようなものを、必修のセミナーのようにして、大学院のカリキュラムに取りこめば、皆の意識も変わってくるだろう。

回答者番号：104

- 1) 1 男
2 文系 博士課程3年
- 2) 1 研究を続けたかったから。
2 あった
3 奨学金、研究費、福利厚生
- 3) 文系 文系
学部での関心の延長線上に大学院で研究したいことがあり方法論や研究環境を変える必要はなかった。
- 4) 1 【大学院一般】教員の職務が何かを明示して欲しい。奨学金の充実はいわずもがな。大学にとって大学院生とはどういう存在なのか明示すべき。
【女性の問題】トイレ盗撮問題にもっと迅速に対応すべきだった。
2 よかったと思えるよう努力している。進学については男女関係なく強く勧めることはしない。特に私の分野では社会での実務経験も重要であり、社会人入試が充実してきた今、学部卒直後に院に行かずとも将来の可能性はなくなる。
3 いる。キャリア形成とライフスタイル(人生設計) 別に女性に限らないが。
4 正直言えば、私の分野、特に若手は女性研究者が多い。しかしこれは「女性研究者が少ない理由」とある部分で共通の原因にも基づくと思う。つまり男性は、将来が安定しているとはいえない研究職になるための大学院生活をつづけることをためらい、女性はそのプレッシャーと少し距離をおいて、つまり収入を得て家計を支えるという義務意識が薄くてすむゆえに悪条件の研究生生活をつづけていける。
- 5) 1 有意なほどの事例はないが、違いを強く感じることはない。
2 就職口が絶対的に少ない。就職に必要なスキルや経験を院生時代に効率よく身につけられない。希望する分野の就職をあきらめた時の他の選択肢が狭すぎる。
- 6) 1 文系においては女性も多い。無理に数値だけ上げて仕方がない気もするが、30%もないのなら異常かもしれない。
2 女性にとって大学を魅力ある場にする。女性に人気のある企業に学ぶこともあるだろう。大学をもっと生活・人生という視点からとらえなおせば女性にも男性にもよい場となるだろう。単なる目標設定だけではダメだろう。奨学金による誘導はある程度の効果はあると思うが、人数が増えるだけでもいけない。

7) 無

回答者番号：105

- 1) 1 男
 - 2 文系 博士課程
- 2) 1 研究者になるため
 - 2 理解は得たが、経済的支援は一切ない。
 - 3 特になし
- 3) 文系 文系

学部時代の関心がそのまま深化したので系が変わるはずはなかった。
- 4) 1 【大学院一般】育英会を含めた奨学金制度があまりに貧弱すぎる。経済的に豊かな学生しか大学院で学べないという現状は異常であると思えない。
【女性の問題】特になし
 - 2 よかったと思う。女子学生にも希望している人にはすすめたいと思う。
 - 3 いない。
 - 4 すべてが大学院にもあてはまると思うが、それは大学院の制度の問題というより、国と社会の構造的な問題だと思う。
- 5) 1 わからない。
 - 2 【男女共通】就職のチャンスが院生の数に比して少ない。就職前の奨学金（育英会）返済義務規定が厳しい。
【女性】既婚の女性が育児をしながら、専任職としてはたらくような社会的構造（制度、意識、慣習）が不十分ではなかろうか。
- 6) 1 数値目標はそれだけでは意味がない。女性研究者が増えるのは良いことだとは思いますが、それが女性の負担増加によって成り立つのであれば、無意味である上に問題であると思う。
 - 2 男女のジェンダー配置に対する構造的な変革が必要。その前提として、一人当たり労働にかかる時間、賃金、税制、その他保障をすべて見直さなければならない。今の日本の労働構造が変わらない限り、女性の負担増加なしに女性院生の数を増やそうとしても、女性の地位と福利は向上しないと思う。
- 7) 研究者としての道を歩むことが女性にとっての福利向上と幸福増進につながるのであれば、女性院生も自ずと増加するだろう。男女間でのワークシェアリングなどのような形で、既存の労働のあり方を抜本的に変えて、一人当たりの労働量を減らすことが必要だと思う。

回答者番号：106

- 1) 1 男
 - 2 文系 修士課程2年
- 2) 1 社会人生活を通じ、専門的に学びたい分野ができ、本格的に研究活動を行いたいと考えたため。
 - 2 社会人生活が長かったので、特に家族からの理解は必要としなかった。（辞職・進学はいわば事後承諾）、経済的支援は一切なかった（現在においても）。

3 過去問のホームページ上の公開。ほかの社会人学生の声など。

3) 文系 文系

問2 - 1に書いたように、学部とは専攻は違うが、社会人生活で得た情報から抱いた関心が、たまたま研究分野として文系に分類されていたため。

4) 1 社会人学生(つまり、社会人を経験した上で、現在職を持たない人たち)に対する金銭的支援(内外の給与奨学金等)があれば、より集中的に研究が可能であろう。

2 特別ありません。

3 おりません。

4 少なくとも私の所属研究室では女性が圧倒的に多いので、上の質問には明確に回答しかねる。

5) 1 特になし。むしろ年齢の問題が多いと考える。

2 【男女共通】一度研究に戻った社会人経験者が、研究職以外の職を得ようとする、上に書いたとおり、まだまだ、門戸が狭いと思う。それだけ大学院での研究の重要性が一般社会に認知されていないのだと考える。

【女性】極めて私見であるが、これまで自宅から通ってきている女子院生の場合、遠方に就職口があったとしても、居を移してまで、その職を得ようとする(気概)が少ないのではないかと考える。

6) 1 一生研究職につきたいという明確な目標設定が、男よりも女性に少ないのだと思う。30%の目標値については極めて非現実的である。(選考ごとに男女比が変化するのは当然のことである)

2 上のような女性対象の金銭的援助は全く必要ないと思う。それこそ逆差別である。良い意味の実力主義が貫かれてこそ、研究は活性化するものである。ただ育児支援などは、これから深刻な問題となると考える。男女ともに与えられるシステムが導入されるべきである。

7) 無

回答者番号：107

1) 1 女

2 理工系 博士課程3年

2) 1 4回生終了時、修士終了時に、まだ研究したいと感じたから。

2 実験のため、(自宅生なので)夜遅くなる事や、家族の生活リズムとかなりずれる事が多くなる事に関して理解をしてくれた。生活費は自宅生の為、家族の家計と同じだが、自分個人の出費、授業料はアルバイトや奨学金でまかかった。

3 特になし

3) 理工系 理工系

学部で研究していた内容に興味があったから。

4) 1 【大学院一般】特になし

【女性の問題】指導教員は女性学生の扱いに困ってられるのを時々感じた。同時に、同学年では、男子学生優位に扱われていると感じる事が度々あった。

2 よかった。本人に興味があれば進学をすすめるが、興味はそれ程ないのに、就職に有利だから、とか、名誉欲のためだけに進学をする人にはすすめない

- 3 いません。もしいたら、結婚・出産の時期と研究のペースについて。
- 4 研究室への拘束時間が長いため、家事・育児との両立は、かなり難しいと思う。周りに前例がないので分からないが、出産や育児の為の休暇はとりにくい状況にあるのではないかと思う。
- 5) 1 企業に行く人について違いは感じない。しかし、大学や研究所への女性の就職先は非常に少ないから、男性との差があるように感じる。
2 【男女共通】院生に限らず不景気の為、就職は難しくなっていると感じる。
【女性】社会全般的に就職難になると影響を受けやすいのは女性だという点で女性は不利かもしれない。特に院卒だと年齢も高くなるので難しい気がする。
- 6) 1 卒業後の年齢の問題（婚期・出産が遅れる等） 増やさなければならぬとは思わないが、進学したいと考える女性が進学しやすい環境を整えてほしいと感じる。目標値を出すことに意味を感じない。
2 出産や育児の為の休みをとりやすい環境や、周囲の理解が一番必要だと考えます。賞や教員に女性を対象とした設定は、無理に設ける必要はないと思う。公平に評価されたいと思う。育児支援の奨学金は欲しい。家計のために研究をやめる事がなくなるので意義深いと思う。
- 7) とくになし

6. 参考資料

1) アンケート依頼文及び調査事項

アンケート調査の実施について（協力依頼）

日本学術会議学術体制常置委員会研究者養成分科会では、第19期の活動として、「女性研究者育成の観点からの大学院教育の問題点」について調査・検討を行っております。

大学院生に占める女性の割合は、分野による違いはあるものの、男性よりかなり低くなっています。その原因の一つが、女性の大学教員や管理職が少ないこと、任期付きの職に就く女性が多いことなど、男性優位の社会にあることは明らかですが、この度のアンケート調査は大学院教育に的を絞り、教育のシステムの中に女性が大学院で勉強しにくい環境があるのか、あるならそれは何か等その問題点を調査し、必要であれば対策を検討することを目的としております。

アンケートの対象は、各地の大学の理系と文系の研究科（専攻）の男女大学院生とさせていただきます（専門職大学院、留学生を除く）。研究科（専攻）は、そこに所属する女性が5名以上になるように選び、女性が20名までは全員を対照とし、それを越えた場合には越えた分5名につき1名の割合で対象人数を増やします。男性も女性とほぼ同数を選んでください。その場合、所属研究室などの偏りがないように、ランダムに選んでいただくようご留意願います。

回答者のプライバシーを守るために、回答は無記名とさせていただきます。回答はこの用紙に御記入いただき、メールに添付して送りいただくか、調査事項番号とご回答を直接メールに書き込んでご送付願います。メールの返送先アドレス及び問合せ先は下記のとおりです。

無記名とされましてもメールアドレスは残りますが、そのことにつきましては日本学術会議事務局の責任において削除いたします。

本アンケートの趣旨をご理解の上、よろしくご協力をお願いいたします。

< 調査事項 >

1) 1 性別

2 専門分野、学年

2) 1 あなたが大学院に進学をした理由はなんですか。進学をためらったことがあれば、その理由はなんですか。

2 進学についての家族などの理解・経済的支援はありましたか。

3 大学院の入試を受ける時点で、カリキュラムや研究内容以外に、どのような情報があったら良かったと思いますか。

3) 学生（特に女子）の理工系離れが深刻になっていますが、あなたは出身学部と現在の大学院は理工系か文系かをご記入の上、もし同じなら、同じ系の大学院を選んだ理由を、もし違うなら、なぜ違う系を選んだのかを書いてください。

- 4) 1 進学後、以下の点についてなにか問題や、改善すべき点がありましたか。大学院一般の問題と、女性の問題を分けて書いてください。
- < 指導教員の対応、研究テーマの決定、奨学金の状況、結婚・出産等の問題、育児休暇後、復帰して研究を続けることが可能か、大学の支援体制の有無とその充実度、その他 >
- 2 あなたは大学院に進学をしてよかったと思っていますか。後輩の女子学生に大学院進学を勧めますか。その理由も書いてください。
- 3 あなたの身の回りに、相談に乗ってくれるような大学院卒業の女性がいますか。そのような人がいたら相談をしたいことがありますか。それはなんですか。
- 4 女性研究者が少ない理由は、男性の意識(家事・育児参加が少ない、女性の能力への偏見等)、女性が働きにくい職場環境、仕事と家庭の両立支援策がないことなどがあげられていますが、これに似た状況は大学院にも見られますか。もしあれば、具体的に書いてください。
- 5) 1 卒業後の就職の状況はどうですか。男女で就職状況・就職先に違いがありますか。
- 2 就職に関する問題が何かありますか。男女共通の問題と、女性の問題を分けて書いてください。
- 6) 1 女性大学院生の数が少ない理由は何だと思えますか。女性研究者を増やさなくてはならないと考えますか。もし増やすとすればどの程度ですか。現在、30%という目標値がありますが、この数字をどのようにお考えですか。
- 2 女性大学院生の数を増やすためには何を変えたらいいですか。科研費などの研究費、奨学金、各種の賞に女性を対象としたものを設けること、教員・研究領域に一定数の女性を確保するための目標値を設定すること、男女を対象にした育児支援型の奨学金を設けることをどのように考えますか。
- 7) その他、この問題についてのご意見がありましたら、自由にご記入ください。

2) 委員の意見

(1) 女性研究者育成の観点からの大学院教育の問題点

第1部 前田 専學

はしがき

ここに提出する報告は、女性で、日本仏教思想史を専攻する日本学術振興会特別研究員（SPD）の手によって纏められたものである。今回の報告書作成者が全員男性であるため、小生の判断で、アンケートの目的と内容をお話ししたところ、大変に興味を示されたので、お願いすることにしたものである。彼女の感想は、以下のとおりである。

「なかなか興味深かったです。貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。理系女性は殊に大変そうでした。とはいえ、状況は良くなっていると思いますし、我々世代には、ごく少数でも先輩女性研究者のモデルがいるので、精神的にありがたいです。女性に研究ができることを実証してくださった先輩世代に、心から感謝しています。……私も当事者の一人ですので、無意識に、いろいろ偏った見方になっていると思いますが、それも一例として、ご利用下されば幸いです。ありがとうございました。」

小生としては、この報告に特に訂正あるいは加筆すべきことはない。

なお、報告者の名前は伏せたが、必要であれば、本人の許可を得て、お知らせすることにしたい。

目次

- 1 はじめに
- 2 大学院の問題 一般 女性問題
- 3 就職について
- 4 対策について
- 5 結論

1 はじめに

今回のアンケートに見られた大学院における女性問題は、文系と理系で異なっている。

理系では、実験研究に要求される体力の不足（アンケート番号 11・32・42・53・60 等）であり、文系では、院卒後の就職口の少なさ（74・79・80・87 等）である。この問題は、男女問わず理系・文系の研究者が抱える問題と思われるが、女性の場合は男性より負荷が大きくなり、性的格差が大きく生じてくる。

全体的傾向として、男性と女性の間はかなり回答の差があった。男性は無関心な回答が多く、女性は学年が上がるにつれ、育児支援や研究者女性卒の必要性を訴える深刻な声が増えていく。これは学年が上がるにつれ、女性個人の努力だけではどうにもならない現状が認識されていくからと思われる。

理系においては、男女を問わず「周りに女性教員が少ない、或いはいないため、アンケートの各設問に答えようがない」という回答も目立った。

以下、大学院・就職・対策の順序で、特徴を述べる。

2 大学院の問題

一般（設問4 - 1・2等）

第一に、経済的問題が挙げられる。具体的には、奨学金貸与獲得の困難さ（利子付き返済、免除職規定が無くなったこと、奨学金貸与決定の不透明さ、書類提出の手間）が多かった。さらに、学術振興会研究員の定員数拡大、授業料免除規定の基準公開を求める声が見られた。

研究室進学時に求めることは、各研究室からの卒業生の進路情報の公開（企業就職、科研費取得実績、学振研究員・OD オーバードクターの数、博士学位取得率等）が、圧倒的に求められた。理系においては、研究室と就職に直結する分野が多いため、文系より研究室の就職情報の必要度が高いと思われる。大学院でのオープンキャンパスの必要も指摘された。

女性問題（設問4 - 4等）

環境と意識の問題が複雑に融合しているが、便宜上、環境問題から述べる。

大学院在学期間は、一般に女性の結婚・出産適齢期にあたるが、出産・育児への支援策（仕事と家庭との両立支援）は、大学院においては全く見受けられない(33・38・47・64等)。むしろ院生・研究者としての結婚・出産は、周囲に反対される(33等)。実際の問題としては、生後一ヶ月の子供の母親(4)で、保育所の必要性が述べられた。

意識については、哲学・倫理分野における男性教員からの女性の能力蔑視、男性研究者における無意識の女性蔑視の指摘があった(7・26・79・80・103等)。女性への特別視でかえってやりにくい(60)、もう普通に扱って欲しい(53等)の声も見られた。

意識と環境の複合的な問題としては、男性だけが専任研究職として就職できる現実があるため、安定した就職の見込みのない女性が、家事・育児の負担を負うことは仕方がないという通念があること(4・13・77)。既婚の男性研究者は、家事・育児の負担をしていない、という指摘もあった(32)。

3 就職について

前項の大学院での女性問題と重なってくる。

男女間での就職状況に大差があるという認識は、文理を問わず、多く見られた(3・4・32・50・64・68・76等)。

男性と女性が同じ業績ならば、男性が優先して採用されている(4・28・42・75・77・80)。院卒女性の就職先が限られており、敬遠される。具体的には公務員にしか就職できない、女性は研究職には就けないなどがあげられた(28・38・62・64・81・84・87)。

4 対策について

女性大学院生を増やすためにはどうすればよいか、という設問については、女性研究者が増えれば、女性院生も増えるという回答があった(79等)。

女性対象の支援策については、「女性専用の奨学金・賞・目標値などの支援策は、男性への逆差別であり、女性への蔑視が前提になっている」という意見が、男女問わず、多く見られた。ただ、女性の場合は、博士課程に進んで学年があがるにつれ、何らかの形で女性支援策が必要という回答が多くなった。以下、賛成数の多かった支援策を挙げておく（設問の設定上、厳密に数えるのは困難なの

で、おおよその数字である)。

1. 男女を対象とした育児支援の奨学金 (男女問わずほとんどの回答者が賛成)
2. 女性枠の奨学金 (11名)
3. 全て歓迎 (9名)
4. 女性枠の目標値 (7名)
5. 女性の賞 (5名)
5. 育休支援・育休後の復帰支援策 (5名)
6. 大学内の保育施設 (3名)
7. その他 (生活不安の解消・92、男女の昇進格差の解消・42、女性雇用に比例した助成金支給・58、育児期間中のフレックスタイム制・64)

5 結論

アンケートの目標である「教育のシステムの中に女性が大学院で勉強しにくい環境はあるか、あるとすればそれは何か」という設問への答えは、直接的には、結婚・出産・育児支援策がない、ということになる。これに対しては、男女不問の育児支援の奨学金、大学内保育所の試験的設置が考えられる。

より根本的問題としては、理系では、実験が要求されるため「研究は、朝から晩まで休日関係なく、体力的にとてもきつい上に、将来的に結婚・出産・育児を考えると、あまりの難題の多さに、とても辛い気持ちになる」(32)。

文系では、就職先が無い「女性は研究職には就けず、結婚相手としては(高学歴・高年齢で)敬遠され、どうやって生きていくのか? 学ぶ時は平等だが、就職は不平等である」(87)というのが、それぞれの代表的な意見と思われる。こうした問題は、男性にもある程度は共通することであり、女性環境の改善は学界全体の改善につながりうる。

対策としては、かなりのひずみが生じるが、現在の障害者雇用を参考として、女性雇用目標値設定が有効と思われる。時限立法として見直し期間の設定、女性雇用比率に応じた助成金支給、女性非雇用の学部・学科への助成金削除等のペナルティ設定(数年前に、女性科学者が提案済み。彼女は「海外まで目を向ければ女性研究者はいる、非雇用研究科はつぶすところまでやらなくては駄目だ」と言っていた)なども付随して考えられよう。

参考資料として、2005年4月6日付けの毎日新聞記事を添付した。既にポジティブ・アクションが始まっているが、なかなか進まないことが述べられている。昇進格差、研究費獲得の男女差も、顕著に見られる。日本の女性研究者比率は、OECD加盟国中、最低比率の10%であり、助教授は5%である。この消費税並みの状況を30%まであげるためには、かなりの困難が予測される。

これまでこうした女性の意見は、発言する場所さえ与えられてこなかった。乳児の母親である4の「私がドクターを取るまでには状況は変わらないのだろうと思います。もっと早くからこの問題を取り上げ、検討対処してもらえればどれだけ助けられたか、と残念です」という回答には、痛切なものがある。

回答の多くに「女性学部生・研究者が少ないから院生も少ない」という言葉が見られたが、それは学界の閉鎖的現状の反映である。日本の学界が文理共に、アンケートで見られた彼女たちの真情を汲んで、女性が、ひいては男性も、よりよい研究ができる方向へと、進んでいくことを願ってやまない。

参考：2005年4月6日付け毎日新聞

登用進まぬ女性研究者 「育児か仕事か」迷い、昇進で不満

科学研究の世界では、女性はまだ少数派だ。研究を志す女子の数が少ないだけでなく、研究者人生に多くの「壁」があることが、学会などの調査で明確になってきた。こうした実態を踏まえ、女性研究者の処遇改善を求める声が、研究現場から出始めている。【元村有希子】

男性は教授に昇格し始める40歳代後半、女性はようやく助教授 研究費、40～54歳で半分以下

現場の声

学会シーズンを迎えた3月、日本物理学会、応用物理学会など自然科学系の学会が相次いで「男女共同参画」をテーマに議論の場を設けた。子連れで参加できるよう、会場に臨時の託児部屋を開く学会も珍しくない。こうした動きは、自然科学系の学会が02年に「男女共同参画学協会連絡会」を結成したことで弾みがついた。

連絡会は昨年、加盟39学会の研究者約2万人の実態調査をまとめた。結果から浮かぶのは、「育児か仕事か」に迷い、採用や昇進面で不公平を感じながら研究する女性像だ。

回答者の内訳は男性84%、女性16%。既婚者率は男性が22ポイント高い。女性の67%が「子どもはいない」と答え、男性の42%を上回った。就学前の子どもの育児を担当するのは、男性の85%が「配偶者」、女性の83%が「保育園」だった。この結果から調査報告書は「科学技術系専門職の世界でも『家事・育児は女性の仕事』という傾向が強く残っている」と指摘する。

さらに業績を左右する役職や研究費を、年齢分布の偏りによる影響を除いて分析したところ、昇進は女性が遅く、企業で2～4年の差があった。大学の場合、男性が教授に昇格し始める40歳代後半に、女性はようやく助教授になり、教授になれないまま定年(60歳)を迎えている。研究費も大学や公的研究機関で格差が大きく、40～54歳では男性の半分以下だった。

こうした処遇格差を、男性の49%、女性の74%が「ある」と認めた。

調査の中心になった東京大工学部の近藤高志・助教授は「昇進や研究費で女性が不利なのは明らか。改善しなければならないが、男性が育児休業を取って研究を中断すると、研究費が来なくなり、スタッフが路頭に迷う。こんな制度不備も改善すべきだ」という。

91年度の女性助手9.5% - - その10年後、助教授4.9%

助教授の壁

東京大分子細胞生物学研究所の伊藤啓・助教授は東京大のデータを基に女性教員の昇進状況を調べ、「助教授の壁」を指摘している。

大学教員は一般的に助手-助教授-教授と、ほぼ10年刻みで昇進する。91年度の女性助教授比率は3%だが、10年後(01年度)の女性教授も3%で、順当に昇進していることがうかがえた。「ところが、助手から助教授への選考に壁がある」と伊藤さん。10年間の変化を調べると、91年度の

女性助手は9・5%いたのに対し、01年度の助教授は4・9%しかいなかった。

さらに伊藤さんは、「技術員」などと呼ばれ、実験や庶務を補助している非正規職員の待遇改善も主張している。「大半は女性だが、雇用が不安定で昇進できない」。3月下旬、埼玉県和光市の理化学研究所で開かれた「日本女性科学者の会」主催のシンポジウムで、伊藤さんはこう訴えた。

3000人が働く理研でも、単純計算だと女性比率は40%近いが、研究補助者を除くと10%台に落ち込む。研究責任者の主任研究員・チームリーダーはさらに少なく、230人中10人しかいない(04年3月末現在)。

女性比率高い大学、支援の要望も

進めぬ登用

現状を変えようと学会を中心に取り組みも始まった。伊藤助教授が所属する日本分子生物学会(会員数約1万5000人)は改善策を提言にまとめている。

研究責任者の女性比率が高い学部や研究所をモデル事業に指定して予算を重点配分したり、労働基準法の枠組みを超える取り組みを可能にする「特区」に指定するなど、積極的な支援を奨励する体制作りを国に要望したいという。

男女のアンバランスを、さまざまな手法で解消しようとする取り組みは「ポジティブ・アクション(積極的改善措置)」と呼ばれる。男女共同参画社会基本法(99年施行)に位置づけられ、日本学术会议や国立大学協会も勤めているが、研究現場への浸透は遅れている。

政府も、大学・研究機関が女性登用に関して数値目標を経営計画に盛り込み、達成度を評価するよう「第3期科学技術基本計画」(06~10年度)で規定する方針だ。内閣府男女共同参画局によると、岩手大と鳴門教育大は中期計画で、女性教員比率を20%に増やすことを既に掲げている。また日本化学会は、26人の理事のうち1人を女性枠とすることを決めた。

同局の塩満典子調査課長は「具体的なデータを基に現場の実態や要望が学会などを通して明らかになってきたのは心強い。こうした動きが改善の原動力になる」という。

この報告書で言う「女性研究者育成の観点」とは、大学・研究機関における助手等の補助的な人材の確保という観点を意味するものでないことはもとより、科学技術を支える人材の確保という観点とイコールでもないと言うべきであろう。まして、猛スピードで進む少子高齢社会に歯止めをかけようという少子化対策を含意するものでもない。それは、性別にかかわらず、あくまで一人ひとりの個性や能力を發揮できるよう研究を支援するという観点でなければならないであろう。

そのような観点から見た女性院生の研究支援とはどのような支援であるべきか。アンケート調査結果から教えられたことや気づいたことを、未整理ながら、列挙してみよう。

第1は、女性院生が研究と出産・子育てとを両立できるように支援することである。具体的な支援策として、次の3つが考えられる。それぞれ、保育のニーズ、研究の継続性確保のニーズ、及び養育費のニーズに対応している。

保育のニーズについては、大学内または大学の近くに保育施設を確保することと、場合によっては延長保育やベビーシッターによるサービスなど多様なサービスが必要である。

出産と育児のため研究の継続が困難な場合、一定期間後、研究に復帰しやすいように育児休業の制度を別枠で設けるとともに、あわせてTA制などを活用した研究支援を検討する必要がある。

養育費のニーズについては、現行制度として、児童手当、児童扶養手当、及び特別児童扶養手当などの社会手当制度があり、これらを活用することができる。しかし、その活用だけでは救済されないケースが出てくることも考えられる。例えば、学生結婚で児童の父母ともに研究に専念していて稼働能力が低い場合など、児童手当（月額 5,000 円）だけでは養育費のニーズは満たされず、一方児童扶養手当は原則として離別の母子を対象とすることから受給資格要件に該当せず、救済されないこととなる。このような場合、研究の継続を断念せざるをえないこととならないよう、児童扶養手当に準じた何らかの児童養育費保障を講ずる必要がある。例えば、児童扶養手当額相当の育児支援奨学金を奨学金制度に新設（一定の条件付で返済を免除）することなども検討に値しよう。

いずれにせよ、以上の具体策を実現するに当たって、とりわけ配慮を要する点は、サービスの利用対象（権利主体）を女性院生に限定しないことである。この点は女性院生のアンケート回答のなかで繰り返し強調されている。

第2は、これもアンケート回答の中で明確に指摘されていることであるが、女性院生が安全に研究に専念できるように施設設備を整備することである。具体的には

女子更衣室（特に実験系にとって必要）を設けること。

研究の必要上夜遅くまで実験等を行うことがあることから、各棟に警備員を配置ないし巡回させるなど安全な環境を保つこと、などがあげられる。これらは、とりわけ女性院生に配慮が必要であるが、すべての院生に共通するニーズでもある。

第3は、一人ひとりの女性院生が、十分に情報を得たうえで、進路や研究計画を自ら決定し、適切で良質の研究指導を受けられるよう支援する仕組みを講ずることである。これには、いろいろのやり方が考えられるであろうが、基本は、情報の提供、内部評価と外部評価、苦情解決と権利擁護であって、要は、これらの仕組みを形として整えるだけでなく、一人ひとりにとって身近な活きた仕組みと

なるようにすることである。これらの仕組みの連動によって、女性院生のみでなくすべての院生に対する指導のやり方そのものが変わることも期待できるであろう。少し敷衍するなら、

女性院生（及び、その志望者）にとって必要な情報、例えば、課程修了後の進路、就職状況、論文審査の手続きと審査基準、論文公表の手段と査読というような一般的なことから、専攻や研究室、教授によって研究指導のやり方がどう違うかといった情報まで、個々の必要に応じて、そのつど提供するとともに、情報へのアクセスを容易にする窓口・支援を設けること。

研究指導の仕方、論文評価の評価基準・方法等について、専攻や研究室単位をこえて点検・評価を行い、性別にかかわらず開放的で質の高い指導の在り方をできるだけ研究科全体で共有していくこと。これには、教職員と院生による内部評価と、第三者委員による外部評価の手法のほか、定期的で開催される各種レベルの研究会・研修会での相互交流も役立つはずである。

セクハラやアカハラをめぐる苦情はもとより、さまざまな苦情を受けとめ解決する手続きと窓口を設けること、苦情解決の窓口には第三者委員を加えて任命配置すること、院生は指導教授に対して弱い立場に立たされやすいから、院生らによる相互の権利擁護の活動（院生自治会によるピア・アドボカシーなど）を支援すること、などである。

以上の から に掲げられた方策は、とりわけ古い意識に根ざす女性差別を克服していくために必要で、適切な方策となると考えられる。

第4は、以上のような方策をすべて採ったとしても、大学・研究機関の雇用のレベルで女性院生に対し門戸が開かれないのでは、結局、大きな成果に結びつかないかもしれないから、各大学・研究機関において、経営目標として採用の女性枠を設けること、そしてその達成度と達成上の課題について外部評価を受けること、外部評価の結果を公表することなどの取り組みも求められるであろう。目標枠の設定に当たっては、大学や民間企業で働く女性研究者の割合が、アメリカで32.5%、フランスで27.5%であるのに対し、我が国では11.6%と、国際的に見てかなり低いことも考慮されるべきであろう。

第5に蛇足ながら付け加えておきたいことは、以上の第1から第4までの研究支援を具体化する際に、その支援が不公正な誘因、支援、強制とならぬように配慮する必要があることである。この観点から、一般の奨学金や各種の賞に、特別の女性枠を設けることは慎重であるべきであろう。

3 - 1 集計に関する覚書

アンケート回答者の分布			
文系		理系	
女性			
前期課程 (M)	17名	前期課程 (M)	12名
後期課程 (D)	11名	後期課程 (D)	15名
不明	1名		
文系女性合計	29名	理系女性合計	27名
男性			
前期課程 (M)	17名	前期課程 (M)	2名
後期課程 (D)	14名	後期課程 (D)	16名
不明	1名	不明	1名
文系男性合計	32名	理系男性合計	19名
文系院生合計	61名	理系院生合計	46名
	総計		107名

回答では、前期課程と後期課程の判別が困難な場合が多かったので、上記の課程別数字は必ずしも正確であるといえない。そこで、特に必要がある場合を除けば、以下の集計・分析では、前期課程と後期課程の回答数を区別しないで合計値として示している。ただし、回答の例として個別回答文章を示す場合には、前期課程院生の回答には (M) と付し、後期課程院生の回答には (D) と付している。M = 前期課程在学者、D = 後期課程在学者 (以下同様)。

なお、データの集計において、() 内部の数字は、前期課程と後期課程の回答数ないし回答比率を示している (この場合、前期課程と後期課程の所属が不明である人の回答はどちらにも含めていない)。また、分数の分母は、該当する分析区分の標本数 (N) を示している。さらに、質問項目によっては、一人の回答者が複数の事項を挙げているケースがあるが、それらはそのままカウントしている。

データの判別

質問内容や回答様式等の理由で、回答数を識別・分類することがかなり困難な場合が多く、前後の文脈で判断せざるを得なかった。そこで、以下の数字は、分析者の主観的判断を多かれ少なかれともなっている。この点に関する項目毎の注釈は次の通りである。(一人の回答者が複数の事項を挙げているケースがあるが、それらはそのままカウントしている)

1) 大学院に進学をした理由 / 進学をためらった理由 (アンケート設問 2 - 1)

特になし

2) 進学についての家族などの理解・経済的支援 (アンケート設問 2 - 2)

回答では理解・経済的支援の区別が不明確な場合が多いため、まずどちらかがある場合を「理解・経済的支援が得られたという回答(両方あるいは一方)」で集計し、その次に、「理解が得られなかった」という回答と「経済的支援なし」という回答の数を示している。

3) 入試時点でカリキュラムや研究内容以外に欲しかった情報 (アンケート設問 2 - 3)

特になし

4) 進学後、問題だと思っていたり、改善を必要と思っている事項

4 - 1)【大学院一般】 / 4 - 2)【女性の問題】(アンケート設問 4 - 1)

これらの問題に対する回答で、「特になし」あるいは「なし」という記入が見られたが、集計上、【大学院一般】ではそれらの記入は無視し、【女性の問題】では「女性については問題がない」あるいは「女性特有の問題はない」「分からない」「気付かない」などの意味が回答に含まれていると考えられるので、参考までに回答数を集計している。

5) 大学院に進学をしてよかったと思うか / 後輩の女子学生に大学院進学を勧めるか。

(アンケート設問 4 - 2)

回答に微妙なニュアンスがあるので、勧めないという回答とどちらとも言えないという回答を一括している。

6) 身の回り相談に乗ってくれる大学院卒業の女性はいますか / 相談したいことはありますか。

(アンケート設問 4 - 3)

この設問は女性に対して聞くことが本旨であるので、男性の回答の掲載は省略した。

7) 女性研究者が少ない理由は、男性の意識(家事・育児参加が少ない、女性の能力への偏見等)(注1)、女性が働きにくい職場環境、仕事と家庭の両立支援策がない(注2)ことなどがあげられています。これに似た状況は大学院にも見られますか。(アンケート設問 4 - 4)

特になし

8) 男女間での就職状況・就職先の違いはありますか。(アンケート設問 5)

回答は、より多様であるが、集計が困難なため、前後の文脈を考慮に入れて特に就職を困難と感じているかどうかという知覚に焦点を合わせて、【大学院一般】と【女性の問題】に別けて集計している。

また、「特になし」を含めて回答に微妙なニュアンスの違いがあるため、特に問題はない / 考えつかないを一括して集計している。

9) 女性大学院生の数が少ない理由は何だと思えますか。女性研究者を増やさなくてはならないと考えますか。現在、30%という目標値がありますが、この数字をどのように考えますか。

(アンケート設問 6 - 1)

この質問に対する回答も微妙なニュアンスがあるが、前後の文脈を考慮に入れて、判別している(特に研究者を増やすことについて/数値目標の設定について)。

10) 女性大学院生の数を増やす方策: 科研費などの研究費、奨学金、各種の賞に女性を対象としたものを設けること、教員・研究領域に一定数の女性を確保するための目標値を設定すること、男女を対象にした育児支援の奨学金を設けることをどのように考えますか。

(アンケート設問 6 - 2)

この質問に対する回答についても、前後の文脈を考慮に入れて、判別している。

3 - 2 アンケートの分析

回答では、前期課程と後期課程の判別が困難な場合が多かったので、上記の課程別数字は必ずしも正確であるといえない。そこで、特に必要がある場合を除けば、以下の集計・分析では、前期課程と後期課程の回答数を区別しないで合計値として示している。ただし、個人の回答を示す場合には、前期課程院生の回答には(M)と付し、後期課程院生の回答には(D)と付している。M = 前期課程在学者、D = 後期課程在学者(以下同様)。

なお、データの集計において、() 内部の数字は、前期課程と後期課程の回答数の内訳を示している。また、分数の分母は、該当する分析区分の標本数(N)を示している。

質問内容や回答様式等の関係で、回答数を識別・分類することがかなり困難な場合が多く、前後の文脈で判断せざるを得なかった。そこで、以下の数字は、集計者の主観的判断を多かれ少なかれともなっている。

なお、出身学部と現在の大学院は理工系か文系かの質問に対しては、殆どすべての回答者が同じ系の大学院を選んでいると回答をしているので、以下ではそのデータは省略する以下、まず、**女性回答者の回答についての集計データ**を示し、その後で**男性回答者のデータ**を示すことにする。

女性回答者の回答の集計と分析

文系女性回答者数 $N = (M, D, \text{不明}) = (17, 11, 1) = 29$

理系女性回答者数 $N = (M, D, \text{不明}) = (12, 15, 0) = 27$

1) 大学院に進学をした理由 / 進学をためらった理由 (アンケート設問 2 - 1)

進学した理由 :

(文系) 研究・勉強したいため 28/29 (M=17/17, D=11/11)

(理系) 研究・勉強したいため 24/27 (M=10/12, D=14/15)

ためらった理由 :

(文系) 将来の就職不安 (M=2, D=2)、経済的問題 (M=1, D=1)、その他 (注)

(理系) 将来の就職不安 (M=2, D=0)、経済的問題 (M=0, D=0)、その他 (注)

(注) ためらった「その他の理由」には、次のような回答が含まれている。

○女性が少ない世界で、女性であることの不利さがあるかもしれないと少しためらった (D、文)

○あまりためらったことはないが、強いて言えば婚期が遅れること (D、文)

○最初は女ということもあり反対されたが、いまでは理解し、経済的支援もある (D、理)

○後期課程の時は女子が自分一人だったのでためらった (D、理)

2) 進学についての家族などの理解・経済的支援 (アンケート設問 2 - 2)

理解・経済的支援が得られたという回答 (両方あるいは一方):

(文系) 27/29 (M=16/17, D=11/11)

(理系) 27/27 (M=12/12, D=14/15)

理解が得られなかったという回答 (十分ではないを含む):

(文系) 4 (M=2, D=2) (理系) 0

経済的支援なしという回答 (入学から現在までのどれかの時点、自宅生の場合は住居・食費以外):

(文系) 5、(理系) 4 (M=0, D=4) (理系のD=4のうち3は自宅生)

3) 入試時点でカリキュラムや研究内容以外に欲しかった情報 (アンケート設問 2 - 3)

(文系)

(1) 研究者となる道程 / 学位取得後の進路 (OD率、就職状況など) に関する情報 :

15 (M=9, D=4, 不明=1)

(2) 指導教員の指導方針や研究室にかかわる情報 : 6 (M=3, D=3)

(3) 奨学金・科研費・学振等による経済的支援に関する情報 : 4 (M=2, D=2)、その他 (入試、留学、講義内容等についての情報)。

(理系)

- (1) 研究者となる道程 / 学位取得後の進路 (OD率、就職状況など) に関する情報 :
7 (M=3、D=4)
- (2) 指導教員の指導方針や研究室にかかわる情報 : 5 (M=1、D=4)
その他 (困った時の対処方法等についての情報)

4) 進学後、問題だと思ったり、改善を必要と思っている事項

4-1) 【大学院一般】(アンケート設問 4-1)

問題ありと指摘された事項の回答数 :

(文系)

指導教員の対応 (研究テーマの決定を含む) / 研究室のあり方・雰囲気等 (注1)
8 (M=2、D=5、不明=1)

奨学金やその他の経済的支援のあり方 (注2)
12 (M=6、D=5、不明=1)

その他の大学支援体制のあり方 (就職、施設、事務組織など) (注3)
4 (M=2、D=2)

その他 (学生同士の結婚に対する対応など)

(理系)

指導教員の対応 (研究テーマの決定を含む) / 研究室のあり方・雰囲気等 (注1)
9 (M=4、D=5)

奨学金やその他の経済的支援のあり方 (注2)
5 (M=1、D=4)

その他の大学支援体制のあり方 (就職、施設、事務組織など) (注3)
2 (M=2、D=0)

その他 (カリキュラム等)

(注1) 指導教員 (研究室) の対応 / 研究室のあり方・雰囲気等で問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

- 指導教官により、学生に対する「面倒見」がかなり違う (D)
- 論文指導の不足 (M)
- 何人かの先生とその先生に師事する学生が他の学生に対して高圧的な態度で接し、自分達の側

につかない場合には潰しにかかる (D)

○同一の学科内部で指導教官の指導内容や方針の格差が大きく、修士論文の提出までに受ける教員からのフォローに差があるのは、不平等 (D)

○社会人から入学したが、教員は対応に苦慮し、社会人に戻れといわれた (D)

理系

○研究室があまりにも閉鎖的 / 問題があっても内部で抱えこみ、結果的に学生にしわ寄せが来る (D)

○指導教官の対応だが、論文の書き方、学位論文に関する指導が全くなく、学生は科研費のためにただ働きにきている人だという認識があるように思う / 指導教官は研究室以外の人に学生を誹謗し、悪いのはすべて学生で、自分には非が全くないと思っているので、退学者も増える一方 / 大学が教育機関だということを忘れてはならない (D)

○指導教員の対応については、平等性に欠け、個人を尊重してもっと自由にさせて欲しい (D)

○研究テーマについては、希望どおりのことができず、研究室の宣伝と食い違いがあった (D)

(注2) 奨学金等の決定で問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

○奨学金は必要な人に行き渡っていない (M)

○日本学生支援機構一種奨学金の貸与額も何段階かに分けるべきである (M)

○もっとたくさんの人が学振の研究員になればいいと思う (D)

理系

○返済金の一部免除や給与奨学金の制度を増やす必要がある (D)

○返済不要な奨学金に応募できる機会をもっと増やして欲しい (D)

○免除申請などで独立家計を証明しても、親兄弟の源泉徴収を出させるのはおかしく、書類をたくさん出させた挙句、不可にするなら簡単な第1次審査など段階を用意して欲しい (D)

(注3) 大学の支援体制で問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

○調査(フィールドワーク)を行いたいと思っても院生に対して大学からのサポートが全くない / 研究室に配分されるお金の一部を学生の研究に当てて欲しい (M)

○教務の事務の対応が硬直的で、情報伝達が掲示板しかなく、調査などで大学にいけない時に必要な情報をチェックできないことがある / メールやHPなどをもっと活用すべきである / 特に奨学金の情報などは経済的に困窮している院生にとっては死活問題なので配慮して欲しい (D)

理系

○就職に対する支援体制が充実していないし、その支援・対応時機が私立大学に比べて遅すぎる (M)

4 - 2)【女性の問題】(アンケート設問 4 - 1)

問題ありと指摘された事項の回答数 :

(文系)

指導教員の対応 (研究テーマの決定を含む) / 研究室の在り方・雰囲気等 (注1)

5 (M=4、D=1)

奨学金やその他の経済的支援の在り方

1 (M=0、 D=1)

結婚、出産、育児休暇からの復帰等にかかわる問題(注2)

11 (M=7、 D=3、 不明=1)

その他の大学支援体制の在り方(厚生・研究等の施設、特に女性対応施設、事務組織など)(注3)

その他(学生生活に関する情報など)

(理系)

指導教員の対応(研究テーマの決定を含む)/研究室の在り方・雰囲気等(注1)

6 (M=2、 D=4)

奨学金やその他の経済的支援の在り方

0 (M=0、 D=0)

結婚、出産、育児休暇からの復帰等にかかわる問題(注2)

4 (M=2、 D=2)

その他の大学支援体制の在り方(就職、施設、事務組織など)(注3)

その他

(注1) 指導教員(研究室)の対応で問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

○完全な男社会/特に男性基準の恰好が求められ、不愉快と感じる(M)

○少なくとも研究室では男性研究者(院生のこと)に認められるか否か、仲良くやっていけるかどうか、生き残るための死活問題/その意味で男性よりもいろいろハードルが高い(D)

○厳しすぎると結婚してしまうので(?)、指導教官の女子ゼミ生に対する指導が甘くなりがちである(M)

理系

○教授とのコミュニケーションにおいて、男性とは異なる扱いを受けていると感じることが多々あるし、差別的発言を受けることもある/ひいきにされることもあるが、そのことで回りの男性からからかいや中傷を受けることも多く、結果として迷惑に感じる(M)

○指導教官により女学生にかわいさを求める先生がおられ、男性の学生とは差を感じた(D)

○先生方が女子学生に必要以上に気を使い、雑用はさせないし、怒ることもないので、逆にやりにくい(M)

○指導教員は女子院生の扱いに時々困っておられることを時々感じ、同時に同学年では、男子学生優位に扱われていると感じることが度々あった(D)

(注2)結婚・出産及び出産後の復帰について問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

- 出産の問題や育児休暇後の復帰について不安がある(M)
- 個人的には結婚・出産を望んでいるが、特に出産をする場合、研究の中断や育児による研究時間の減少が予想されるため、20代のうちにある程度研究の成果を出し早く就職しようと思うと、それだけプレッシャーがかかるし、研究内容にも制限が出てくる場合もある/ただこれは女性として生まれた運命によるものなので特に改善を望む点ではない(M)
- 産休や育児休暇の取得とその間の学費免除などの支援が必要(M)
- 結婚、出産については特定の相手がいるが、研究と家庭との両立が難しく、結婚すれば研究に専念していないという印象を抱かれる気がする/就職にも不利になるという不安があるし、結婚相手が関西にいて私が関東の大学を希望しても通りにくい気がする(M)

理系

- 結婚・出産等の行為が例外とみなされるのは問題で、実際、途中でこれらが原因で辞めていく人がある/私は現在1ヶ月の子供がいるが、育児休暇などは個人にまかされていて不安があるため取るつもりはない/大学敷地内に託児所があればと何度も思い、研究を諦めようかと思いましたが(D)

(注3)大学の支援体制で問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

- 設備など気になることがある/女性向のかぎのかかる更衣室などがほしい/研究室で男性の院生が椅子を並べて寝ていることがよくあるのも非常に気になる(D)

理系

- 大学の保健管理センターに安心して相談できる女医さんがいない(M)
- 水産分野の実験所で、女性用の宿泊施設がないので実験に参加できなかった(D)
- 学生結婚、出産に対する大学の取り組みがあっていい(M)

【女性の問題】で「特になし」という回答の数：

(文系) 10/29 (M=5/17、D=5/11) (理系) 14/27 (M=7/12、D=6/15)

5) 大学院に進学をしてよかったと思うか/後輩の女子学生に大学院進学を勧めるか。

(アンケート設問 4-2)

進学してよかったという回答：

(文系) 24/29 (M=14/17、D=9/11)
(理系) 21/27 (M=10/12、D=11/15)

後輩の女子学生に進学を勧めるかについての回答：

(1)勧める
(文系) 16/29 (M=11/17、D=4/11)
(理系) 12/27 (M=6/12、D=6/15)

(2) 勧めない / どちらとも言えない (前期課程までは勧めるという回答も含む)

(文系) 13/29 (M=6/17、D=7/11)

(理系) 13/27 (M=5/12、D=8/15)

(注) 次のような回答が含まれている。

文系

○あまり高学歴だと女性は嫌われる傾向があるということ、研究室内に女性が少ないと、男女関係のトラブルが頻発し、人間関係が難しくなりがちだから後輩には勧めない(D)

○女性の場合強く自分を保てる人でなければきつい世界だから、あまり他人には勧められない(D)

○女の子がたくさんいたほうが居心地がよいから後輩に勧める(D)

○就職が女性に不利という噂を良く聞くが、こうした状況で大学院に進学し、研究者を目指すことはかなり覚悟があるので、あまり積極的に勧めません(D)

○依然として男性社会で、会話の上で女性が話しづらい内容が話題になることも少なくなく、女性が結婚を機に研究職への道を実際に絶つという場合もあるため、男性の先生方から「女性の院生を育てにくい」という内容の話を聞いたことがある / 差別といわないまでも、性別に基づいた判断がされるため、後輩に特に勧めることはないが、研究活動が好きな後輩には、これは取るに足らない問題なので、勧めたい(D)

○研究者になりたいなら勧めるが、婚期や出産が遅れること、大学院がそれを支援する態勢を持っていないこと、閉鎖的なのであまり好意的に受け取られないということは一応説明する(M)

理系

○民間企業も修士の学位を求めるので、修士までは勧める / 博士については民間企業も採用率が低いし、ポストクなどの任期制の職も、例えば5年任期でも3年ぐらいで継続審査があり、妊娠して1年産休や育児休暇を取ったら事実上2年で結果を残さなくてはならず非常に精神的に厳しいので、博士課程は勧めない(D)

○良かった / 研究を続ける気がなければ、勧めない / せっかく学位を取っても結婚、出産でやめる人がある(D)

○奨学金をもらって、学生生活を長く送るよりも、社会人になって後に学位をもらう方がいいと思うし、特に女性は年齢によって就職も困難となるので、修士までは進めるが、博士までは勧めない(D)

○女性でも一生できる仕事を獲得することができるから、良かった(M)

○私個人は指導教官との衝突などもあったが、話し合いなどの結果、周囲の理解と協力が得られた / 学業と出産等の個人の行為が交差して仕事を辞めたり、結婚や出産をあきらめるという状況があるという問題点を伝えた上で、希望する人には勧める(D)

6) 身の回り相談に乗ってくれる大学院卒業の女性はいますか / 相談したいことはありますか。

(アンケート設問 4 - 3)

(1) 相談に乗ってくれる女性は

いる

いない

(文系) 16/29 (M=11/17、D=4/11)

11/29 (M=5/17、D=6/11)

(理系) 16/27 (M=8/12、D=8/15)

13/27 (M=5/12、D=8/15)

(2) 相談したいことは

	ある	特にない
(文系)	16/29 (M=10/17、D=5/11)	5/29 (M=3/17、D=2/11)
(理系)	20/27 (M=8/12、D=12/15)	2/27 (M=2/12、D=0/15)

相談したい事項：

(文系)

研究生生活全般、就職、結婚と学問の両立、結婚・出産・育児などの問題、育児休暇後の復帰、恋愛相談など

(理系)

将来の進路や指導教官の対応、研究室の運営、研究生生活全般、就職、遠隔地勤務、就職後の性差別、働く年数、結婚、出産の時期と研究のペース、結婚と学問の両立、結婚・出産・育児などの問題、育児休暇後の復帰、恋愛相談、人間関係、日常の悩みなど

7) 女性研究者が少ない理由は、男性の意識(家事・育児参加が少ない、女性の能力への偏見等)(注1) 女性が働きにくい職場環境、仕事と家庭の両立支援策がない(注2) ことなどがあげられていますが、これに似た状況は大学院にも見られますか。(アンケート設問 4-4)

このような状況は

	見られる	見られない
(文系)	10/29	6/29
(理系)	8/27	16/27

(注1) 男性意識については次のような回答があった。

文系

○男性の教授や院生は、女性に対して、自分たちと別枠だと思っていて、・・・「まあ、女性なので・・・」という軽い一言で・・・女性としては不自然に感じる(M)

○例えば上の学年の男子院生から「女には哲学はできない」といわれのない中傷を受けたことがあるなど、女性の能力を蔑視する意識が多かれ少なかれ男性にあると感じることがごく稀にある(D)

○ある先生に「女が学問の場にいること自体が許せない」といわれ、他にもセクハラも日常茶飯事の先生もいる(D)

理系

○私が所属している研究室では、家事への理解・仕事と家庭の両立支援は極めて少なく、仕事一辺倒が良しとされていると感じる/大学院進学は良かったが、この研究室では絶対働きたくない(D)

○結婚、出産育児の負担で女性は研究に没頭できず、それが仕方ないという理由は、結局この世界で上がって行けるのは女性ではなく男性だと思われるからだと思う/大学院であってもそういった感覚的なことは何も変わることはないと思う(D)

○大学院に関しては、学ぶ立場であるので、女性への支援はあまり必要ないと思う/むしろ女性で大変だからという偏見で、審査を甘くしておまけの学位取得者がいることが問題で、女性に失礼だと思う(D)

○(女子は理系に向いていないなど)女性の能力への偏見はあると思う(M)

(注2) 女性が働きにくい職場環境 / 仕事と家庭の両立支援策がないことについては次のような回答があった。

文系

- 競争意識の激しい人達の中なので、出産や育児などの休暇はなかなか難しい(D)
- 男性と同じ条件で深夜まで研究室に居残って研究することは困難である / 支援の有無よりも、女性の研究者としてのキャリアが性的な理由で途切れる可能性が高いと先輩の研究者や同僚から思われていることそのものがハンディだと思う(D)
- 地方への赴任、留学などで、仕事と家庭の両立は困難だと思う(M)
- 出産、育児についてのサポートが少ない / 育児休暇を取ると研究が遅れるので、その後の復帰が心配(M)
- 結婚、出産適齢期と重なるし、大学院には、結婚・出産に対する支援体制やそれを奨励する雰囲気もない(M)
- 研究生活には体力を要し、家事・育児との両立となると一層です / 体力的なことは男性には敵わないので、女性が働きにくいことが女性の研究者が少ない理由です(M)

理系

- 育児休暇や産休が任期制の職の場合特に取りづらい(とってよいのであろうが、休んだ分の代償は大きい)ので、私の回りの学生の間では学生のうちに子供を作ったほうが気楽という意見さえある(D)
- 研究はブランクが辛いので、出産・妊娠とかのタイミングは難しく、キャリアを積まなくてはならない時期がそういう時期と重なるので本当に気が思い / 最近学振でやっと休みが取れる制度ができたそうだが、いち早く結果を出して欲しいポストから見れば、こんな時期に・・・と腹立たしく感じられても仕方がない(D)
- 実験だと夜遅くなってしまうことが多いので、家庭を持つ女性には働く時間が決められている企業のような職場の方がいいのかもしれない(M)
- 体力が乏しいので、研究室に長い時間いるとつらいが、早く帰ると批判の対象となり、帰りづらかった(D)

(注3) その他、次のような回答があった。

文系

- 学会発表や学術論文の上では男女比はほぼ対等なのに、現実に教職についている女性研究者が少ないのは、研究職の採用で女性だから落とされるということもあるように思われる(M)
- とりあえず数が少ないので居心地が悪い(D)

8) 男女間での就職状況・就職先の違いはありますか。(アンケート設問 5)

	男女間で違いがあると思う	特に違いがあるとは思わない
(文系)	14/29 (M=7/17、D=6/11)	8/29 (M=6/17、D=2/11)
(理系)	12/27 (M=4/12、D=8/15)	11/27 (M=7/12、D=4/15)
	分からない	
(文系)	6/29 (M=3/17、D=3/11)	
(理系)	0	

(注) 指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

- 自分が大学院に入って(ということはここ7年) 同じ研究室の女性で大学で職を得るなど研究職についた人は一人もいないのに、男性はみなどこかの講師になっている(D)
- 女性はどうしても非常勤になりがち(D)
- 研究者として就職された女性の方が、あれは女性枠だと噂されていたことはショックでした(D)

理系

- 修士卒で一般企業に就職の場合内定者の大半が男性という場合がある(D)
- 結婚出産による退職を企業が配慮するので、大学院卒になると、就職が不利な状況が多いと思う(D)
- 男性は学校の敷いたレールに乗って進路を進む方が多い(M)
- 企業も教育機関や研究所もすべて男女平等になってきたと思うが、ラボのポストによっては男性を優先する人もいる/民間の企業の方が女性のためのシステムができているからという理由で企業を希望する女性もいるようである/男性はやりたいことを優先できるのに対して、女性は長く続けられそうな環境を条件に就職先を探す傾向が見られる(D)

【大学院一般】について

(何らかの点で) 困難と感じている	特に問題はない/よく分からない
(文系) 22/29 (M=11/17、D=10/11)	2/29 (M=2/17、D=0/11)
(理系) 19/27 (M=8/12、D=11/15)	5/27 (M=3/12、D=2/15)

その他(指導教員や研究室にかかわる問題)

(理系) 5/27 (M=4/12、D=1/15)

(注) 指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

- 就職活動と修士論文の容易の両立が難しい(M)
- 夫婦が同居することが非常に困難。同種の研究をやっている場合、絶対に同じ大学には就職できないから(D)
- 専門分野が特殊であると、研究職の道は厳しいので、院生時代も精神的、肉体的に不調になる人も多い/「35歳以下」などの制限の公募があるが、留学生も含めていろいろな状況に置かれているから、年齢制限をすべきではない(M)
- 文系では大学院修了は就職に際してメリットがない(M)
- 就職に関するビジョンを立てにくいので、不安を感じている人が多いと思う(D)
- 文系の部門が縮小傾向にある(D)
- 研究者の需要の少なさ/勤務地が不確定なので、結婚相手の職業によって別居の可能性がある(M)
- 研究者の需要が非常に減っているので、若手研究者間の競争が高くなっており、そのために大学院在学中から陰湿ないじめ(足の引っ張り合い)があるように思う(D)
- 最近は公募が増えているが、本当に公募で公平に決まっていずに、内々で決まっていることもあるように思われる(M)

理系

- 専門性を高めることで逆に企業側に「視野が偏狭になる」という偏見をもたらしているという話をよく聞くが、労力や費やした時間に見合う仕事につく保証もないことも気がかりです(D)
- 教授が就職を甘く見ている(簡単に決まると思っている)(D)
- 指導教官が学生を科研費の道具としてしか見ていないため、学生の就職活動など将来のことに全く非協力で、就職活動で休むとデータが出なくなるので文句まで言われ、就職活動がしづらい状況にあり、結局学位取得が確実にあった2月頃でも採用があるポストクしか受けられない(D)
- ポストクの待遇が悪いと思う/企業就職に進む人が多い(D)
- 推薦主体のため、自由応募を受ける際に教官にいい顔をされない(M)
- 本人の能力ではなく、教授からの紹介、推薦があるかどうかで採用されるのは問題だと思うが、私の周りではそういったことが普通に行われている(M)
- 理系研究職の就職活動は企業と研究室のつながりの上に成り立っている土壤があるが、研究室間でそのつながりの強さに差があり、詳しい説明がないので戸惑った/ここの就職活動時期は他分野よりも半年近く早いので、異なる分野と比較できずにつらかった(M)
- 学位取得が可能かどうか卒業2ヶ月前まで分からないので、就職活動を行う時期が不確定になってしまう/数年で結果を出し、任期制職員で働くのはとても大変なので、大学の研究室の助手ポストを増やし、長く研究を進める場所を作って欲しい(D)
- 不安定な収入と不安定な任期(D)
- ポストク先はあるものの、ポストク余りの現状であるらしいので、その次の進路がない/期限付き雇用が氾濫している(D)

【女性の問題】について

(男性と比べて)困難なケース

	が多いと感じている	特に問題はない/よく分からない
(文系)	18/29 (M=11/17, D=6/11)	11/29 (M=6/17, D=5/11)
(理系)	17/27 (M=5/12, D=12/15)	10/27 (M=7/12, D=3/15)

(注) 指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

- 機会は平等かもしれないが結局は男性のみ採用が現実(M)
- もともと女性が少ないので、就職に関するデータが少ない(M)
- 期限付きの研究プロジェクトの場合、途中で出産を許されるかどうか不明。近くに保育所がない場合が多い(D)
- 女性の方が生活に困っていないとみなされる傾向がある(M)
- 結婚して子供がいると就職がしにくいようである(M)
- 就職している人が殆どいないので、女性は特別視される(D)
- 修了時24歳で、女性としては厳しい/敬遠される(M)
- 女性という点で男性と一緒に仕事をしづらいのではないかというハンデ(M)
- 採用側は、女性研究者を採用する明確な意思があるかどうか、きちんとした情報を出して欲しい(D)
- 就職に既婚が損とか、出産したことが損とか聞くが、噂ではなく、透明性が欲しい(M)

理系

- 年齢的に公務員以外の就職は困難で、就職しにくいことがなによりも問題（D）
- 博士卒の女子学生が試験のない公的機関に就職することについてはあまり知らないので不安を感じている（D）
- 特に女性は年齢も問題にされる気がする（D）
- 女性は、博士号を取って企業に就職するのは年齢によってかなり狭められる／大学の教職に就くのも男性優先であることが多い（D）
- 社会的に就職難になると、影響を受けやすいのは女性で、特に院卒だと年齢が高くなり難しい気がする（D）
- 生涯働ける場所を探すのが難しい（D）
- 大学院では差別的なものは感じられないが、就職活動では男女の採用の仕方に違いを感じる面が多々あった／例えば、面接で「女の子は面接でしっかり答える子が多いから、採用試験の点数や書類だけでは皆女の子になる」といいながら、実際の採用率は男：女＝6：1で、明らかにおかしく、性差も判断基準に含まれている／そういう失礼きわまりのない発言を平気で会社の上層部がするような会社が多く存在していることを知りました（D）
- 研究職の場合入社してから数年で退職されることは大きな痛手になるので、女性を採用しない企業があるのも事実であり、夫婦のうちどちらかが辞めなければならない場合に、辞めることを選択するのが女性であることが多いと思う（M）
- 育児との両立が可能かどうか／博士終了後、子供が成長するまでのブランクがあった場合、仕事につけるのかという不安（D）
- 企業の研究職に関しては、雇用機会均等法を就職案内にアピールしていても、実際は雇用均等ではないと思われる（D）
- 現実には募集しているのは本当は殆ど男性だが、決まりとして男性と女性は何人募集すると広告に出してほしい（D）

9) 女性大学院生の数が少ない理由は何だと思いますか。女性研究者を増やさなくてはならないと考えますか。現在、30%という目標値がありますが、この数字をどのように考えますか。
（アンケート設問 6 - 1）

女性大学院生の数が少ない理由：

	(文系)	(理系)
研究や学問に対する興味や関心／その分野に女性学生が少ない	6	11
結婚、出産、育児の問題	6	5
社会全体の考え方／社会制度（本人を取り巻く人々の意識、男性社会の慣行、女の幸せの考え方等について）	8	6
その他		

女性研究者を増やすことについて：

	(文系)	(理系)
増やしたほうがよい	10/29	2/27
増やすべきだと思わない	12/29	21/27
どちらでもない／分からない	1/29	0

数値目標の設定について：

	(文系)	(理系)
賛成	7/29	4/27
不賛成	15/29	16/27
どちらでもない/分からない	2/29	2/27

(注) 指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

- 3割を入れようというような方針は女性蔑視につながると思う(M)
- 30%という数値の基準はよく分からないが、女性研究者の研究環境を整えるためには数を増やすために目標値を設定する必要はあると思う(D)
- 増やさなくてはならないとは特に考えないが、女性であるために断念する人が多いとすれば配慮してもらうのは良いことと思う(D)
- 増えてくれれば嬉しい/女性の院生が50%程度になれば、研究者を目指す上でそういった結婚・出産・育児への不安も緩和される(M)
- 分野によっては女性特有の視点が必要になる場合もあるかもしれないが、特に男女比にこだわる必要はなく、こだわるべきではない(M)
- 就職や就職後の昇進格差(見えない)が是正されないと、女性研究者は増えない/思いきって大学ごとに女性枠を明示して積極的に採用していただければ、女性研究者は増えると思う(D)
- 可能な環境を作ることが優先されるべきで、増やそうという試みは必要ない(D)
- 結婚、出産、家庭との両立ができれば、結果的に増える/男女を問わず優秀な研究者を輩出するカリキュラムや人材育成を問うことが大切(M)
- 無理して増やす必要はない/遊び半分の女子学生は要らない/個人的には女が少ないほど女にとって居心地がいい/文系にはすでに30%ぐらいいる(D)

理系

- 研究とプライベートの両立への不安、年齢差別や外からの偏見に対する就職の不安が理由になっていると思う/女性研究者を特に増やさなければならないと思わない(D)
- 確かに女子院生は少ないが、それは性差ではなく、個人の問題だと認識している/それよりもその先の就職に関して性差を感じたり、女性にとって不利な状況があるから大学院に行く価値がないと思う女性が多いと思う/「女性研究者を増やさなくてはいけない」というような考え方には反対で、それよりも女性も男性も働きやすい職場環境を作ることには力を注いで欲しいし、そうすれば自然に女性の研究者も増えると思う(D)
- 女性の場合、人生設計は多様なので、金銭面でも負担の多い学生を続けている人は少ないと思う/特に増やさなくてはと思わない(D)
- 一流のラボほど朝から晩まで、土日なしなので体力的な問題が大きい/結婚、出産、育児もしたいと迷いも出て研究に打ちこめない/能力のない人を無理にポストにつけても惨めなので、無理に増やすのはどうかと思う(D)
- 女性院生の数が少ないのは、出産・育児が一番の理由であるが、若いうちに結婚・出産したいか、大学院で学ぶのを優先するかは本人の意志であるので、女性研究者を無理に増やすべきとは特に思わない/男性中心の大学院であると思うので、同等な環境を整えるのは大変重要であるが、目標30%という数値を定めるのはあまり意味がなく、環境を整えることを目指すべきだ(M)
- 理系の場合、学部での女性比率が低いので、院生も少なくなるし、家庭に入りたい女性も少なく

ない/無理して増やす必要はなく、女性にとって働きやすい環境が整えられるにしたがって、今後も自然に増えていくと思う/工学系では圧倒的に男性が多く、国立の薬学系でも4割程度であるから、30%という目標は難しい(M)

- 10) 女性大学院生の数を増やす方策：科研費などの研究費、奨学金、各種の賞に女性を対象としたものを設けること、教員・研究領域に一定数の女性を確保するための目標値を設定すること、男女を対象にした育児支援の奨学金を設けることをどのように考えますか。
(アンケート設問 6-2)

科研費などの研究費、奨学金、各種の賞に女性を対象としたものを設けることについて：

	(文系)	(理系)
女性院生を増やすための適切な方策と思う	6/29	5/27
適切だと思わない	15/29	11/27
どちらでもない/分からない	1/29	0

教員・研究領域に一定数の女性を確保するための目標値を設定することについて：

	(文系)	(理系)
女性院生を増やすための適切な方策と思う	6/29	5/27
適切だと思わない	15/29	7/27
どちらでもない/分からない	1/29	0

男女を対象にした育児支援の奨学金を設けることについて：

	(文系)	(理系)
女性院生を増やすための適切な方策と思う(賛成)	20/29	19/27
適切だと思わない	2/29	2/27
どちらでもない/分からない	2/29	0

(注) 指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

- 先輩の就職先が開かれている「現実」を目にすること/質問に書かれているものすべてが必要(D)
- アフーマティブ・アクションは絶対反対/ただし、男女を問わず対象とした育児支援は欲しい(D)
- 女性が活躍しやすい体制を整えてもらうのは同姓としてはありがたいと思うが、「女性だから」というだけで優遇されるのはあらたな偏見を生むことにつながると思う/あくまでも「能力のある」女性を対象にしたものでなければならぬと考える(D)
- 優秀な研究者はいろいろな施策がなくても実力が認められているし、国際的なフィールドで日本が勝つためにも、女性を対象とした科研費、奨学金、賞などは必要ない(M)
- 女性だけ恵まれることは望んでいない/そういう意味で男女を対象とした育児支援の奨学金はいいと思う/女性用研究費、奨学金、賞、目標値を掲げるくらいなら、保育園を作ったり、ベビーシッターを雇ったりするほうが前向きである(M)
- 制度の存在自体が女性を劣位とみなしている証拠だから、女性に優遇する制度には反対/保育施設や出産時の優遇、男女を対象とした育児支援は賛成/就職先の環境が整っていない(M)

- 就職先の確保が第1 / 夫婦の職場が同じ地域になるように考慮してもらえると嬉しい (D)
- 教員・研究領域に女性の数を増やすことは賛成 / その分野における女性の意見がほしい / 男性の多い社会で立場的に強く言える女性がいて欲しい (M)
- 女性を対象とした奨学金は大歓迎で、目標値も良い (目標値よりも強い拘束が欲しいくらい) / 育児支援は独身だから分からない (D)
- とても素晴らしいと思う / 大学院だけの問題ではなく社会全体の問題と思う (M)

理系

- 女性のみを対象とした奨学金や一定数の女性を確保するための目標値を設定することなどは逆差別となり適しているとは思わないが、現在社会の状況ではありがたいと思う / 男女を対象とした育児支援の奨学金は是非勧めるべきであるが、経済的面だけではなく、子供の教育に費やす時間の確保やフレックスタイム制の導入なども必要である (D)
- 研究費、奨学金、賞で女性を特別扱いしたり、無理矢理女性を採用することは差別を助長し、正当な評価を歪めると思うので、絶対にやめて欲しい (D)
- このように女性研究者という括りを作ったり特別視することが女性研究者を育てにくくしていると思う / 出産は女性しかできないので、育児休暇、支援は今以上に必要 (M)
- 男女を対象にした育児支援は賛成で、女性の社会進出が原因で子供の数が減少しているのだとすれば、そういう支援によって改善されると思う (D)
- 教員・研究領域での女性の目標値を設定することは平等な教員採用の障害になると思う (M)
- 男女比は気にしたことはないが、研究施設のインフラの整備と就職の道を広げることが必要 (D)
- 教員、研究領域に一定数の女性を確保する目標値を設定することはいいかもしれない / 出産、育児などで少しブランクができて働けるように、賞とか、名誉みたいなものがあると復活できやすくなると思う (D)

11) 自由記入

例えば次のような意見があった (一部抜粋)

- 研究職 (女性) は、経済的にも人として親になれる状況に到達した時、生物としては親になれることが困難な時期に入ってしまう可能性が高く、万一子供を持てば研究者としてハンデを負うことにしかならないという現状を何時までも放置することにより、高学歴で自己実現を目指す女性がその代償として遺伝子を残す状況を奪われるということは・・・亡国に繋がる重大な問題だと思う (D、文)
- 女性研究者が少ないのは、女性自身の選択による所が大きいですが、それは、研究者になるまでの過程があまりに厳しいのが原因 / 男性はキャリアアップ志向から逃れられないが、女性は発想を自由に転換していく / 女性を研究の場において置きたいなら、学会の競争原理やイヤらしい内部の対立とばかげた慣行はなくすべきである / もっと他に魅力的な職業と生き方がたくさんある (D、文)
- 女性の参画が大切だといっている男性研究者も実は家庭そっちのけということも多分にあると思うので、少しでも仕事と家庭を両立できる空気を研究者環境の中でつくって欲しい / 研究者全体の質を上げることが最終的な目的なら、女性院生の増加だけではなく現在の人材育成のやり方そのものを変える必要がある (M、文)
- 研究もしたいし、結婚、出産、育児もしたいと思うと、努力だけではどうにもならないことが出てくるが、なんとか頑張って研究を続けていきたいと思う / このような問題を取り上げてくださることは嬉しいし、数少ない女性研究者として研究の環境の改善に取り組んでいただけたら、自分も参加したい (D、文)

○薬学部では6年制への改訂が行われるが、女性にとっては長すぎるという不安があり、大学院進学が減少するかもしれない/しかし、「研究者を目指すならば、大学院に進学しなければならない」という意識があれば、優秀な人材が増える土壌ができるかもしれない(M、理)

○ジェンダーフリーだか知りませんが、行きすぎた保護の弊害が今の現実であって、質問を作成した機関及び運営している方々が正しい男女平等の認識を持つことが先決です/前時代的な考え方を改めてください(M、理)

○このアンケートは大学院教育に的を絞っているが、社会で働いている女性に対する支援制度や男性も対象にした育児支援制度の充実を図って欲しい/社会の制度を充実させれば、様々な分野で能力のある女性が活躍できるのであって、社会制度の基盤作りが一番重要と思う(M、理)

○なぜ無理矢理に女性院生を増やそうとするのか分からない/唯一ネックとなるのは出産の問題で、高齢出産は体に悪いので、晩婚・少子化対策とし、学生結婚の奨励や育児支援対策が必要である(M、理)

○大学は夜遅くに部外者が入れるような環境なので各棟に警備員を置いたり、安全な環境を作っ
て欲しい/結果を急ぐ余り夜遅くまで実験をすることは良いといえず、指導教官がそれを理解してくれるような環境ができれば、女性研究者も研究を続け易くなる(M、理)

男性回答者の回答の集計と分析

文系男性回答者数 $N = (M、D、不明) = (17、14、1) = 32$

理系男性回答者数 $N = (M、D、不明) = (2、16、1) = 19$

1) 大学院に進学をした理由 / 進学をためらった理由 (アンケート設問 2 - 1)

進学した理由 :

(文系) 研究・勉強したいため 30/32 (M = 16/17、D = 13/14)

(理系) 研究・勉強したいため 19/19 (M = 2/2、D = 16/16)

ためらった理由 :

(文系) 将来の就職不安 (M = 1、D = 0)、経済的問題 (M = 1、D = 1)、その他

(理系) 将来の就職不安 (M = 0、D = 3)、経済的問題 (M = 0、D = 4)、その他

2) 進学についての家族などの理解・経済的支援 (アンケート設問 2 - 2)

理解・経済的支援が得られたという回答 (両方あるいは一方):

(文系) 26/32 (M = 13/17、D = 12/14)

(理系) 19/19 (M = 2/2、D = 16/16)

理解が得られなかったという回答 (十分ではないを含む):

(文系) 2 (M = 1、D = 1) (理系) 0

経済的支援なしという回答 (入学から現在までのどれかの時点、自宅生の場合は住居・食費以外):

(文系) 10 (M = 5、D = 4、不明 = 1) (理系) 0

3) 入試時点でカリキュラムや研究内容以外に欲しかった情報

(アンケート設問 2 - 3)

(文系)

(1) 研究者となる道程 / 学位取得後の進路 (OD率、就職状況など) に関する情報 :

12 (M = 9、D = 2、不明 = 1)

(2) 奨学金・科研費・学振等による経済的支援に関する情報 : 3 (M = 2、D = 1)

(3) 指導教員の指導方針や研究室にかかわる情報 : 2 (M = 1、D = 1)

その他 (入試、留学、福利厚生、学生生活、研究資料等についての情報)

(理系)

(1) 研究者となる道程 / 学位取得後の進路 (OD率、就職状況など) に関する情報 :

12 (M = 1、D = 10、不明 = 1)

(2) 指導教員の指導方針や研究室にかかわる情報 : 5 (M = 0、D = 4、不明 = 1)

その他 (研究資料等についての情報)

4) 進学後、問題だと思っていたり、改善を必要と思っている事項

4 - 1)【大学院一般】(アンケート設問 4 - 1)

問題ありと指摘された事項の回答数：

(文系)

指導教員の対応(研究テーマの決定を含む)/研究室の在り方・雰囲気等(注1)

8(M=6、D=2)

奨学金やその他の経済的支援の在り方(注2)

18(M=9、D=8、不明=1)

その他の大学支援体制の在り方(就職、施設、事務組織など)(注3)

その他

(理系)

指導教員の対応(研究テーマの決定を含む)/研究室のあり方・雰囲気等(注1)

6(M=0、D=5、不明=1)

奨学金やその他の経済的支援の在り方(注2)

4(M=0、D=3、不明=1)

その他の大学支援体制の在り方(就職、施設、事務組織など)(注3)

その他(カリキュラム等)

(注2) 指導教員(研究室)の対応/研究室の在り方・雰囲気等で問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

指導教員の指導が殆どない/ほったらかしにされている気分(D)

指導教員は全く指導してくれないし、不公平なので不快だ(D)

指導教員はまったく面倒を見てくれず、学生という弱い立場で改善を求めることができなかつた/これが大学への最大の不満です(M)

教員の職務が何かを明示して欲しい/奨学金の充実は言わずもがな、大学にとって院生とはどのような存在なのか明示すべき(D)

特定の個人に嫌がらせをする教員がいるということも耳にする(M)

理系

教授が就職希望の学生を無理に進学させたりして、就職する人への扱いがひどくなっている(D)

修士、博士ともに授業料を納付している点を忘れずに、指導を行って欲しい(D)

(注2) 奨学金等の決定で問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

奨学金制度があまりにも貧弱過ぎる(D)

貸与ではなく、給与の奨学金の給付人数をもっと増やして欲しい(M)

奨学金についてはいろいろなものがあった方がよい/学振の特別研究員になれるかなれないかによって生活パターンが大きく変わってくるのはちょっと問題がある(D)

授業料の負担が大きく、免除申請してもなかなか許可が下りない(D)

理系

授業料免除の規定が厳しすぎる(D)

(注3) 大学の支援体制で問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

事務部門の学生対応業務が低劣で辟易し、情けなくて苦情も言う気にならなかった/実務経験のない学生には通用するだろうが、社会人学生から見れば、左遷された落ちこぼれ集団のように見える(D)

理系

研究環境が非常に劣悪で研究設備・空間の充実が全く図られていない(D)

4 - 2)【女性の問題】(アンケート設問 4 - 1)

問題ありと指摘された事項の回答数：

(文系)

指導教員の対応(研究テーマの決定を含む)/研究室の在り方・雰囲気等(注1)

1(M=0、D=1)

結婚、出産、育児休暇からの復帰等にかかわる問題(注2)

1(M=1、D=0)

その他の大学支援体制の在り方(厚生・研究等の施設、特に女性対応施設、事務組織など)(注3)

その他(学生生活に関する情報など)

(理系)

指導教員の対応(研究テーマの決定を含む)/研究室の在り方・雰囲気等(注1)

2(M=0、D=2)

結婚、出産、育児休暇からの復帰等にかかわる問題(注2)

2(M=1、D=0 不明=1)

その他

(注1) 指導教員(研究室)の対応で問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

指導教官との対応が分からずに孤立し、最終的に研究が行き詰まってしまう例が多い(D)

理系

教員の女性への対応には問題があり、セクハラに近い言動、行動がある(D)

(注2) 結婚・出産及び出産後の復帰について問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

晩婚になることは間違いないが、これは男女共通なので一概に女性の問題と言えない/院生同士で結婚した場合には何らかの金銭的優遇措置があってもよいと思う(D)

理系

身近に例がないが、出産、育児面での援助があった方がいい(D)

結婚、出産、育児休暇では、休んだだけ研究が遅れるが、それはしかたないことで、問題は感じられない(D)

(注3) 大学の支援体制で問題ありと指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

大学にどのような支援体制があるか不明である(M)

【女性の問題】で「特になし」という回答の数：

(文系) 12/32 (M = 12/17、 D = 6/14) (理系) 14/19 (M = 2/2、 D = 10/16)

5) 大学院に進学をしてよかったと思うか/後輩の女子学生に大学院進学を勧めるか。

(アンケート設問 4 - 2)

進学してよかったという回答：

(文系) 23/32 (M = 13/17、 D = 9/14)

(理系) 15/19 (M = 2/2、 D = 12/16)

後輩の女子学生に進学を勧めるかについての回答：

(1) 勧める

(文系) 19/32 (M = 8/17、 D = 8/14)

(理系) 11/19 (M = 1/2、 D = 9/16)

(2) 勧めない/どちらとも言えない(前期課程までは勧めるという回答も含む)

(文系) 13/32 (M = 8/17、 D = 4/14)

(理系) 7/19 (M = 0/2、 D = 7/16)

(注) 次のような回答が含まれている。

文系

女性の学習環境が良くなるきっかけになるから、女性もどんどん入ってきて欲しい(D)

大学研究者は魅力的な職業だから、実際、後輩の女子学生にも進学を勧めている(M)

難しい研究を行っている女性に対して社会の理解がないので、勧めない(M)

理系

これからの研究室の雰囲気次第で勤める（D）

女子学生の場合、20代の若いときを大学院の研究室という狭く収入のない世界で過ごすこと、婚期が遅れることが足かせとなって進学を断念することが多いと聞くが、それらの難関を越えられるだけのモチベーションがある人ならば、進学を勤める／とはいえ、やはり経済的な問題と学位取得後の生活のしやすさについて改善が望まれる（D）

6) 身の回りに相談に乗ってくれる大学院卒業の女性はいますか／相談したいことはありますか。
(アンケート設問 4-3)

(男性の回答は削除)

7) 女性研究者が少ない理由は、男性の意識(家事・育児参加が少ない、女性の能力への偏見等)(注1) 女性が働きにくい職場環境、仕事と家庭の両立支援策がない(注2) ことなどがあげられていますが、これに似た状況は大学院にも見られますか。(アンケート設問 4-4)

このような状況は

	見られる	見られない
(文系)	9/32	22/32
(理系)	3/19	11/19

(注1) 男性意識については次のような回答があった。

文系

差別は見られる／研究は男がするものだと思いこんでいる人は人文系の研究者の中には案外多いのではないかと(D)

女性ができが悪いから少ない／勉強ができなくても「女性だから」で済ませようとする(M)

(注2) 女性が働きにくい職場環境／仕事と家庭の両立支援策がないことについては次のような回答があった。

文系

差別はあると思う／男性の家事育児への参加が少ないこと、女性の能力への偏見、仕事と家庭の両立支援策が大学にないことが原因(M)

私の研究室ではそれほど顕著でないが、結婚、出産で研究室を離れていく女性院生が少なくなっているのも事実である(D)

夫が転勤になった場合に単身赴任できるか、出産した場合の休暇などの理由から、女性は男性に比べて就職が大変だという噂がある(M)

特に感じない／非常にフェアである／家事育児などと研究を両立させるには相当な覚悟があるので、その意味では一般論としては女性に不利な点はある(M)

むしろ民間企業よりも仕事と家庭は両立しやすいと思う／特に女性が働きにくいとは思えない(M)

理系

研究時間が長く、危険な試薬を扱うので働きにくい環境であると思う(D)

女性には長時間の研究・実験をする体力がない人が多いように感じる／大学の要求が過剰とは思わないが、そのことが女性が研究職に進みにくい要因となっていると思う(M)

当研究室の話ではないが、研究者同士で結婚したとき、女性の方に研究を諦めさせるようなプレッシャーを感じるという話を聞いたことがある / 話によると、結婚後、研究者としての生活の乱れを結婚した女性側が何とかするべきだという回りからのプレッシャーがあるそうです (D)

(注3) その他、次のような回答があった。

私の分野では特に若手女性研究者が多いが、男性は、将来が安定しているとはいえない研究職になるために大学院生活を続けることをためらうのに対して、女性は、そのプレッシャーと少し距離を置いて、家計を支えるという義務意識が薄くてすむ故に、悪条件の研究生生活を続けている (D)

8) 男女間での就職状況・就職先の違いはありますか。(アンケート設問 5)

	男女間で違いがあると思う	特に違いがあるとは思わない
(文系)	8/32 (M=3/17、D=4/14)	12/32 (M=6/17、D=6/14)
(理系)	4/19 (M=1/2、D=3/16)	13/19 (M=1/2、D=11/16)
	分からない	
(文系)	10/32 (M=6/17、D=4/14)	
(理系)	0	

(注) 指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

統計的には女性の方が職に就きにくいのかもかもしれないが、それがジェンダーのためなのか、能力のためなのか自分には判定できない (D)

私達の研究室では卒業後、専門に直結して研究職、教授職に就くことは極めて難しく、これは男女にかかわりないと思われる (D)

良く分からないが、女性研究者を増やそうという動きがアフーマティブ・アクションとしての弊害となって、男性研究者の逆差別につながらないかと懸念される (M)

最近では女性の方が就職しやすいということをよく聞くので正直残念です (M)

理系

博士課程卒業生の就職状況に関しては、男女間での差異はあまり感じたことはない (D)

人数的なこともあるが、比較的女性の方が早く就職が決まっているような気がする (D)

女性の方が営業、男性の方が研究職につくと思われるが、これは、本人の希望による所が大きく、性差別からくるものではないと思う (D)

業界によっては就職のしやすさで男女間の差異が根強く残っていると聞く (D)

博士課程まで行くと、少し女性の一般企業への就職が難しくなるような話は聞いたことがある (D)

【大学院一般】について

(何らかの点で) 困難と感じている 特に問題はない / よく分からない

(文系) 21/32 (M=9/17、 D=11/14) 6/32 (M=5/17、 D=1/14)
(理系) 9/19 (M=0/2、 D=9/16) 4/19 (M=0/2、 D=4/16)

その他(指導教員や研究室にかかわる問題)

(理系) 2/19 (M=1/2、 D=1/16)

(注) 指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

就職口が絶対的に少ない/就職に必要なスキルや経験を院生時代に効率よく身に付けられない
/希望する分野の就職を諦めた時の他の選択肢が狭すぎる(D)

ポストが少ない/若手に任期制を導入しつつ、一方で現職者の定年を延ばしたりするのはおか
しいと思う(D)

少子化のため、就職が減るのではないか/公募は増えているが公平な審査は行われているのか
(M)

全体的に受け皿が少なく、制約が大きい/特に私のような社会人経路で年齢のハンデがある場
合深刻である(D)

博士課程修了の人の状況を見ていると不安(M)

院生の数に比べて教員ポストが絶対的に少ない/国の予算をもっと大学教育に振り向けるべき
である/何年も不安定な状況に置かれているODの問題は人道問題である(OD)

理系

仕方ないと思うが、所属している研究室や研究分野によって就職にバラツキがあると思う(M)

特に博士課程に言えるが、やってきた専門性ばかり重視され、個人の持つ資質への評価が低い
(D)

修士を卒業すると就職時にメリットがあるかもしれないが、博士号取得のメリットについては
疑問を覚える(D)

一般に就職活動に要する時間が長すぎる(D)

【女性の問題】について

(男性と比べて)困難なケース

が多いと感じている

特に問題はない/よく分からない

(文系) 9/32 (M=4/17、 D=5/14) 15/32 (M=8/17、 D=6/14)

(理系) 6/19 (M=1/2、 D=5/16) 8/19 (M=0/2、 D=8/16)

(注) 指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

自宅から通学している女子院生の場合居を移してまで職を得ようとする気概が少ないと思う
(M)

既婚の女性が育児しながら専任職として働けるような社会的構造が不十分(D)

夫が転勤になった場合に単身赴任できるか、出産した場合の休暇などの理由から、女性は男性
に比べて就職が大変だという噂がある(M)

就職は労働市場における市場取引と考えるので、交換にバイアスを生むプログラム(男性優位)
をそこで直裁に問題にしてしまうのは得策ではなく、争点を変えた方がよい(D)

分からない/アフーマティブ・アクションの動きがあることは聞いている(M)

理系

実際の就職状況は分からないが、身近な研究室の助手や助教授、教授などのポストに女性の研究者がついているのは非常に稀だから、任期の区切られていない職への就職は困難な状況にあると思う(D)

結婚、出産の問題等でやや就職を拒まれるような状況がまだあるように思う(D)

- 9) 女性大学院生の数が少ない理由は何だと思えますか。女性研究者を増やさなくてはならないと考えますか。現在、30%という目標値がありますが、この数字をどのように考えますか。
(アンケート設問 6 - 1)

女性大学院生の数が少ない理由：

	(文系)	(理系)
研究や学問に対する興味や関心 / その分野に女性学生が少ない	7	3
結婚、出産、育児の問題	1	3
社会全体の考え方 / 社会制度 (本人を取り巻く人々の意識、男性社会の慣行、女の幸せの考え方等について)	8	8
その他		

女性研究者を増やすことについて：

	(文系)	(理系)
増やしたほうがよい	11/32	4/19
増やすべきだと思わない	12/32	14/19
どちらでもない / 分からない	2/32	0

数値目標の設定について：

	(文系)	(理系)
賛成	6/32	2/19
不賛成	16/32	14/19
どちらでもない / 分からない	2/32	2/19

(注) 指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

文系大学院では女性の割合は少ないとは思われない / むしろ、女性が生活の不安なしに研究に打ち込める環境作りが肝要と考える(D)

一生研究職につきたいという明確な目標意識が女性は少ない / 30%の目標値は極めて非現実的である(M)

何百年前から大学における学問は特に男性によってになわれてきたが、性別による差がないのであれば、男女区別なく進学すればよいだろう / 目標値についてはよくわからない(M)

研究することが魅力がないと感じているのではないか / 今でも就職市場が厳しく、院生の水準もばらつきがあるため、これ以上院生を増やして研究者を「粗製濫造」するのは反対(D)

理由を特定すれば陳腐なジェンダー問題のイデオロギーに回収されてしまうので、「分からない」としておく / 研究者のジェンダーバランスの悪いことは認めるが、だから女性研究者を増やす必要があるとは思わないし、数値目標に意味があるとは思わない(D)

大学等の研究者に今後女性が増えていかなければ、女性院生も増えないわけで、まず、女性研究者が仕事をしやすく活躍できる支援体制を整えなければならない / 30%をできるだけ短期間に実現し、その後は40%を目標に (M)

単に女性が研究者を志向していないという理由であり、増やす必要は必ずしもなく、男女の垣根を作らず、フェアな競争をすればよい / 30%という数値目標については、意味のないアフーマティブ・アクションだと思う (M)

女性院生が少ないのは、大学院や大学が男性社会のイメージが強いことや、結婚、出産などに対する支援が十分でないためと思う / 無理に増やしたり、目標値を設定したりせずに、イメージの払拭や支援の充実などにより女性が研究者になりやすい環境を作った結果として、女性研究者が増えれば、それが適正な割合といえると思う (M)

理系

女性院生が少ないのは性差によると思う / それ以外に男女の志向・得意分野の違いも影響している / 数値目標を上げて無理矢理増やすのは馬鹿げている / その結果として男性研究者に影響が出たら、逆差別である / 女性研究者が「増える」事は結構だが、「増やす」ことには断固反対である (D)

研究室によって異なるので、その理由は一概に言えないが、社会的背景、学問分野の特性など複合的な原因による所が大きいと思う / 女性研究者を増やす必要は認めるが30%という数字にこだわる必要はない / 自分の専門分野では女性院生は増えており、学問分野が発展し、研究環境が整えば、活躍する女性研究者も増えると思う (D)

研究室での不規則な生活や、男性が多いことによる雰囲気、女性にとって結婚を考えた場合大学院への進学が必ずしもプラスになるとは考えられないことが原因 / 研究室での雰囲気作りや研究への新たな視点を得るためには女性研究者は必要であるが、30%はかなり到達が難しい設定と思う (D)

女性は結婚してという考え方がいまだに世間で優勢であることが理由と思うが、本人を取り巻く人々との中で育った本人の意識が要因である / 育児支援制度などの環境を整えて自ずと率が上昇するならともかく、無理をして上昇させる必要はないと思う (D)

男性女性がそれぞれの発想を生かす上でも、女性研究者が増えることは望ましい / まずは30%、最終的には男女ほぼ同数近くの研究者の割合が望ましいと思う / 女性の院生が少ない最大の理由は、これまでの因習、回りの精神的、経済的な支えの少なさだと思う (D)

個人の自由なので、あえて増やさなくてはならないと思わない / 出産、育児などの問題によって意に反して進学を断念せざる状況にある人に対しては改善されるべきだと思う / 具体的な目標値などは問題にならず、広く女子学生にアンケートを取ることで判断するべきだと思う (D)

生物学の分野で、女性院生の比率が低いのは、高校の理系を分けた時点から理系の女性比率が少なかったからだと思う / 増やさなくてはならないとは思わない (D)

- 10) 女性大学院生の数を増やす方策：科研費などの研究費、奨学金、各種の賞に女性を対象としたものを設けること、教員・研究領域に一定数の女性を確保するための目標値を設定すること、男女を対象にした育児支援の奨学金を設けることをどのように考えますか。
(アンケート設問 6 - 2)

科研費などの研究費、奨学金、各種の賞に女性を対象としたものを設けることについて：

(文系)

(理系)

女性院生を増やすための適切な方策と思う	6/32	4/19
適切だと思わない	17/32	14/19
どちらでもない/分からない	1/32	0

教員・研究領域に一定数の女性を確保するための目標値を設定することについて：

	(文系)	(理系)
女性院生を増やすための適切な方策と思う	3/32	2/19
適切だと思わない	16/32	16/19
どちらでもない/分からない	1/32	0

男女を対象にした育児支援の奨学金を設けることについて：

	(文系)	(理系)
女性院生を増やすための適切な方策と思う(賛成)	13/32	12/19
適切だと思わない	8/32	4/19
どちらでもない/分からない	1/32	0

(注) 指摘された事項には例えば次のものがある。

文系

育児、出産といった問題よりも、研究室の狭い人間関係(=男社会)を敬遠するのだろう/増やさなくてはならないのではなく、能力があり、行きたいのに行けない人を行けるようにすることが大事/程度とか目標値は必要ない(D)

ジェンダー配置に対する構造的な変革が必要/今の日本の労働構造が変わらない限り、女性の負担増加なしに女性院生の数を増やそうとしても、女性の地位と福利の向上はないと思う(D)
 科研費等の審査を行う側に、女性を増やせば長期的に女性院生は増えるかもしれない/教員についてはスタッフの一人に女性を入れることで状況は変わるだろうから、それを目標にしてもいいかもしれない/育児支援よりはまずは女子学生を支援する奨学制度を充実させてみてはどうか(D)

設問に掲げられた方策は結構だが、「一定数の女性確保の目標値」はよほど慎重な配慮を要する(米国の大学における逆差別の問題にも通じる危険がある)(M)

研究者になるという大義名分をはずし、民間就職後の再勉強としての枠を増やすのであれば、女性研究者は増えると思う/賞や奨学金も定員枠などに女性枠を設けることは反対/私を含め生活に窮している院生が多いのに、そのような枠を作ることは本当に研究志向の院生の意欲を阻害する(D)

そうした保護政策的なやり方は、イデオロギーを再生産して問題を一層根深いものにするだけではないかと考える/そろそろ「ジェンダー」などという陳腐なイデオロギーそのものを無効化する方向に転換すべきで、「男性」「女性」という二項区分のカテゴリーが誠に気持ちが悪い(D)

理系

「育児支援」を除けば、女性だけの枠を設定することは意味がなく、かえって格差を広げると

思う / 現在日本の保育所が足りないので、大学内部に保育所を併設したら、雇用対策と育児支援の両立ができると思う (D)

女子院生を増やすには、大学において憧れとなる研究者や興味を持てる研究を見つけることができる機会を高めることが必要で、そのためには現在の研究者の見直しが必要となる / 良い研究者・教育者 (公平な人・・・) が多くなると、自然と女性は増えると思う (D)

男女平等というなら、女性だけへのルールなどやめて欲しい / ポスドクの数自体が多く職に困っているから、もっと大きな視点で改革して欲しい (D)

イメージを良くするため、女性雑誌の特集を組む / 女性関連の企業直結の大学院を作る / いろいろな助成優遇の措置の波及効果を測定する目的で、女性を確保する目標値を定めても良いと思う / 育児支援の奨学金は賛成 (D)

高校の理系文系を分ける時点で理系の女性の比率を増やせば、生物学の女性院生の数は増えると思う (D)

11) 自由記入

例えば次のような意見があった (一部抜粋)

最近『キャンパス・セクシュアル・ハラスメント対応ガイド』(沼崎一郎著、嵯峨野出版) という本を読んだが、女性研究者を取り巻く環境の厳しさについてあらためて考えさせられた / 普段十分意識されていない「男のヘゲモニー」の弊害について、男性側に問題意識を持ってもらうように、例えば大学院のカリキュラムに必須セミナーを設けるなど、動いてみたらどうだろう (D、文)

大学女性のことも大事だろうが、研究者を目指す院生全般のことにもっと目を向けて欲しい。本当に研究を進めたい院生が生活に窮している状況は研究の進展を阻害している。ODの問題はもっと深刻で、そちらに予算を配分するなどの施策の方が有効と思う (D、文)

女性問題だけではなく、研究者の社会的待遇の低さが大きな問題で、国からの明確な指針や支援が不可欠と思う (D、理)

(4) アンケート結果を読んで

第4部 岩村 秀

アンケート結果から受けた印象・個人的な意見を、調査事項番号順に列記しました。

調査事項番号

2)3.

(大学院進学に際して、全般的に情報不足である)

学部から大学院に進む際に、今後ますます大学間を移動する流動性が期待されてくるので、諸外国・諸分野にある Graduate School Directory に相当するものを、我が国でも整備する必要があることをこの意見は強く示唆している。

また進路相談に対して、気軽にかつ信頼性をもって対応できる組織を大学にまた学会に設ける必要性を示唆している。アメリカでは、MentorNet というウェブサイト (<http://www.mentornet.net/>) が1997年にNPOとして立ち上げられ、1:1の電子メールによるカウンセリングとして成果をあげている。大変参考になるのではないか。

4)1.

(競争的外部資金による期限付きの研究プロジェクトが増えて来て、その途中で出産・育児休暇をとることが増々困難となって来ている)

国立大学が法人化されて以来、教員が忙しくなり、自分のペースで仕事を進めることが難しくなってきた。残念ながら、大学の組織に教育研究の場として望まれる寛容の精神が入り難くなってきている。

4)2. 及び4)3.

(途中で辞めた女子学生の声を汲んでほしい。女性科学者を鼓舞する方策は歓迎する)

アドバイザー、先輩など人からの直接受けるアドバイスだけでなく、適切な雑誌・書籍が手近にあれば有益であると考え。最近 *Time* 誌 (March 28, 2005 Vol. 165, No. 12) に女性科学者の能力を高く評価する記事 (WHO SAYS A WOMAN CAN'T BE EINSTEIN?) が生まれ、女子学生、女性研究者を勇気づけている。しかし、日本のジャーナリズムはこれを取り上げておらず、社団法人大学婦人協会の方々も必ずしも承知していない。猿橋賞受賞者の手記を英文で出版した "My Life" (内田老鶴舗、318ページ (2001)) も有益であると考え。これらを多くの大学の部局・教室図書館に配架し、学生の目に止まるようにするのが望ましい。

4)4. 職場環境

(研究室に滞留時間が長いことをよしとする美学? がはびこっている。深夜まで研究を続けるにはあまりにも無防備である。民間企業では考えられない)

そのとおりで一言もない。労働安全衛生法を遵守せねばならないことが、このほかに多々なおざりにされている。外国の大都市にある大学では、女性のトイレには施錠してあり、研究者、学生は支給

された鍵を使わないと出入りできないような注意が払われている。

6) 1. 2

(なぜ女性、女性と言うのか。イコルフットイングが原則であり、数値目標を決めて達成を目指すようなものではない。アンケートを出した側の認識を問う。どのような施策を取るにしろ、確かにある程度のマスが必要なので、ノーベル賞受賞者を 50 人出そうと言うような意味の数値目標は必要である。文系ではすでに 30% を越えている所も多く、無理をして女子大学院生を増やす必要はない。質の低下に繋がる危険がある)

女子学生は意外と覚めた意識をもっているという印象を受けた。ただし、まだ若く純真であり、男性中心の日本の社会の現実を十分認識していないためとも思われる節がある。我が国にはちょっと調べただけで、下記のような女子学生・女性科学者のみを対象とした研究助成・賞がある。これらに対する申請者・非推薦者の数は毎年極めて多く、競争率は高く、減少の傾向は認められていない。いましばらく、女性に特化した研究助成・賞の意義は残るのではなからうか。

添付資料：女性科学者を対象とした研究助成・賞

1.(公益信託)女性自然科学者研究支援基金

運営：女性科学者に明るい未来をの会

活動内容：自然科学分野における女性科学者の学術研究における活動を助成・奨励し、学術の発展に寄与すること。

- ・ 猿橋賞(1980年創立)自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者に、毎年贈呈。
- ・ 研究助成(1990年度から)海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、研究助成する。

発足年月日:1990年3月13日文部省認可(女性科学者に明るい未来をの会の活動はそれ以前からある)

当初信託財産 15 百万円

受託者：UFJ 信託銀行

2.(社団法人)大学婦人協会

女子高等教育の推進、女性の地位向上、国際理解と親善を目的に活動を行っている。

活動内容：勉学、研究において優れた成果を収められるよう奨学金を提供。

- ・ 国内奨学金(大学院生)
- ・ 社会福祉奨学金(障害をもつ大学院生、大学生)
- ・ 安井医学奨学金(医学あるいは薬学専攻の大学院生)
- ・ 守田科学研究奨励賞(若手女性科学研究者)
- ・ 国際奨学金(IFUW加盟国会員)

1946年に活動を始め、国際大学婦人連盟(IFUW)に加盟している

<http://www.jauw.org/>

3.(公益信託)林女性自然科学者研究助成基金

運営：林女性自然科学者研究助成基金運営委員会

活動内容：自然科学、特に化学の基礎的研究に携わっている女性研究者に対して助成を行い、もって我が国の学術の進展に寄与すること。

発足年月日：昭和 58 年 1 月 31 日 主務官庁文部科学省

当初信託財産 20 百万円

受託者：(照会先・電話番号) 中央三井信託銀行(本店法人営業第二部,03-5232-8911)

http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k_topm.html

4.(公益信託)山村富美記念女性自然科学者研究助成基金運営委員会

運営：山村富美記念女性自然科学者研究助成基金運営委員会

活動内容：自然科学特に化学の基礎的研究に携わっている女性研究者に対して助成を行い、基礎的分野の研究者の増加に努め、もって我が国の学術の進展に寄与すること。

発足年月日 平成 12 年 8 月 31 日

主務官庁 文部科学省

当初信託財産 115 百万円

受託者：(照会先・電話番号) 中央三井信託銀行(本店法人営業第二部,03-5232-8910)

http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k_topm.html

5.(公益信託)山路ふみ子専門看護教育研究助成基金

活動内容：内外の大学院、研究機関等で研鑽をする看護婦に対する研究助成事業を行い、もって社会に有用な人材の育成に寄与すること。

発足年月日平成 2 年 12 月 28 日 主務官庁厚生労働省 当初信託財産 500 百万円

受託者：(照会先・電話番号) 中央三井信託銀行(本店法人営業第二部,03-5232-8910)

http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k_topm.html

6. 日本女性科学者の会

女性科学者相互の友好を深め、各研究分野の知識の交換をはかり、女性科学者の地位向上をめざすとともに、世界の平和に貢献することを目的として、1958 年 4 月に「日本婦人科学者の会」として設立され、1996 年に「日本女性科学者の会」と改称された。

活動内容 講演会(会員及び非会員)の開催 「日本女性科学者の会奨励賞」の贈呈(1996 年より毎年 1、2 名) 「学術年報」の発行 「日本女性科学者の会ニュース」「賞記念特別号(冠ニュース)」の発行 出版刊行物

連絡先 住所〒259-1292 平塚市北金目 1117 東海大学工学部生命化学科内

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~kunugi/sjws/>

6)2. 育児支援等

(育児支援その後の復帰に対する奨学金などの制度を充実させることが重要で、これがなされれば女

子学生、女性研究者の数は自ずと増えてくる)

フランスの大学や CNRS(国立科学研究センター)の教員、研究員は、子女が教育を受けている間は、定年が延長される。少子化にブレーキが掛かる一つの要因となっている。

7) その他

(アンケート集計の結果に対する日本学術会議のアクションに期待する。全体として難しく、取り組み甲斐のあるアンケートであった)

本分科会の責任は重大である。

(Academic carrier に女性が少ないのは、はじめから少ないのか、途中で止めるのが多いのか、きちんとした統計を示してほしい)

添付書類：社団法人日本化学会 個人会員数

女性会員の占める割合の年齢分布

	会員数			女性会員の割合 / %
	女性数	男性数	合計	
20 歳代	1,728	8,112	9,840	17.5
	1,364	7,189	8,553	15.7
30 歳代	733	6,287	7,020	10.4
	687	6,871	7,558	9.1
40 歳代	367	5,752	6,119	6.0
	314	5,688	6,002	5.2
50 歳代	268	5,389	5,657	4.7
	273	6,323	6,596	4.1
60 歳代	177	3,421	3,598	4.9
	223			
70 歳以上	60	2,366	2,426	2.5
年齢不明	24	213	237	10.1
	35	280	315	11.1
合計	3,357	31,540	34,897	9.6
	2,896	31,524	34,420	8.4

上段 2003 年 9 月 下段 2000 年 10 月

- 1) サンプル数：男・女が約半々、理工・文も約半々とバランスしているように思います。
- 2) 分野：文系の中を「経済・経営」と「人文・社会」とに分けたほうが結果を集約しやすいようにみえます。
- 3) 就職：女子学生が分野によらず就職に関して不公平感を持っているようにみえます。
- 4) 進学目的：分野により異なっているようです。「人文・社会」では、研究者指向が強い。この場合「研究者=将来大学のスタッフ」というイメージがある。「理工系」では知識の深度化やスキルアップといった色彩が強い。将来は獲得した知識やスキルを生かす場をイメージ。「経済・経営」はその中間か。
- 5) 修学年齢：分野により年齢の幅に違いがあるように見える。「理工系」<「経済・経営」<「人文・社会」であろうか。ジェンダー問題に対する意識も、年齢の幅が広がると意識が深まる傾向があるように見える。
- 6) 数値目標に対する反発：男女を問わず、女子大学院生の30%という数値目標に対して反発がある。反発の強さは大雑把であるが、「理工系」>「経済・経営」>「人文・社会」であろうか。

1999 年に男女共同参画社会基本法が公布・施行され、男女の人権の尊重、社会における制度又は慣行についての配慮、政策等の立案及び決定への共同参画、家庭生活における活動と他の活動の両立、そして国際的協調といった基本理念を掲げている。女性の社会参加については多くの調査があるが、2004 年の男女共同参画学協会連絡会の調査では、45 の理工系学会約 40 万人の会員のうち、女性は約 2 万人だけ。既婚率を見ると、企業所属会員では 50 歳代の独身女性の割合が非常に高く、40 歳代前半以下では男女差がなくなる。これは 1985 年の男女雇用機会均等法、1992 年の育児休業法の影響と考えられる。他方、大学と公立研究所については法律施行後も男女差が縮まっていない。そして結婚も出産もあきらめて、低い役職で研究を続ける女性の姿が浮き彫りになっている。

今回のアンケート調査への女性大学院生約 50 名の回答では、「男女間での就職状況・就職先の違い」が「ある」が 26 名、「ない」が 19 名、「女性研究者を 30%まで増やそうという目標値」に賛成が 11 名、反対が 31 名、「女性を対象とした研究費、奨学金、各種の賞」に賛成が 11 名、反対が 26 名、「男女を対象にした育児支援の奨学金」に賛成が 39 名、反対が 4 名だった。記載欄には「3割にしようという方針が女性蔑視」、「それよりも女性も男性も働きやすい職場環境を作ることに力を注いで欲しいし、そうすれば自然に女性の研究者も増える」といった意見があった。

勿論、社会の実態を良く知らないことや、女性枠は男性への逆差別と感じる意見などもその背景にはある。しかし、いろいろな状況で差別を感じながらも、女性だからといって優遇されることをよしとせず、「特別扱いはしてほしくない、機会さえ均等に与えられれば、あとは実力で競争する」という頼もしい考え方も見て取れる。

このような若い女性たちの自負心や自尊心が、男性重視の風潮や社会制度の不備の中で傷つけられていけないために、女性であることが不利な社会を改めるには何をすべきか、真剣に考えることが求められている。

男女共同参画は今日では国際社会における共通指標の一つとなっている。我が国でも平成11年6月の基本法成立を受け新たな展開が見られつつある。しかし、社会基盤や産業構造に大きな変化があったとはいえ、婦人に参政権が与えられてから60年が経過したにもかかわらず、個人の行動が社会通念や規範に規定される傾向は依然として強く、女性の潜在能力が活かされているとは言えない状況にある。

女性研究者問題に関してはこれまでも広範な調査や研究が行われて来た。日本学会会議でも20年に亘って関連する諸問題に取り組んでいる。また第18期学術体制常置委員会報告「創造的な若手研究者養成に関する基本的考え方と現状の問題点」では、一部大学院生についても言及している。しかし、今回分科会が行ったアンケートは、対象が全て現役院生であるという点で特徴的であった。

アンケートで得られた回答には、これまでに各方面から指摘されていた内容と重複する部分も多く、すでに問題点について適切な措置が取られたものもある。しかし、現役院生でなければ見過ごされがちな問題の指摘や、改められた制度の中にもなお検討の余地が残されているとした回答も見受けられた。今後こうした回答の中身が、“女だからと言う理由で排除されない環境づくり”に活かされて行くことが望まれる。

以下得られた回答を中心に問題点のいくつかをまとめた。

教育環境

入試前の情報提供

先入観や横並び、周りが進学しないから・・・など自分の進路を決められない者が増えている。また社会人、外部からの進学希望者の増加に伴って、情報提供を求める声が高い(説明会や研究室見学、研究体験、HP充実による教育方針、修了後の進路、経済的支援、育児、発表論文、国際交流、先輩の活躍状況に関する情報など)

事務組織の対応

院生対応業務の改善充実 (必要で正確な情報の迅速確実な徹底:メール、HPの活用)。

授業について

大学院教育の質の飛躍的向上(大学院で学ぶ魅力の向上、コースワークの充実、副専攻履修、博士号の高価値化、多様な価値観への対応、前提となる学部教育の改善・充実など)

就職支援

情報提供を含む就職支援の充実

研究環境

院生の増加にインフラが対応できていない。図書、データベースの所蔵・整備、情報の提供、フィールドワークなどの予算措置

生活環境について、女性として困る点が男子院生より多い（鍵のかかる更衣室設置、保健管理センターへの女医の配置など）

優れた院生の潜在能力を早期に開花させる手段（安定的な研究生生活の支援、研究推進の大幅な自律性、研究組織間移動の自由度高上、国際的研究・教育ネットワークへのアクセス機会の提供など）

研究費

科研費申請に際しては研究者番号のみを用い、氏名、性別を記入させない

先端的研究課題を追求するプロジェクトの分担・補助作業に従事する院生に対して、プロジェクトへの貢献度に応じて研究助成金の伸縮的な配分を認め、安定的な研究生生活を維持可能にする

経済的支援

日本学生支援機構奨学金

返還免除の扱いについてのより柔軟な対応（免除の基準が示されないのはおかしい、アルバイト収入も考慮され免除が受けられない、免除基準が親の収入というのは疑問、研究職の免除制度が無くなったのは残念、免除申請に親、兄弟の源泉票を求めるのはおかしいなど）

国費留学が決まった時点で即、打ち切られるのは困る、予備的な面接をして欲しい、一種奨学金は何段階かに分ける、女性限定があっても良い、研究室からの金銭的支援が少ない文系にももう少し割り当てて欲しい

他の支援

貸与でない給付制奨学金を増やして欲しい、社会人入学者に対する支援（学振関係は年齢制限があり不利）

女性院生の人数に応じた助成金の支給

社会環境

育児支援

男女でワークシェアリングするなど既存の労働の在り方を抜本的に変える。育児支援施策拡充（困っているのに大学が助けるべきだ・・・と言っているのではない）

育児支援奨学金制度の設置、大学の敷地内に保育所が欲しい、育児休業制度に院生対象のものは少ない、結婚後の復帰支援策、賞や名誉的なものがあると再就職に有利

女性研究者のための相談窓口を設置し、収集した意見や要望を施策に反映させる

その他

PD以降の環境整備：博士を雇用する側の受入習慣を含め、研究者の流動化促進

産・官・学の新しく多様なキャリア・パスの構築と意識改革、活発な人材交流（研究職、ノンアカデミックキャリアパス開拓など：現状では修士の方が年齢的にも就職は有利で“学ぶほど就職機会を減らす”システムとなっている「女性は 名採用する」と公告する、論文博士の撤廃を含む学位制度の見直しなど）

女子の大学院入学者を増やす、学協会に女子の会員・役員を増やす

初等教育の段階から継続的に国民のリテラシー向上を図る（勉学に関するモチベーションが少なくなっていることへの対策）

女性研究者との交流促進、交流を希望する中学校・高等学校との間をコーディネートする機関を設置し活動資金を支援。女性研究者のロールモデルの提示

はじめに

21 世紀以降の多様性を価値とする社会において、人材の育成は、単に男子のみにかかわる案件ではあり得ない。女性研究者の育成も、外国人のそれと同様に今後の重要な課題となる。女性の教育・研究活動にかかわる諸種の支援と対策は、単なる労働力の補完者としての女性の活用という域を越えて、新しい発想と多様性を価値とする今後の学術文化の創成にかかわる重要課題として把握されねばならない。そこで、これまでに提出されている諸種の資料を踏まえ、かつ、日本学会会議学術体制常置委員会研究者養成分科会によって実施されたアンケート結果をも参考としながら、現代の女性研究者養成にかかわる課題を整理し、若干の問題提起を試みることにする。

1) 現状から見いだされる課題

進路選択に当たってのエンカレッジメント

女子の高校進学率は、男子のそれを上回るが、大学進学率は、平成 13 年度資料で、短期大学を除けばいまだ 32.7% であり、男子の 46.9% に及ばない。

大学院に関しては、修士女性比率が 34.3%、博士で 27.9% で、学部女子学生の約 3 分の 1 が進学している。ただし、アメリカその他先進国と比較すると、いまだ非常に低比率である。我が国の場合、女子学生に関しては、いまだに学部教育で十分とする意識が支配的であると思われる。

専攻する進路が、かつてのように人文科学分野に片寄る傾向は除々に修正され、社会科学や理工系・農学系への進学者も微増傾向を示してはいる。しかし、女性の進路選択に際して、将来の職場との直結性が男性以上に重視されている。かつての教員養成系への志向がその典型例であるが、医師・獣医・管理栄養士等の資格取得可能な分野が人気専攻分野となっているのも、将来の職場に対する不安と不透明性が進路選択の広がりを妨げていると考えられる。

これらの現状から見て、将来の職場イメージを鮮明にし、そこで働く女性の先輩モデルを明示するなど、女性の未開拓分野に対して、エンカレッジ対策を講じることが必要となる。そのためには、高校の進路指導に協力すること、さらに、高校生の将来ビジョンの多様化対策として、女性の多様なロールモデルを提示することが不可避と考えられるが、その前提として、女性の多様な職場を確保することが必要である。

女性研究者の教育機関で特に留意すべき問題点

広い視野と豊かな教養に欠けるという傾向は、現在の日本の高等教育享受者全般に見いだされる問題であるが、女性の場合、概して専門分野の学術研究に対して真摯であり、設定されたテーマに過度に集中する傾向があると言われる。また、アンケート結果にも見られるように、研究者間にいまだ「無意識の女性蔑視」が存在して、とかく、就職時に不利益が生じがちであるため、それへの対応として専門領域での業績を上げることに熱心な者が多い。その結果、近接領域等、周囲への目配りに欠ける嫌いがある。

専門職の求人場面で、専門業績の多さにもかかわらず女性候補が不採用とされた場合、業績の多さ

だけが将来の可能性のバロメーターではないという理由があげられることがあるが、もし、それが事実とすれば、専門分野への集中と合わせて、隣接領域等に積極的に目配りし、新しい知見を得るための見識と豊かな教養を身につけるべく、当事者たちに努力を要請する必要があり、また、指導する側の支援も必要となる。

女性に不利益をもたらす環境上の問題点

・妊娠・出産・育児にかかわる問題

アンケートにもあるように、大学院在学期間は、女性の妊娠・出産の適齢期であり、また、育児によって生じる諸問題が、研究の継続を困難にする場合が多い。国立大学協会の調査によれば、従来は、学内に設置された保育施設は付属病院の職員向けであるなど、特に学生を対象としたものではなかった。しかし、最近では、職員組合等に依存せず、大学直営の学生も含めた関係者向けのものが新設されるなどして、僅かずつではあるが、保育支援は充実しつつある。この場合、当事者の研究スケジュールの多様性を反映して託児への希望も多様であるから、画一的ではなく、それに応え得るように柔軟な保育対応が必要となる。

・パートナーの転勤等による研究遂行場所の移動

パートナーの転勤、あるいは長期出張等により、院生等の研究中断者が多いが、この機会を逆に利用して、国内外の他の研究機関への参加が可能となるよう支援体制を整えることが肝要である。

海外の大学との提携によるジョイントディグリー制度等は、こうした場合の研究支援として好ましい方法と思われる。

・就職時の不利益

大学における女性教員比率と大学院生比率との落差から見て、女性研究者の増加と女性研究者予備軍(大学院進学者)の向上が直結していないと考えられる。母集団は大きくなっているにもかかわらず、大学あるいは研究所等で研究職に女性を採用する比率は上昇していない。

したがって、博士課程に学んで学位を取得し、専門領域で相応の業績を上げて、研究職に就き難いというのが現状である。もちろん、博士取得者の就職困難は、単に女性のみの問題ではないが、とくに女性に不利益が顕著な問題である。女性の博士課程進学者が少なく、修士課程で就職してしまう者が多いのもこのことと無縁ではない。

2) 教育のポジティブ・アクション

高校生の進路指導への協力

高校生の進路決定に際して、多分野への関心を高めるべく、高校外部者支援が必要であろう。日本学術会議の「若者の科学力増進特別委員会」でも検討されている出前授業などは、効果的なアクションの一つであろう。

その他、高校生対象の大学実験室等の公開も意義がある。

視野の広がりと学際研究意識覚醒のための大学院教育の工夫

・専門性と教養性の有機的な統合カリキュラムの工夫

この問題は、女子学生だけに限られたことではないが、先に述べたように女子学生が自己のエネルギーをとにかく専門に特化しがちなことを考え、よい研究カリキュラムを策定して指導することが必用

かもしれない。

また、カリキュラム上で、学際・複合・新領域的な統合化を訓練する機会を設けることも意義深いかと思われる。近接領域の類似テーマを集めた「クラスター型履修」あるいは、「副専攻制度」等も有効であると思われる。

- ・海外体験の奨励のための留学基金の増設

特に女子学生対象の留学基金を増設し、大学院在学中に留学経験を持たせる。

長期就学制度・中断中の研究支援・復学支援その他

最近、日本学術振興会の科学研究費補助金等に関しても、女性の研究中断への配慮が見られるようになったが、大学院等における研究教育に関しても、中断を介しての長期就学を可能とし、中断中の研究遂行を支援することが必要である。積極的にSCSやITを活用するなどして在宅指導を可能とすること、あるいは、休学中も、随時登校して指導を受けることが出来るような体制を作り、その際の一時的託児を可能にするなど、女性に対する特別の支援が必要となろう。ただし、これらの制度は、必要に応じてはパートナーである男性にも適用される。

女子学生支援のための財政基盤の確立と経済的支援

女性に固有の支援対策として育児支援だけが特化されがちであるが、財政的支援も男性以上に重要である。我が国の場合、女子の大学以上の高等教育に対する理解がまだまだ不十分であるため、女子の大学院生は家人からの経済的支援を受けにくく、研究の遂行に支障を来す場合が多い。したがって、女性向けの奨学金の創設は逆差別ではなく、また、DC、RA制度の充実等、制度的保障と同時に、個別大学においても財源確保に努める必要がある。

就職上の不利益解消のための教育的試み

- ・研究能力開示機会の増大

在学時から内外の学会等における発表の機会を意図的に多く設定して自己の能力を公開させ、それを契機とした共同研究等の機会を発掘させる。学会誌等の論文投稿に関しても、筆頭著者の機会を多くする。

- ・自己プレゼンテーション力とリーダーシップの養成

卒業研究・学位論文などの作成過程においても、学内措置としての「ミニ学会」や小人数ゼミなどを、英語によるプレゼンテーションと討議の機会として活用する。

積極的にチーム研究の機会を設定し、リーダーとしての経験を持たせる。

- ・評価の透明性

女性研究者の就職上の不利益を解消する手段の一つとして、公募制・審査方法の公開・評価の透明性等、整備すべき課題は多い。

長期的展望で行われる研究テーマの設定

持続可能な社会構築のための自然科学的研究テーマの開発とそれへの着手を奨励する。科学史分野のテーマ等、必ずしも、最短・最速を要求されない研究課題の発掘に努める。

3) 女性の登用に関するポジティブ・アクション

数値目標の設定

男女共同参画法の制定以降、その理念の具現化のためのポジティブ・アクションとして、各分野に

において、数値目標が設定される傾向が見られる。例えば、2020年までに政府・省庁・地方自治体・企業等の各分野に30%の女性参画を目標とするとしている。また、国立大学協会では、10年間で国立大学法人の女性教官比率を20%とするという目標が設定されている。

批判的見解をめぐって

このことをめぐって、日本学術会議アンケートでは、男女を問わず反発が強いという結果が出されているが、ポジティブ・アクションにおける数値目標について、言及しておきたい。

我が国の女性専門職の登用率は、諸外国に比べて格段に低く、大学の女性の雇用推進は助手・非常勤講師レベルに止まっている。国立大学協会の調査によれば、教官の教授昇進に関して男女差が大きく、結果として、大学評議会等の政策・意志決定機関への女性参加が遅々として進まないという現状が露呈されている。

アンケート調査において、数値目標を不要と答えた者たちのなかには、大学院における女性の比率上昇のための制度と解している者が多いが、数値目標は、職場における女性登用に関するものであり、ねらいは、就職時の差別解消である。就職時の差別の有無に関する問いに対しては、回答者の回答に男女差があり、「差別あり」と答えた者が、理系男子25%、女子44%、また、差別なしとする回答者は、男子68%、女子44%となっていて、女子学生は、就職時の不利益を実感しているようである。その解消のためにも一定の数値目標を設定するポジティブ・アクションは必要であろう。

また、女性の活躍を困難にする要因として、指導教員や研究室仲間の女性差別的意識が上げられているが、短期間での意識の更改は極めて困難であるので、とりあえず、「研究者集団の横成員としての女性の数値目標」を設定し、現状の不平等を意識化させる必要がある。ただ、いうまでもなく、研究者集団の構成員は研究者としての資質能力によって選ばれるべきであり、「性」を決定的要素とすることは邪道である。しかし、数値目標は、資質能力・業績等に格段の差が見いだせない場合に、「女性」を優先させるためのアクションとしては有効に機能するものと思われる。

参考資料

(1)進学率の男女比関連資料

・大学進学率の男女比

女子の高校進学率は男子のそれを上回るが、大学進学率は32.7%(短大を含めれば、48.5)で、男子の46.9%に及ばない。しかし、昭和23年には男女比が6:1、同50年には、3:1であったのと比較すれば、著しい上昇を示している。

・高等教育に関する男女別親の期待度

依然として男子への期待が高い。

・女性の大学院進学率

大学院の女性比率は、平成13年に、国公私合わせて修士34.3%、博士27.9%で、学部生の約1/3が修士課程以上に進学している。

ただし、アメリカの女性進学率と比すと、1996年で修士55.9%、博士39.9%で、我が国を凌駕している。

(2) 専門分野に関する男女比関連資料

・専門分野別の女性比率

学部の場合、女子学生の比率が高いのは、看護・保健系、生活・総合科学系、人文系、薬学系、であり、低いのは、商船系、工学系、理学系である。

しかし、昭和50年と比較すると、理学・工学・農学の割合は増加しつつある。

* (C) 理学 学部 28.4% に対して、修士 26.1 博士 15.3%

(D) 工学 11.5 修士 8.7 博士 9.2

(E) 農学 42.4 修士 31.2 博士 22.4

* 研究者候補者としての博士課程生は、農学は上昇しているが、工学は一桁にしかない。

* 企業等が研究者不足を補う場合、女性を意図的に採用することはない。(女性で不足を補おうという考え方がない)

(3) 女子学生の職業イメージと進路選択

・女性に顕著な職業と直結した専門志向

女子の場合、大学進学に際して、「将来つきたい仕事を考えて選択した」と答え、実際に直接関係する仕事に就いている者の割合が44.6%に上って、男子の38.1%を上回る。この数値からみて、女性の場合、進路選択に際して将来の職業との関連を重視する者が多く、しかも、初志を貫徹して専門職に就こうとする傾向が強いと考えられる。

・希望する職業イメージの男女比

子どもの職業イメージは、従来とあまり変化が見られない。

・女子学生進路選択の多様化と女性教員の採択

大学院あるいは理工系等への女子学生の進学率の上昇に比して、女性教員の採択率、とくに教授昇任率は、学生の増加と比例しない。

・大学等における育児支援等、女性研究者の支援体制

育児施設は微増傾向にあるが、女性の不足分野に関する特別の処遇体制はいまだ十分ではない。

(9) 男女共同参画推進活動の現状

日本学術会議 化学研究連絡委員会委員

男女共同参画学協会連絡会第3期委員長

相馬 芳枝

日本では、自然科学の分野で働く女性科学者の数は非常に少ない。少子化が著しく進行している我が国では、将来の技術者不足が憂慮されており、女性科学者への期待は高まっている。

自然科学分野での男女共同参画を進めるために、平成14年10月に自然科学系の学協会が連携して男女共同参画学協会連絡会（以下、連絡会と略す。）が発足した。¹⁾ 現在、45の学協会がこれに加盟しており、加盟学協会会員総数約40万人中、女性会員は約2万人で、女性比率は約5%にすぎない。

連絡会では、男女共同参画に関する実態を調査して活動課題を明らかにするために、平成15年に加盟学会全員を対象にして、大規模アンケート調査を実施した。19,291人（男性16,140、女性3,104）から回答が寄せられ、女性の内、大学院生は17.7%を占めていた。この調査結果は、平成15年度文部科学省委託事業報告書「21世紀の多様化する科学技術研究者の理想像 男女共同参画推進のために」としてまとめられた。この報告書は、連絡会ウェブページ（<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>）より入手できる。

このアンケート調査から明らかになった主な点は、次に示される。

1. 研究開発に関する意識に、男女差はほとんどない。
2. 男女の間に明らかな処遇差があり（採用、昇進等）高い役職ほど女性比率が低い。
役職だけでなく、研究費、部下数等において、処遇差は更に大きくなる。
3. 男女共同参画の推進に必要なこととして、「男性の意識改革」、「職場の環境整備」、「男性の家庭と仕事の両立」等があげられている。しかし現実には、育児が女性まかせになっているために、女性の割合が極端に低くなっている。
4. 任期付職、非常勤職に占める女性の割合は高く（女性48%、男性32%）、研究費の面で不利である。女性の非常勤職員では、自由裁量研究費がゼロの研究者が約4割にのぼる。

このアンケートを通じて、女性研究者の卵である大学院生に関して、次の点が必要であることが読み取れる。

- 1) 研究環境を改善して、大学院に進みやすくすること。
- 2) 男性が育児に協力して、男女が共に研究と育児を両立しやすい環境と制度を作ること。

大学院生を含む30才前後に、研究者は頑張ることが必要になり、女性は出産・育児が重なる時期なので、更に負担が大きくなる。

そこで連絡会では、若手研究者や大学院生を支援するために、平成16年末から平成17年3月にわたり、「育児支援に関する提言」、「研究費申請枠拡大に関する提言」の2つを、政府、大学、財団、研究機関等、約400の機関に提出した。この提言も、前述の連絡会HPより入手できる。

2つの提言の骨子を次に示す。

1. 科学技術研究者に適した育児支援制度の整備に関する提言

科学技術の分野は日進月歩の変化が激しく、産休後、なるべく早く教育、研究等の現場に復帰することを望む女性が多い。

- 1) 育児と研究を両立させるために、育児休業取得などの環境作りを促進するとともに、一定枠の支援資金を配分すること。(研究・教育の一部代替、ベビーシッターの一部支援等)
- 2) 男性と女性が共に育児を行って、家庭と仕事の両立を可能にする啓発活動を進める。

2. 研究助成への申請枠拡大に関する提言

文部科学省では、平成16年7月から非常勤職員も研究費の申請ができるように申請枠が拡大された。この申請枠拡大措置がすべての省、大学、財団、研究機関等に適用されることを望む提言である。

- 1) 常勤職の有無に関係なく、すべての研究者が研究費を申請できるようにすること。
- 2) 男女共同参画推進に資する取り組みを奨励し、女性研究者育成を目指しているプロジェクトを積極的に採択すること。

この他にも、連絡会では広い範囲で男女共同参画が進むように、第3期科学技術基本計画への要望書や、日本学術会議に女性会員を増やすための要望書等を提出している。

注1) 連絡会加盟学会は次に示される。

正式加盟学会： 応用物理学会、日本天文学会、化学工学会、日本動物学会、高分子学会、日本物理学会、日本宇宙生物科学会、日本分子生物学会、日本化学会、日本細胞生物学、日本女性科学者の会、日本生態学会、日本原子力学会、日本比較内分泌学会、日本植物生理学学会、日本発生生物学会、日本数学会、電子情報通信学会、日本森林学会、日本神経科学学会、日本生化学会、日本バイオイメーキング学会、日本生物物理学学会、日本蛋白質科学会、日本生理学学会

オブザーバー参加学協会： 映像情報メディア学会、情報処理学会、自動車技術会、日本液晶学会、地盤工学会、日本分析化学会、照明学会、日本技術者フォーラム、精密工学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、電気化学会、日本金属学会、日本応用磁気学会、日本火災学会、日本機械学会、日本データベース学会、日本建築学会、土木学会、日本鉄鋼協会、日本植物学会

3) 関連の報告と資料

この問題に関連する日本学術会議の報告は以下のとおりである。

- ・ 科学者・技術者の人材のさらなる活用を図る男女共同参画制度の整備について
- 理工学系の現状に基づく提言 -
日本学術会議分子生物学研究連絡委員会、生物物理学研究連絡委員会
平成 17 年 8 月 29 日
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-19-t1032-4.pdf>
- ・ 創造的な若手研究者を養成するために - 基本的考え方と日本の現状の問題点 -
日本学術会議学術体制常置委員会 平成 15 年 6 月 24 日
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-18-t995-47.pdf>
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-18-t995-48.pdf>
- ・ ジェンダー問題と学術の再構築
日本学術会議ジェンダー問題の多角的検討特別委員会 平成 15 年 5 月 20 日
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-18-t991-5.pdf>
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-18-t991-6.pdf>
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-18-t991-7.pdf>
- ・ 女性科学者の環境改善の具体的措置について（要望）
日本学術会議 平成 12 年 6 月 8 日
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-17-k132-2.pdf>
- ・ 日本学術会議における男女共同参画の推進について（声明）
日本学術会議 平成 12 年 6 月 8 日
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-17-k132-3.pdf>

その他の関連の資料は以下のとおりである。

- ・ 文部科学省学校基本調査 平成15年度 高等教育機関 統計表一覧
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04011501/004.htm
（男女別大学院生数、男女別・職務別教員数など）
- ・ 平成 16 年男女共同参画白書 - 男女共同参画の現状と施策 -
第 8 章 教育分野における男女共同参画
http://www.gender.go.jp/whitepaper/h16/danjyo_hp/index.html
- ・ 男女共同参画学協会連絡会：「21 世紀の多様化する科学技術研究者の理想像 - 男女共同参画推進のために -」（平成 15 年度文部科学省委託事業報告書）、平成 16 年 3 月
<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/2003enquete/PDF/2004ReportWeb.pdf>

- ・その他の資料は内閣府男女共同参画局ホームページを参照
<http://www.gender.go.jp/>